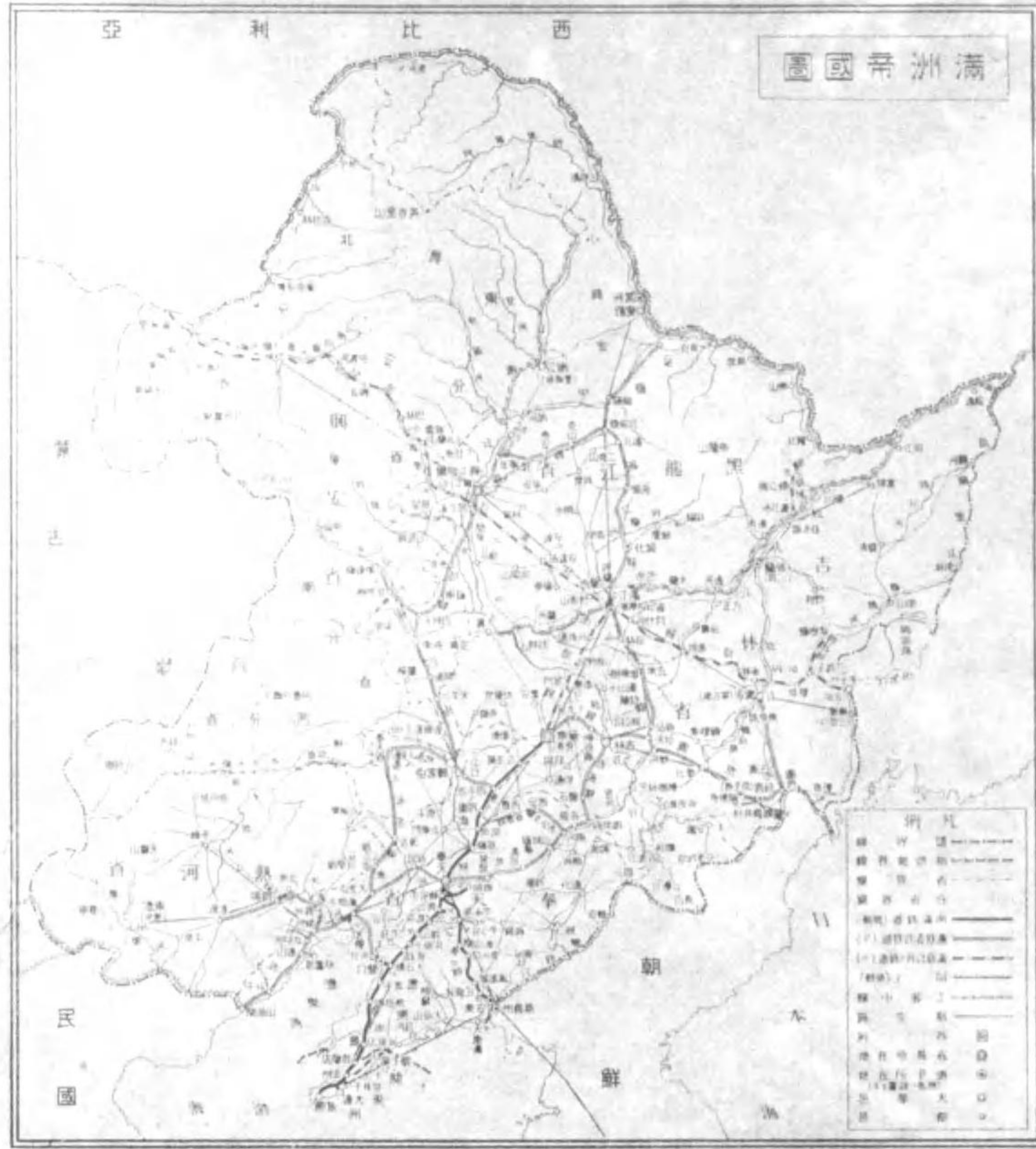


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 2 3 4

始

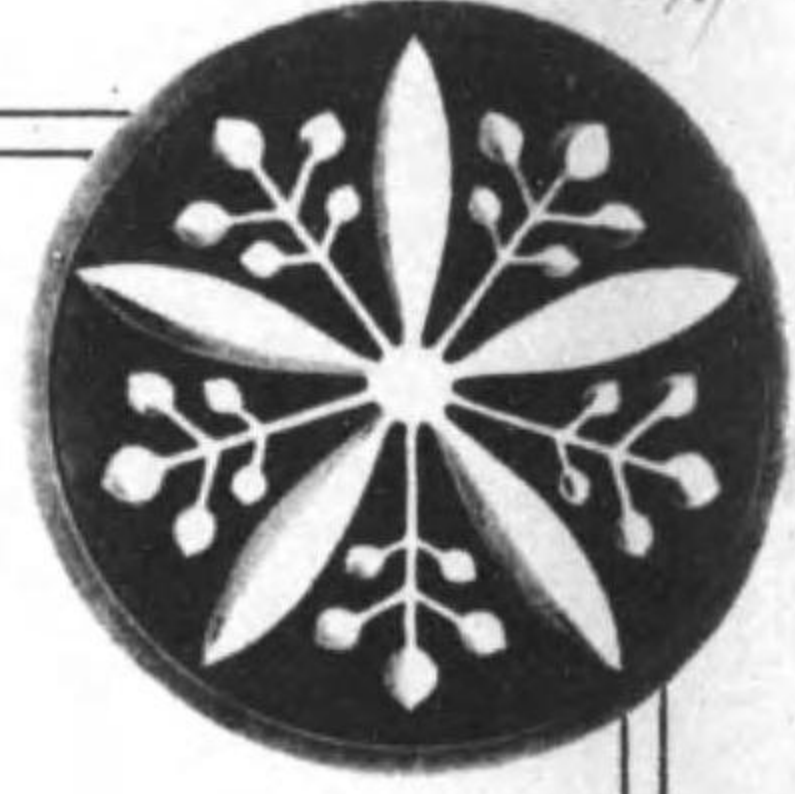




滿洲帝國統治組織表



特268
49



滿洲國皇帝陛下

御來訪記念寫真帖



刊行の辭

善隣滿洲國肇國の基石を据ゑてより四春秋、帝政實施の天恵を得て當に有二歳、其の間、各般の施設併び行はれて萬遺憾なく、國都新京の建設既に完成の域に近づかむとす。されば、特に盟邦の親誼を以て、我が國、天皇陛下、曩に秩父宮殿下を御名代として御差遣せしめ給ふあり、這度滿洲國、皇帝陛下、親しく應へて御來訪遊ばさるゝ慶びを視る。

日本有史以來、海外帝王の正式御來訪ある、實に這回を以て嚆矢とす。昭和聖代の皇威彌々赫耀するを覺ゆると共に、新興滿洲國の激湧たる意義を感ずるや切。而して世界列國の耳目を聳動する亦宜なる哉。御來訪、皇帝陛下、蘭花薫る國都を鹿島立たれてより、東邦の國土春爛漫、遅咲きの櫻花も爲めに期を早めて俱に綻ぶるあり、祥氣遍く全土に滿ち、歡喜齊しく版圖に溢る。日滿兩國の親善、之れに依つて益々堅牢無比たるや疑ひ無し。

本會、昨秋「太平洋軍備大寫真帖」を刊行し、近く又「世界軍艦帖」を公けにせむとすと雖も、其の希ふ處もとより東亞並びに全世界の平和に在り、今爰に日滿兩國和樂の慶を知るに及んで微意亦止め得ざるものあり、期して今次の國家的大盛事を永劫萬代に記念せむとす。

昭和十年四月

帝國軍備研究會謹識

滿洲國皇帝陛下御來訪記念寫眞帖目次

特命近衛師團觀兵式御開兵の兩陛下(口繪)
東京驛前の大奉迎門と其夜景(口繪)

滿洲國皇帝陛下御尊影

滿洲國皇帝陛下御筆蹟

皇帝陛下の御旅程御安泰を祈念せらるゝ

皇后陛下

御對面の慶びを待たれる御尊族方

溥儀氏、潤麒氏及び潤氏夫人

滿洲國々務總理大臣鄭孝胥

鄭國務總理大臣書皇帝訪日之慶

鹵簿新京驛へ向はせらる

新京驛に奉送の日滿大官

新京驛前に整列の儀仗兵

皇帝陛下新京驛にて御召列車に御乗車の利那

御召列車大連驛に御着

大連驛に御出迎への南大將以下日本文武官

大連埠頭入港の御召艦比叡

大連埠頭より比叡に御乗艦

御召艦比叡の 皇帝陛下の御居間

御召艦比叡艦内の御巡視

甲板上の 皇帝陛下

御召艦上より奉迎飛行を觀賞の 皇帝陛下

御召艦比叡の壯姿

奉迎艦嚴島の皇禮砲發射

入港の御召艦を迎ふる群

御召艦横濱に入港す

横濱埠頭に御出迎への秩父宮殿下と御同列にて

御上陸

横濱埠頭より御召列車に御乗車の前

横濱市沿道の奉迎振り

東京驛御着の御召列車

品川驛に奉迎の我大官連

東京驛に御出迎への 天皇陛下と御來訪の

皇帝陛下との御握手

天皇陛下の御紹介にて皇族各宮殿下と御交驩

東京驛前の夜景

鹵簿肅々と丸ビル前を御通過

東京驛前廣場に於ける奉迎者の雜沓

丸ビル前に整列せる奉迎の學童

鹵簿赤坂離宮に入らせらる

奉迎の國防婦人會々員

日滿兩國の國旗を懸す奉迎の東京市兒童

變輿赤坂離宮を出まして宮禁に向はせらる

宮城に參入の御駕

二重橋上の鹵簿

天皇陛下親しく赤坂離宮へ行幸遊ばさる

御旅程第一夜の赤坂離宮々門

宮中御晚餐會場なる豊明殿

御晚餐會當夜の二重橋

御晚餐會の献立表・ボンボニエール

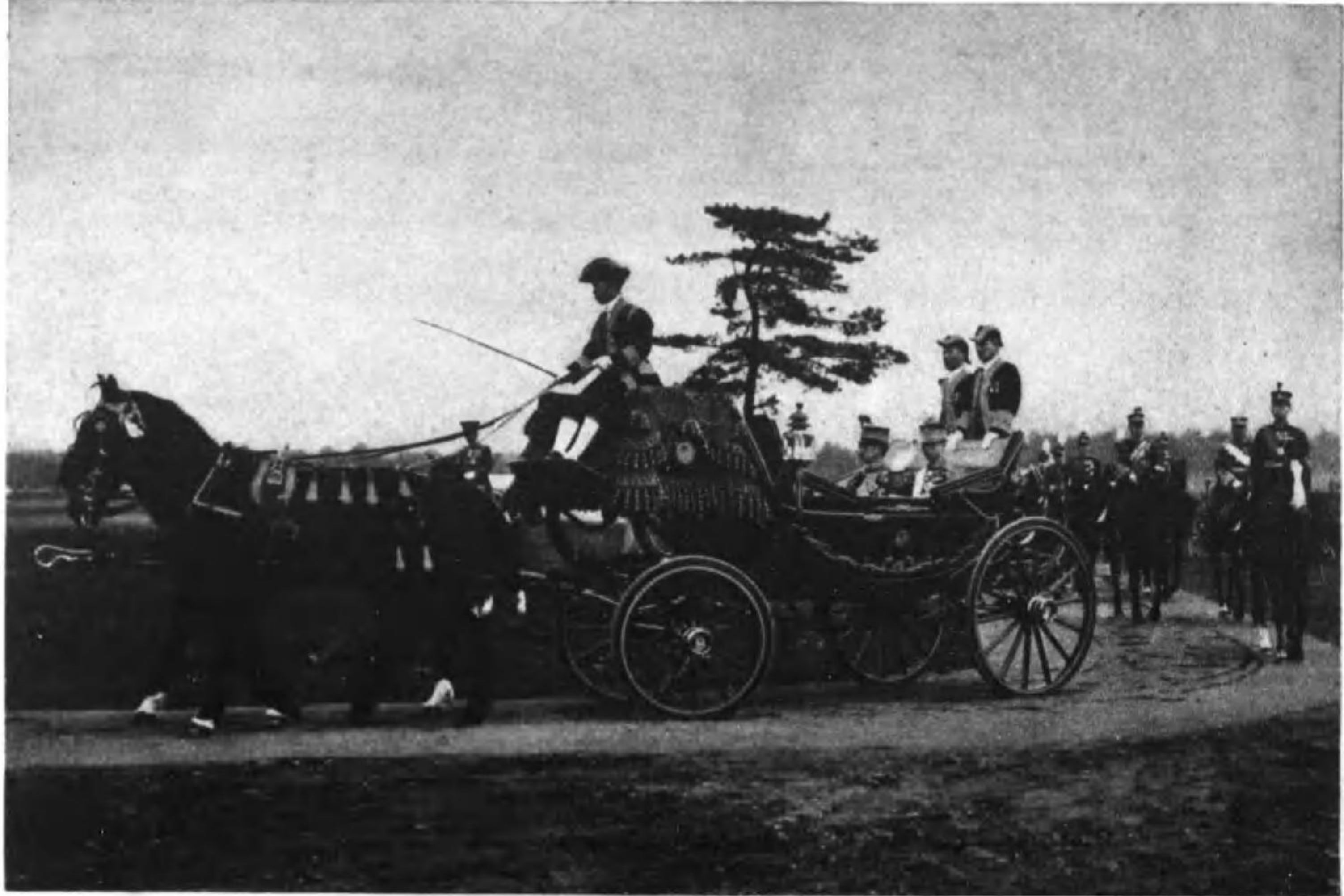
櫻花綻ぶ明治神宮御参拜
御参拜を終へさせられて明治神宮社殿を
御退出
聖徳記念繪畫館御巡覽
靖國神社御参拜
靖國神社御参拜を終へさせらる
滿洲國公使館に於ける奉迎會
公使館奉迎會の参列者
駐日滿洲國公使丁士源
首相官邸の政府主催晩餐會に御成り
同晩餐會に御親臨を御待ち申上ぐる我閣僚
赤坂離宮前の都下女學生旗行列の一團
東京日本橋通奉迎塔
赤坂離宮前の奉迎大提灯行列
奉迎裝飾を施した東京銀座夜景
東京市電奉迎花電車
代々木原頭に於ける特命近衛師團觀兵式
同觀兵式陪觀の我諸閣僚
同觀兵式(三)
同觀兵式場に於ける帝國精銳の行進
東京市主催奉迎式場に於ける 皇帝陛下
同奉迎式場の御台覽席
同奉迎式場御休憩室
同奉迎式場歌舞伎座々席
同奉迎式餘興の歌舞伎劇舞臺(勸進帳)
同奉迎式後の餘興御覽
同奉迎式場たる歌舞伎座正面
多摩陵に御着

多摩陵御参拜
東京市小學生の奉迎劍道野試合(明治神宮外
苑競技場)
奉迎體育大會
日滿婦人協會主催御來訪記念祝賀會(日比谷
公會堂にて)
友邦の誼みを契る日滿少年團の交羅
湯島聖堂御参拜
陸軍第一衛戍病院御成り
同病院にて滿洲事變の負傷者を御慰問
皇帝陛下御退京御挨拶の爲め宮中へ参入
東京驛御發車と御見送りの秩父宮殿下
秩父宮殿下と御別れの御握手
明治神宮より献納の「神宮神苑圖」「壁畫集」
日本美術の粹を蒐めたる東京市献上の屏風
東京市より献上の「市政概要」「東京市勢圖表」
及び記念寫眞帖
皇帝陛下京都驛御着
京都驛前奉迎門を御通過の幽薄
雨中奉迎の京都愛國婦人會々員
桃山陵御参拜
平安神社に御参拜を終へさせられ奉迎式に向
はせらる
京都府市商工會議所主催の奉迎式に於ける
萬歳奉唱
京都御所御参入(建禮門)
御覽に供する駒歌の催し
蹴鞠御覽

京都應永寺金閣樓上の 皇帝陛下
京都都ホテルのヴェランダより全市學童の
奉迎に御會釋
奈良驛頭の 皇帝陛下
奈良ホテルの御居間
奈良春日神社御参拜
奈良名物鹿寄せに興せさせ給ふ
奈良正倉院御参觀
奈良東大寺の大佛殿御成り
大阪市湊町驛前の奉迎門
大阪市中央公會堂に於ける市主催奉迎會
大阪市御堂筋に於ける奉迎の小學生
武庫離宮へ御着
神戸市の學生・青年團等の奉迎提灯行列
神戸港埠頭奉迎塔の傍を御通過
神戸港埠頭の御召艦と奉迎の群衆
神戸港御出發に際し御召艦に御乗艦
香川縣莊内村有志の詞詞に御満悦
最後の御巡覽地嚴島神社に向はせらる
安藝宮島の奉迎小學生
御召艦關門海峡御通過
同御通過と奉送の群衆

御來訪記念繪畫書・記念スタンプ
御來訪記念切手
登極記念郵票
滿洲國輔幣
滿洲中央銀行總行

中央銀行發行の紙幣
普隣の親誼を結ぶ日滿議定書の調印
山海關角山寺麓に建設された滿洲國建國大祀
念塔
杏花村順天廣場の登極天壇
御駕宮門を出でまして肇國の天壇に赴き給ふ
登極の大禮成つて宮城に御歸還
皇帝陛下の玉座
宮内府勅民樓
秩父御名代宮殿下と御同席の 皇帝陛下
南駐滿全權大使の國書捧呈式記念撮影
滿洲國勳章 大勳位蘭花大綬章及び副章・龍
光大綬章と副章・勳一位景雲章並びに副章
敍勳一位賜景雲章の滿洲國大官
司法部大臣馮滿清 外交部大臣謝介石
尙書府大臣寶金鏡 國務總理大臣鄭孝胥
監察院々長羅振玉 財政部大臣熙洽
實業部大臣張燕卿
滿洲國政府要人
宮内府大臣沈瑞麟 軍部大臣張景惠
侍從武官長張海鵬 交通部大臣丁鑑修
民政部大臣戚式毅
國務院
財政部廳舍
外交部・司法部廳舍
國都建設局
滿洲國軍の起床喇叭
滿洲國軍々政部の軍用鳩



特命近衛師團長武官長官の州下

松花江上の江防艦隊
 壯快なる蒙古騎兵隊
 關東軍司令部
 在滿特命全權大使・關東軍司令官南次郎大將
 關東軍參謀長西尾壽造中將
 首都新京の繁華街日本橋通の鳥瞰
 基礎工事を急ぐ新京事務所街の作業
 建設されつゝある國都新京の主要路
 完成に近づく新京市住宅地の一部
 新京大同大街の大陸的風光
 大連滿鐵本社
 大連滿鐵病院
 大連滿鐵埠頭事務所
 奉天滿鐵公所
 大連浪花町通り
 山海關の天下第一關
 安東縣滿洲人街
 遼河々口に位する營口商埠
 奉山沿線の樞要地錦州市街
 哈爾濱滿洲人街傳家甸
 吉林河南街の繁況
 滿洲里のロシア風建築
 齊々哈爾市街
 奉天滿洲人街の城壁
 沙漠を行く駱駝隊
 架設中の大鐵橋
 一輪車
 北鐵接收當日の哈爾濱鐵路局

先太煙突の南地線機關車
 日滿連絡機滿洲號
 松花江上の外輪船
 駄轎
 規模壯大なる撫順炭礦の露天堀
 鞍山製鐵所
 監視附の理春砂金採集現場
 松花江上の大豆積出し
 鴨綠江の流筏
 虎力河日本移民の耕作
 蒙古平原の放牧
 大鹽田の眺望
 高粱畝中の饗宴
 豆粕の運搬
 奉天北陵の石象
 古府熱河省朝陽の風物
 遼陽の古刹千山寺閣
 舊都承德の離宮
 情緒纏綿たる大石橋の娘々祭
 古聖を祀る孔子祭
 典雅なる喇嘛寺の祭食
 錦州の龍燈遊行
 地方色豊かな高足踊り



東京大学大正門の夜景



東京大学大正門の正面



皇帝陛下御筆



滿洲國皇帝陛下御尊影

皇帝訪日之慶
 孝育
 之聖言歡



蹇羊び及晋孝鄭臣大理總務・國洲滿

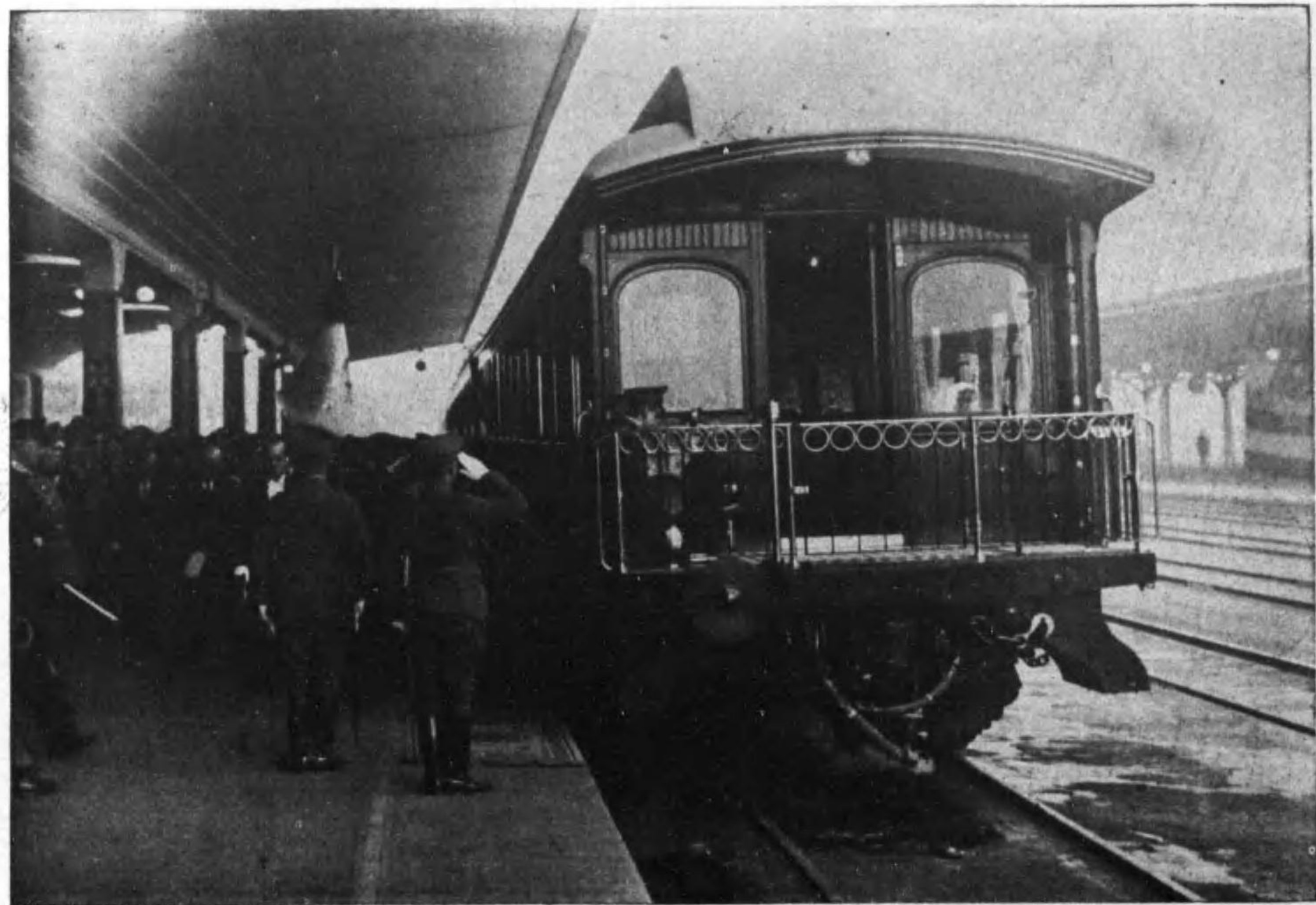
皇帝訪日之慶
 孝育
 皇皇葬帝訓



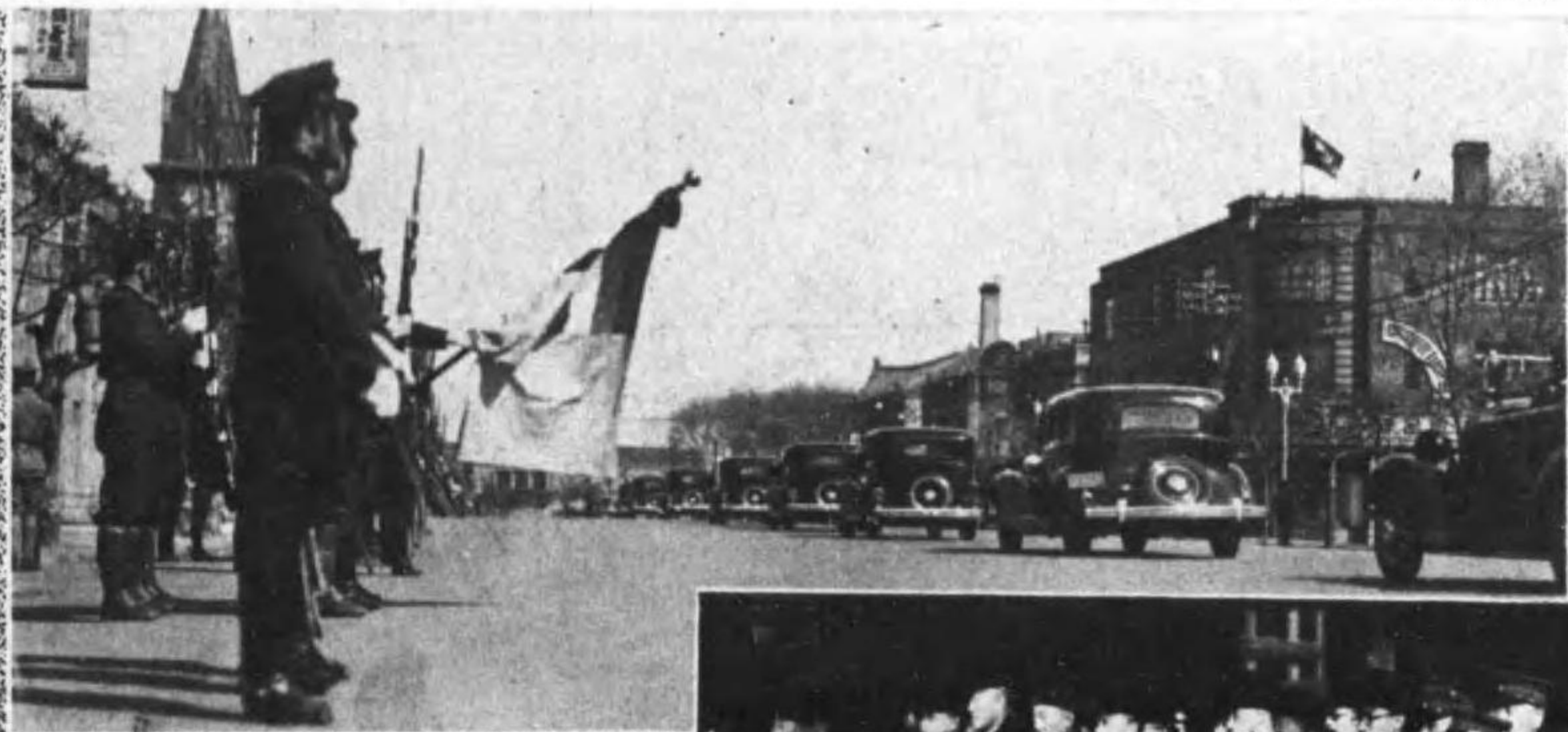
下陸后皇ゝるらせ念新を泰安御程族御の下陸帝皇



方族尊御るれた待をび慶の面對御
 - (君妹御帝皇) 人夫潤び及・(君弟御妃皇) 氏麒潤・(君弟御帝皇) 氏傑薄りよ左列前 -



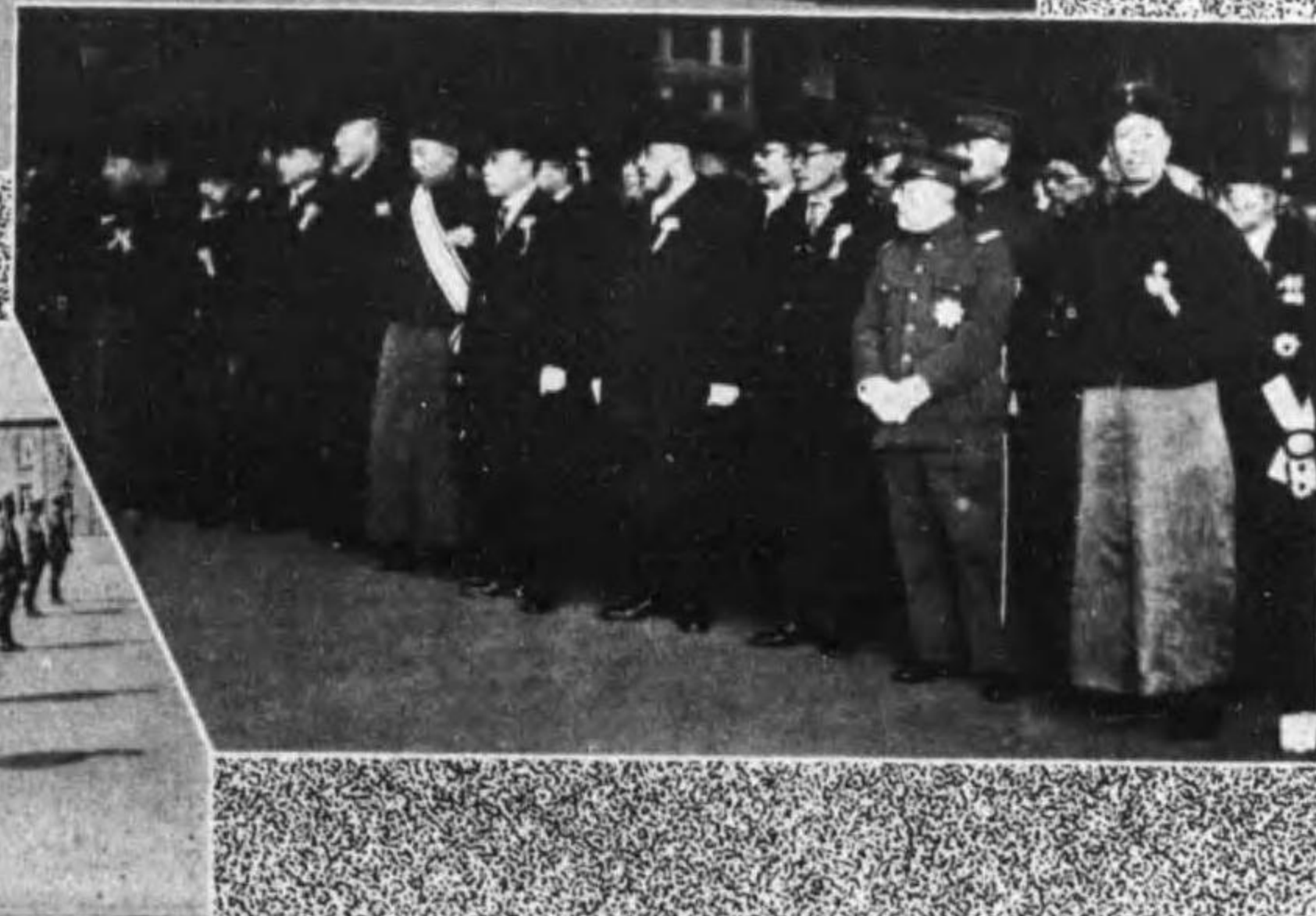
那利の車乗御に車列召御にて驛京新下陸帝皇



るらせは向へ驛京新薄函



兵仗儀の列整に前驛京新



官大満日の送奉に驛京新

艦乗御に叡比りよ頭埠連大



(旅順要塞司令部檢閲済)



(旅順要塞司令部檢閲済)

叡比艦召御の港入連大

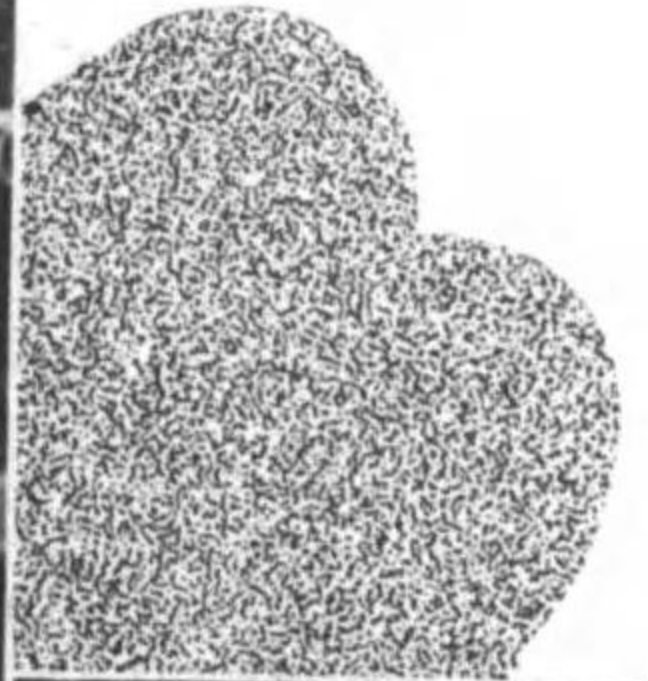


間居御の下陸帝皇の叡比艦召御

着御に驛連大車列召御

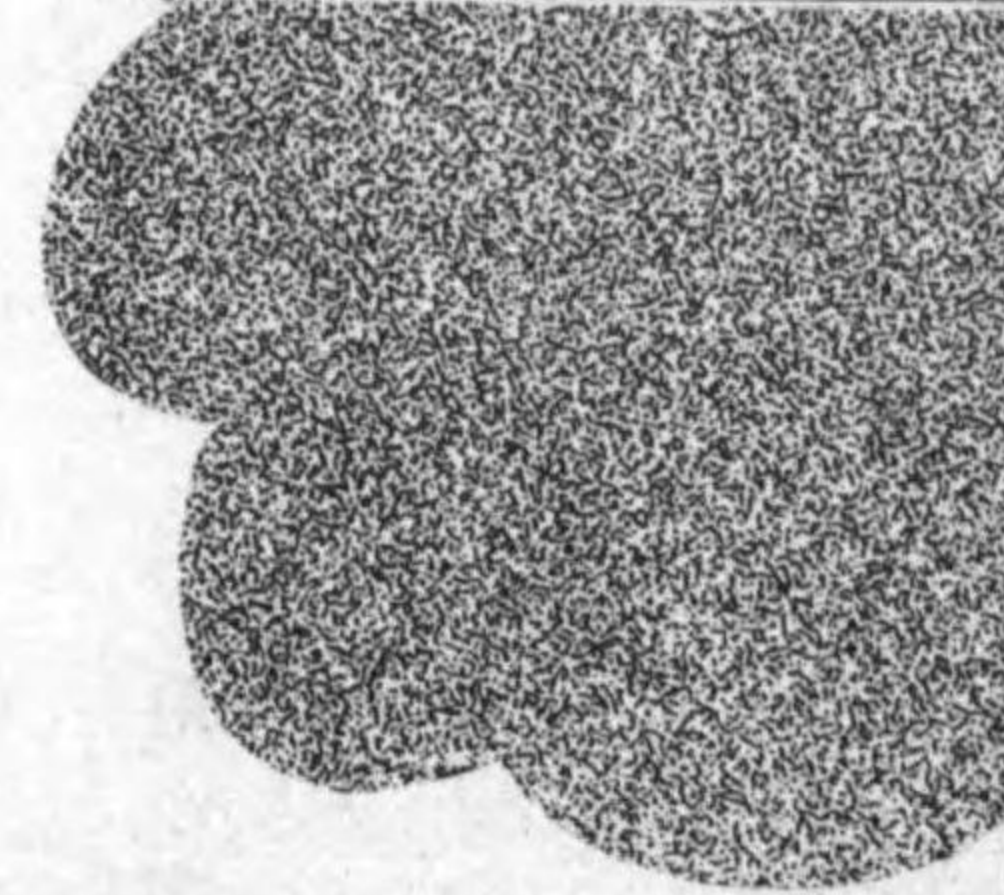


(旅順要塞司令部檢閲済)

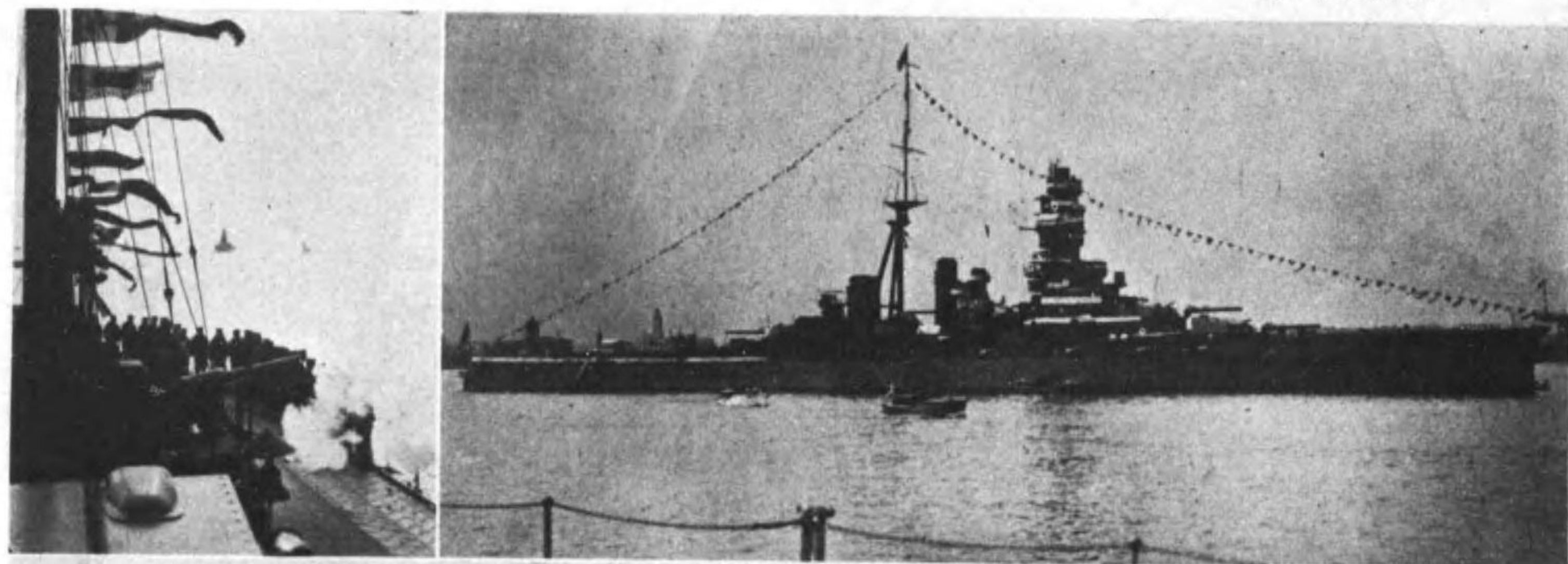


(旅順要塞司令部檢閲済)

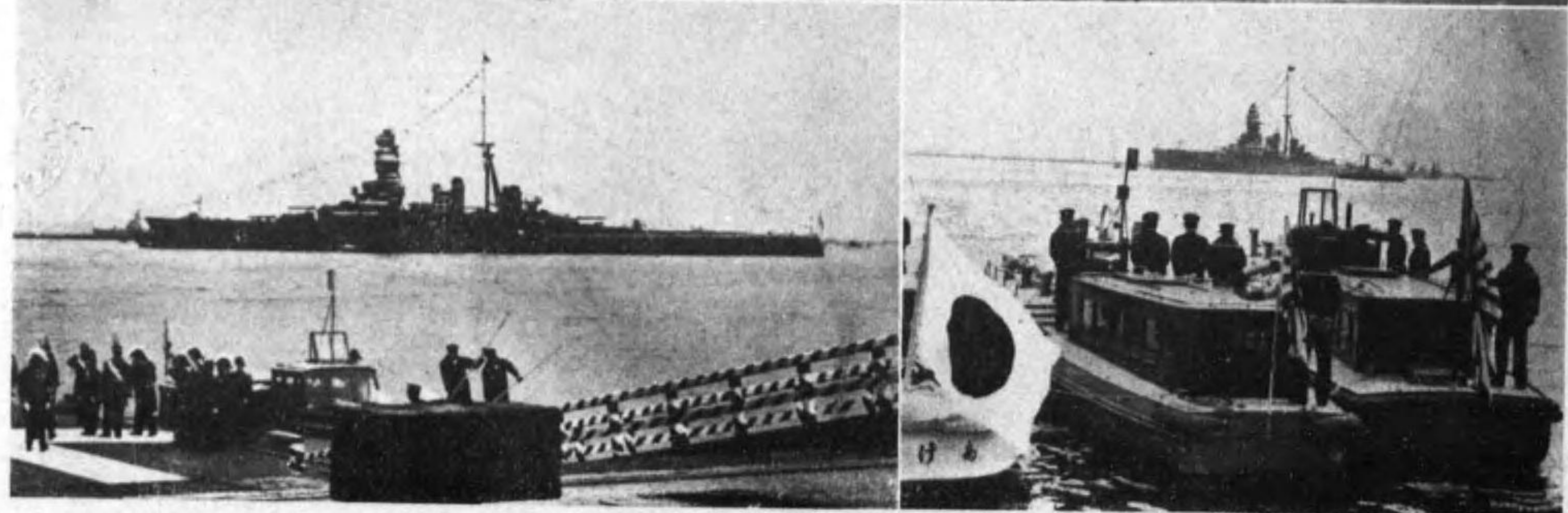
官武文木日下以將大南のへ迎出御に驛連大



射發砲禮皇の島戰艦迎奉



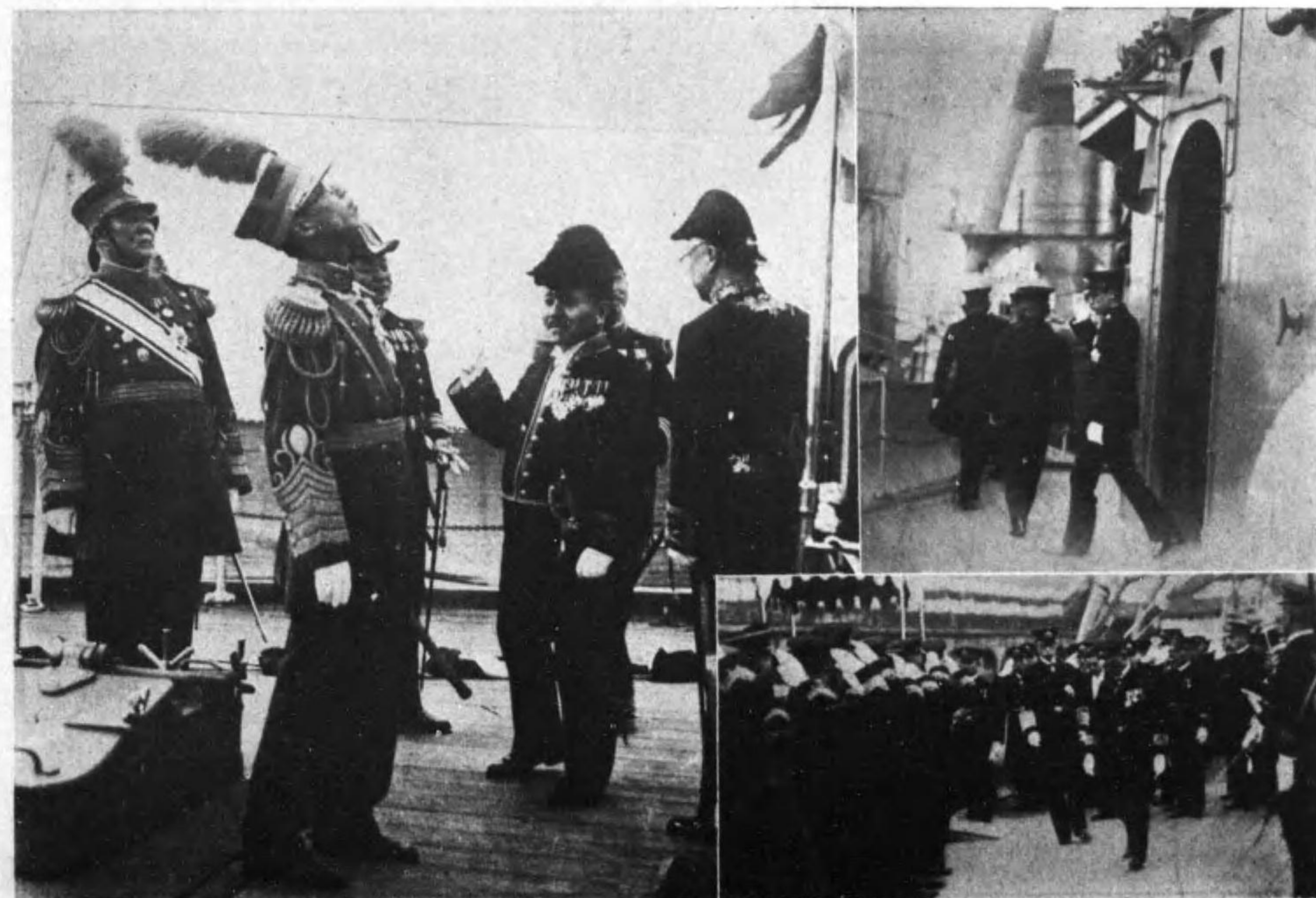
姿壯の叡比艦召御



す港入に演横艦召御

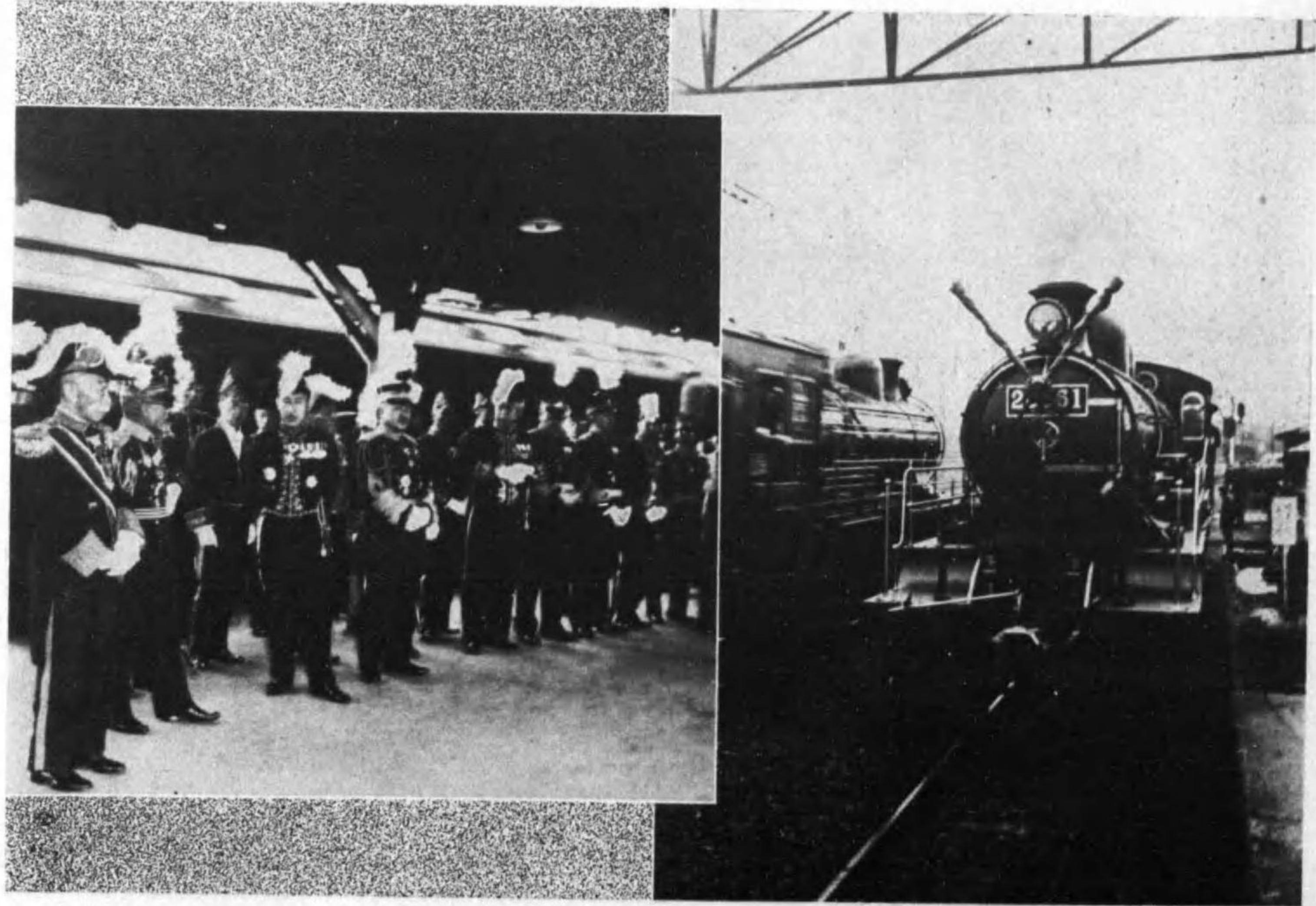
解るふ迎を艦召御の港入

(濟開檢部令司塞要順旅) 視巡御の内艦叡比艦召御



下陸帝皇の覽歡を行飛迎奉りよ上艦召御

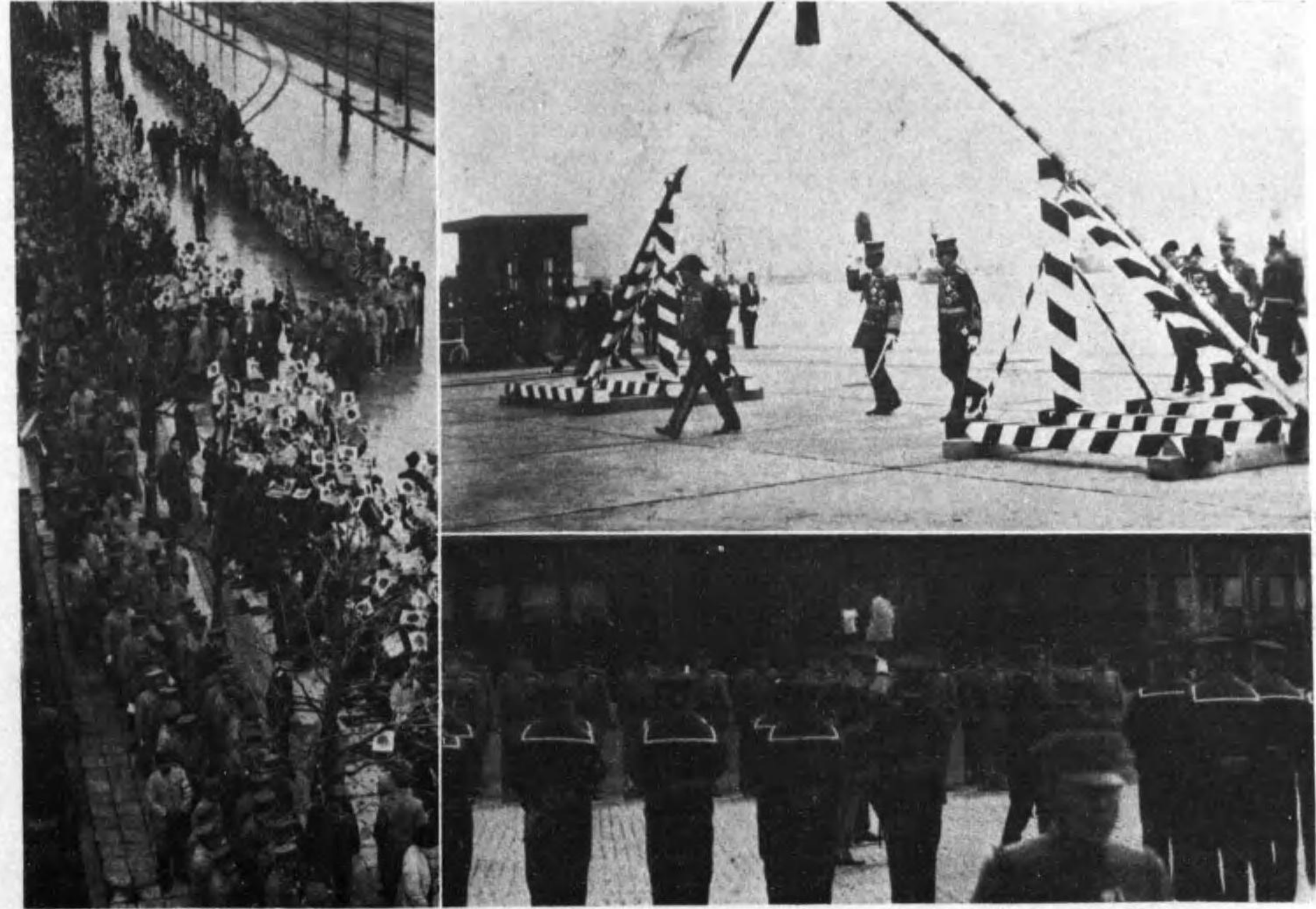
(濟開檢部令司塞要順旅) 下陸帝皇の上板甲



品川驛に奉迎の我大官連

東京驛着の御召列車

横濱埠頭に御出迎の秩父宮殿下と同列にて御上陸

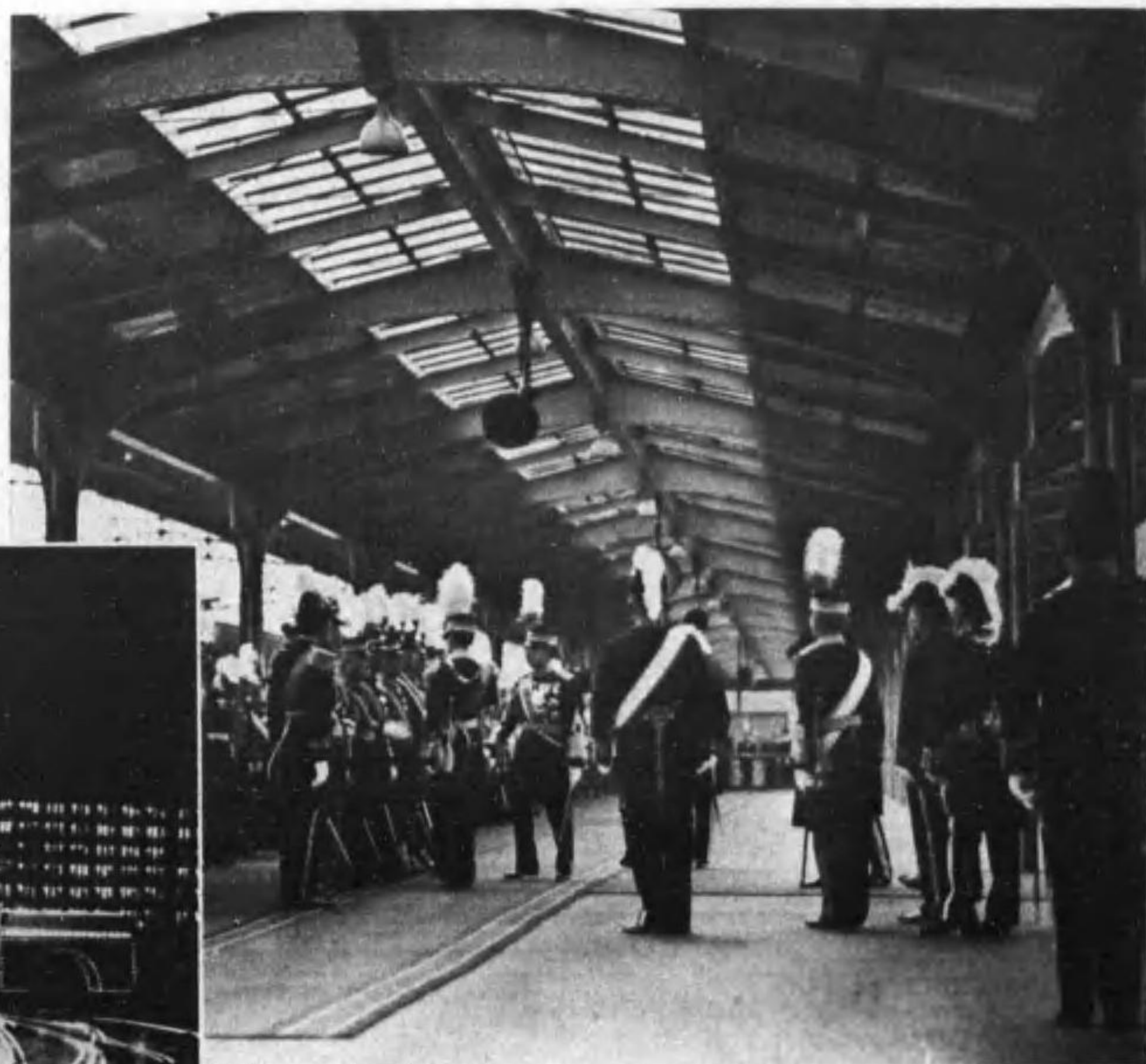


横濱市沿道の奉迎

横濱埠頭に御召列車に御乗車の前

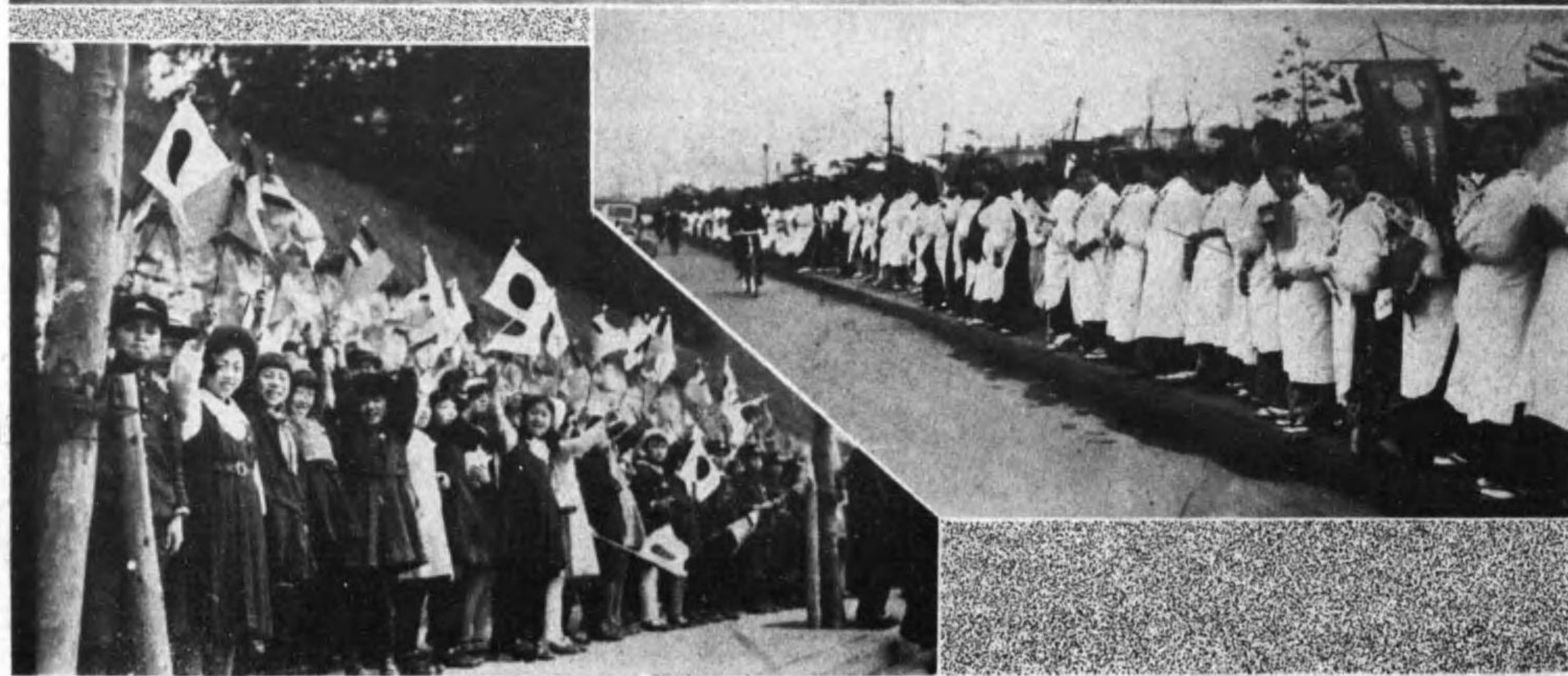


東京驛の夜景



（手摺御のと下陸帝皇の訪來御と下陸皇天のへ迎出御に驛京東）典祥大の代遼德康和昭る飾を史交國の國兩滿日邦盟

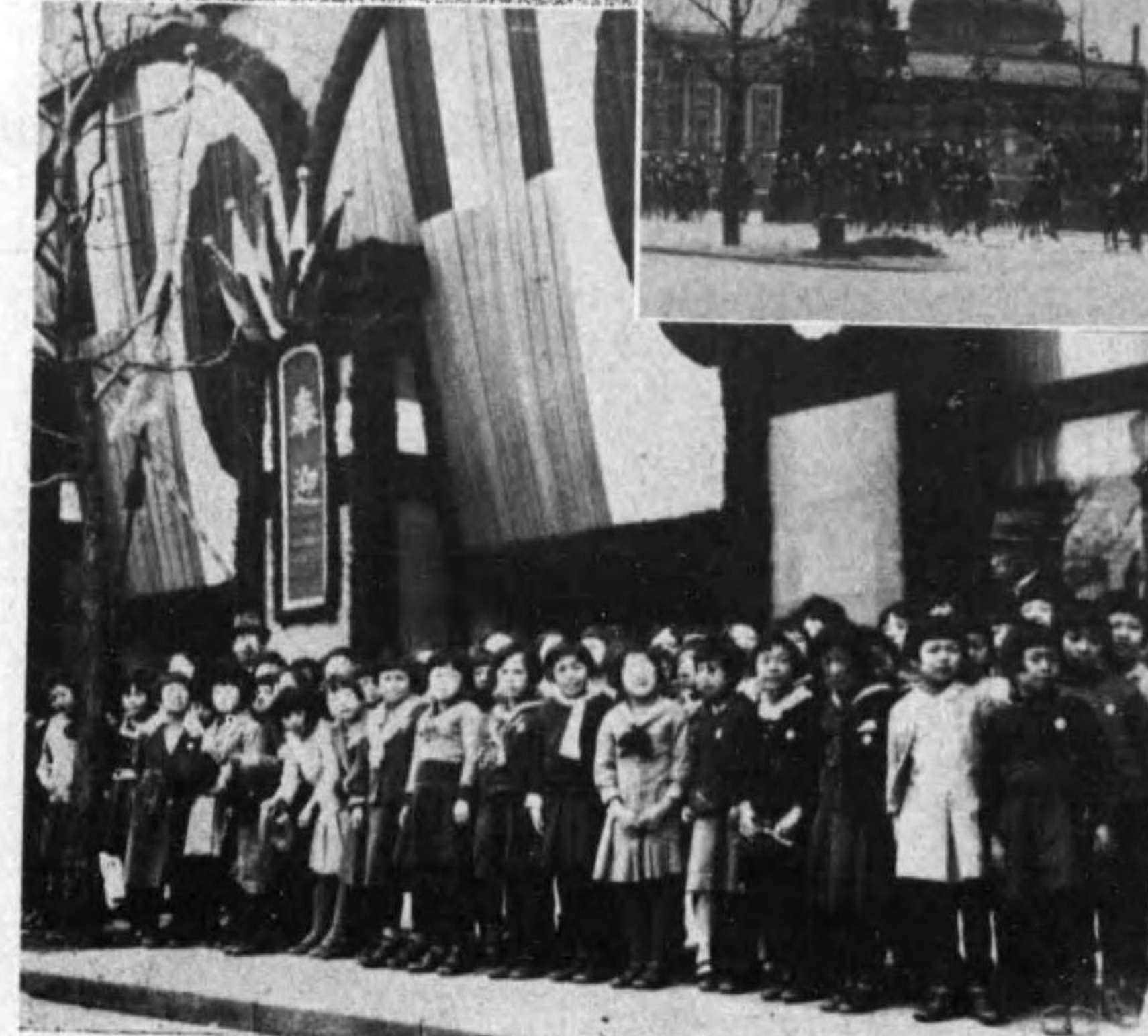
るらせら入に宮離坂赤簿函



童兒市京東の迎奉才騎を旗國の國兩滿日

員々會人婦防國の迎奉

過通御を前ルビ丸と々肅簿函



童學の迎奉るせ列整に前ルビ丸



吞雜の者迎奉るけ於に場廣前驛京東



るさば遊幸行へ宮離坂赤くし親下陸皇天



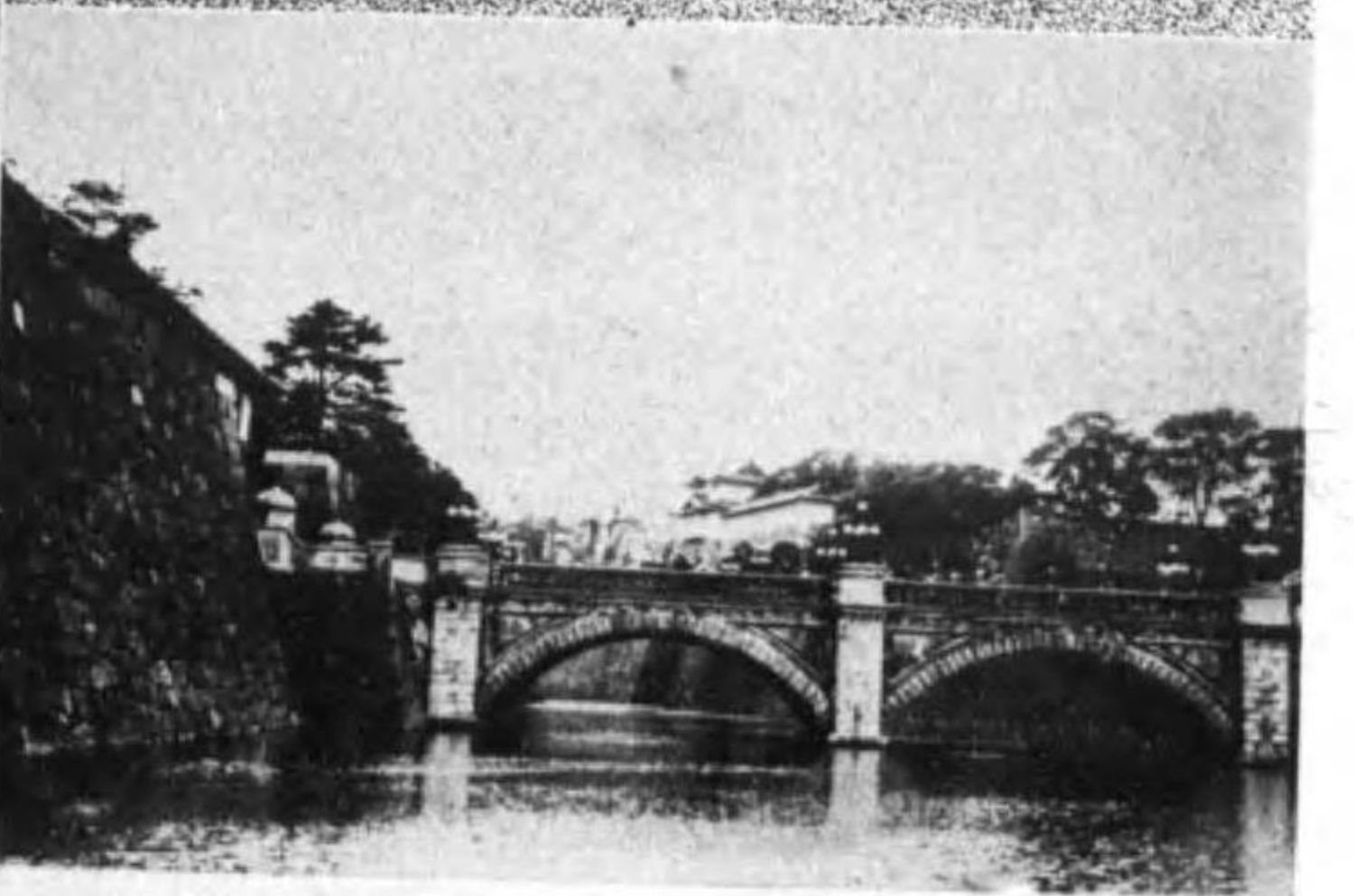
門★宮離坂赤の夜一第程旅御



薄鹵の上橋重二

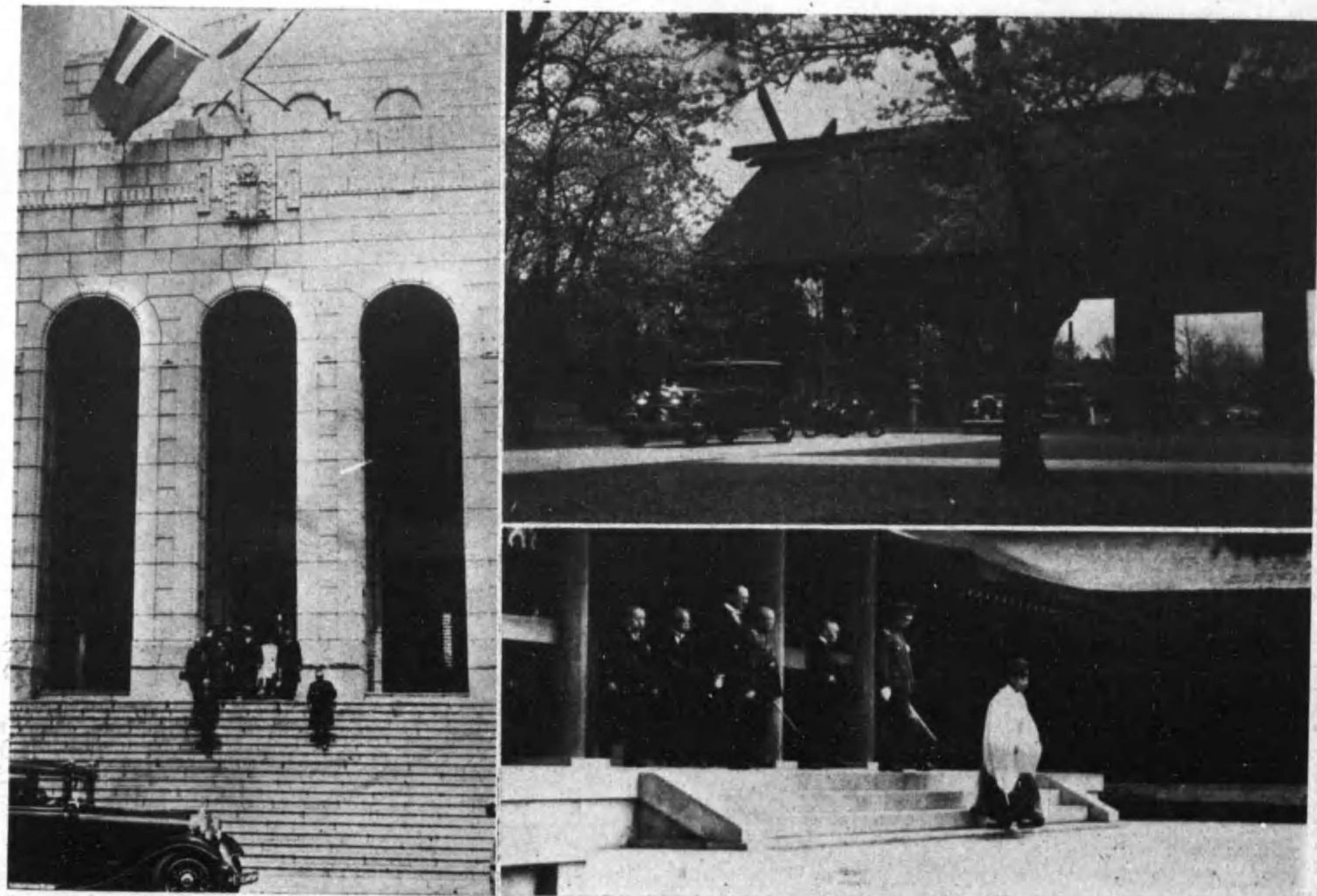


るは向に禁宮てしまで川を宮離坂赤輿鑿



駕御の入参に城宮

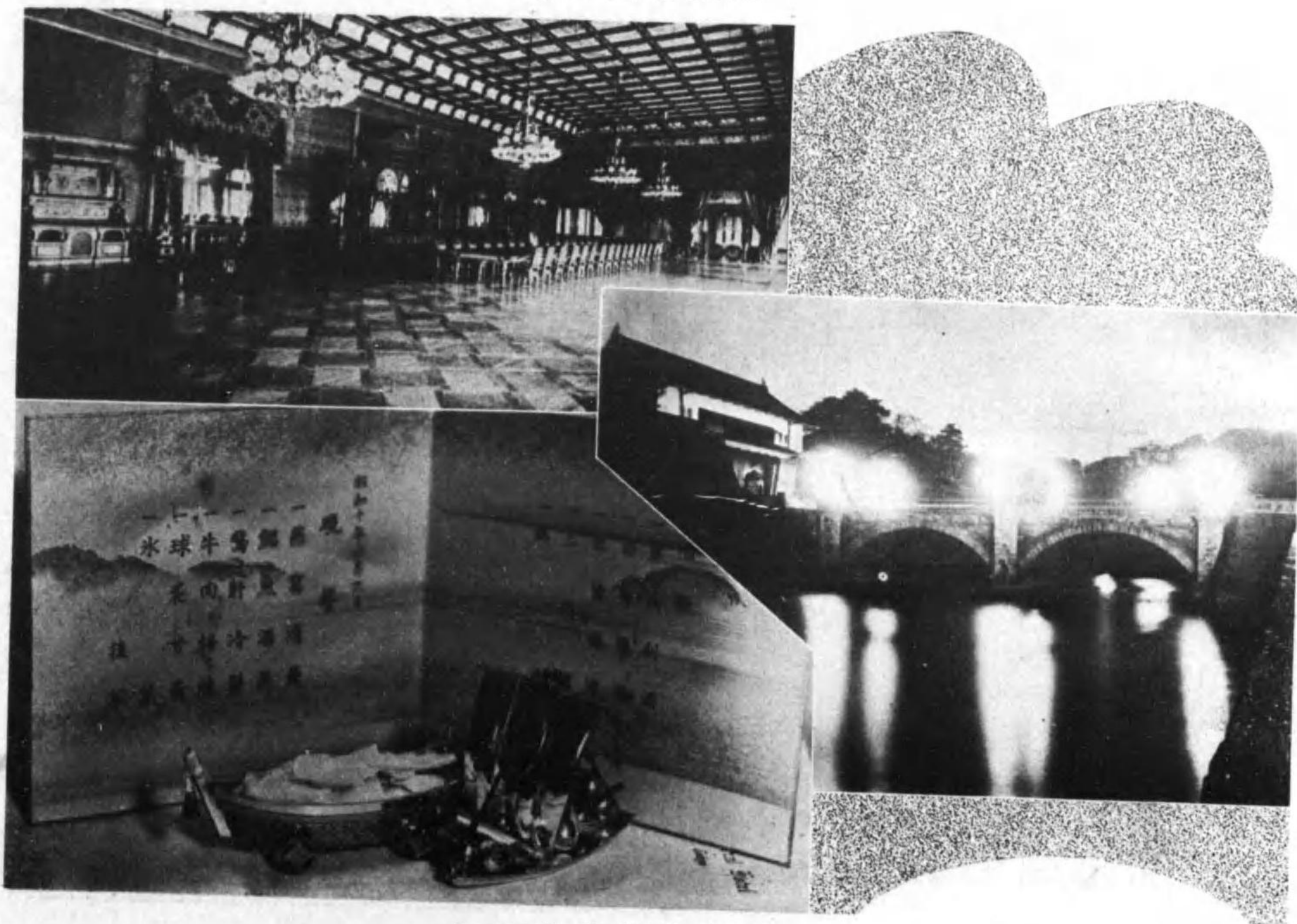
拜参御宮神治明と院花櫻



覺巡御館畫繪念記德聖

出退御を殿社宮神治明てれらせさへ終を拜参御

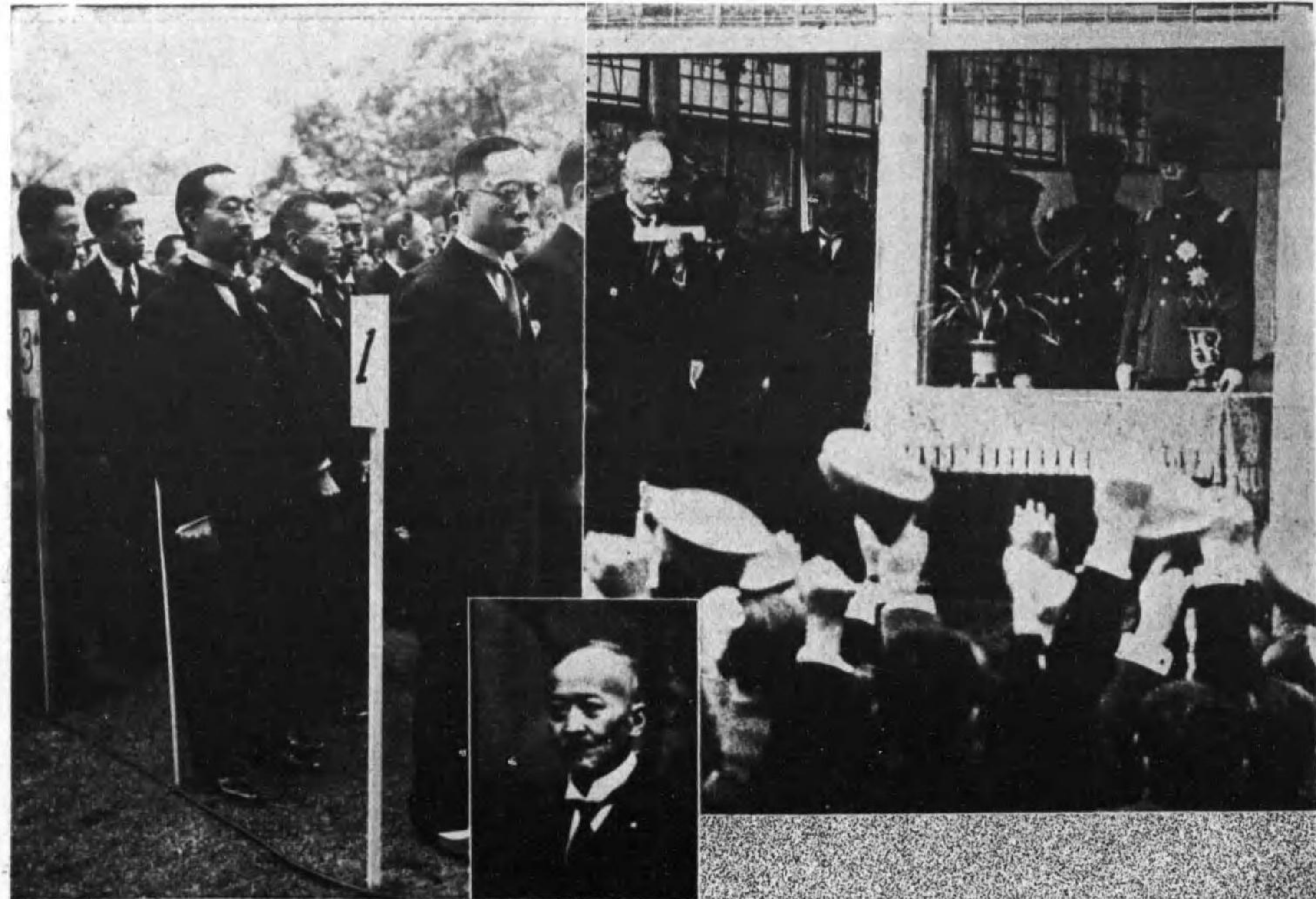
殿明豊るな場合餐晚御中宮



ルーエニボンボ・表立献の會餐晚御

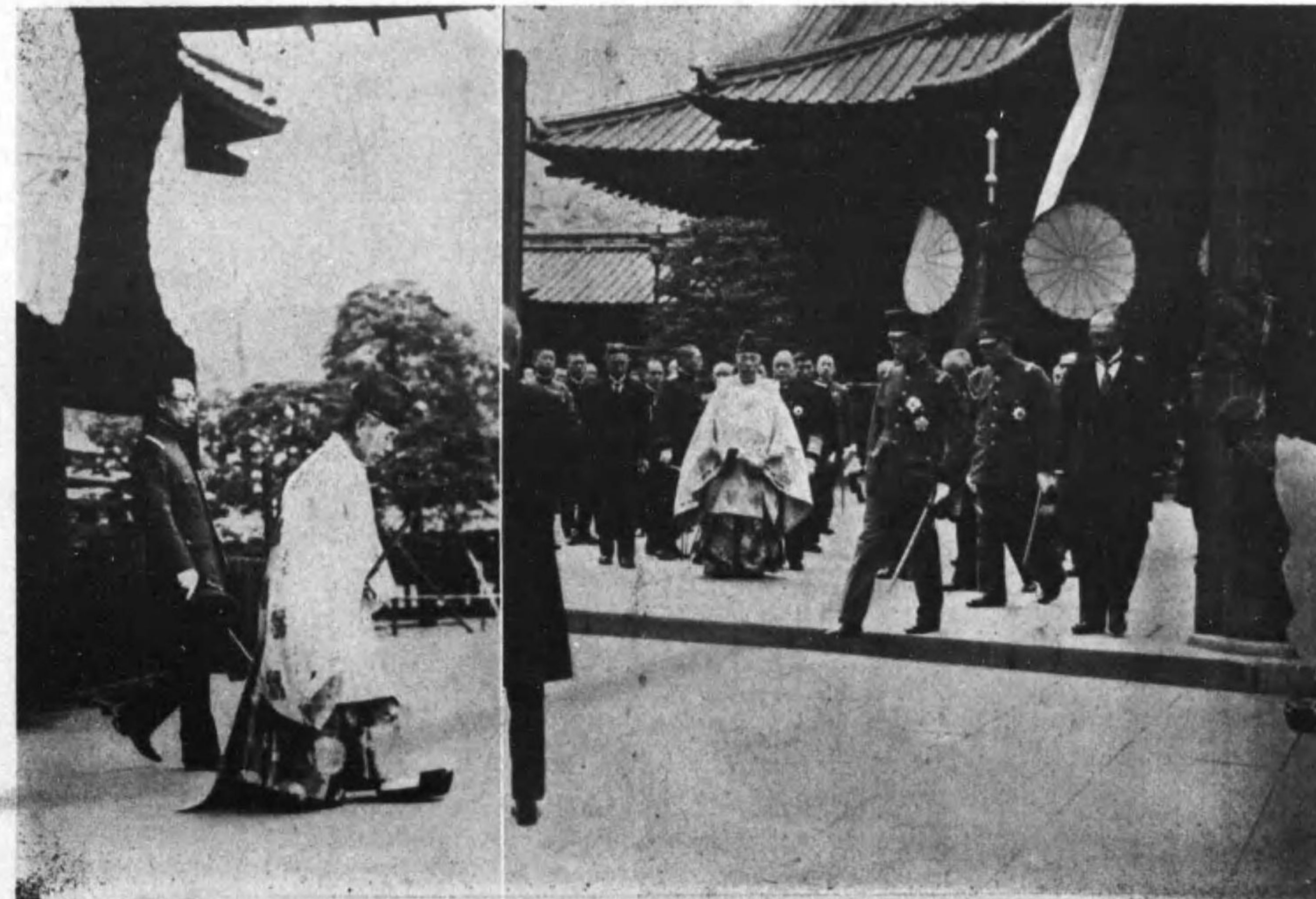
橋重二の夜當會餐晚御

(士博伯欽越長・院法立前は央中) 者列参の會迎奉館使公



源士丁使公國洲滿日駐

會迎奉るけに館使公國洲滿



拜参御社神國增

るらせさへ終を拜参御社神國增

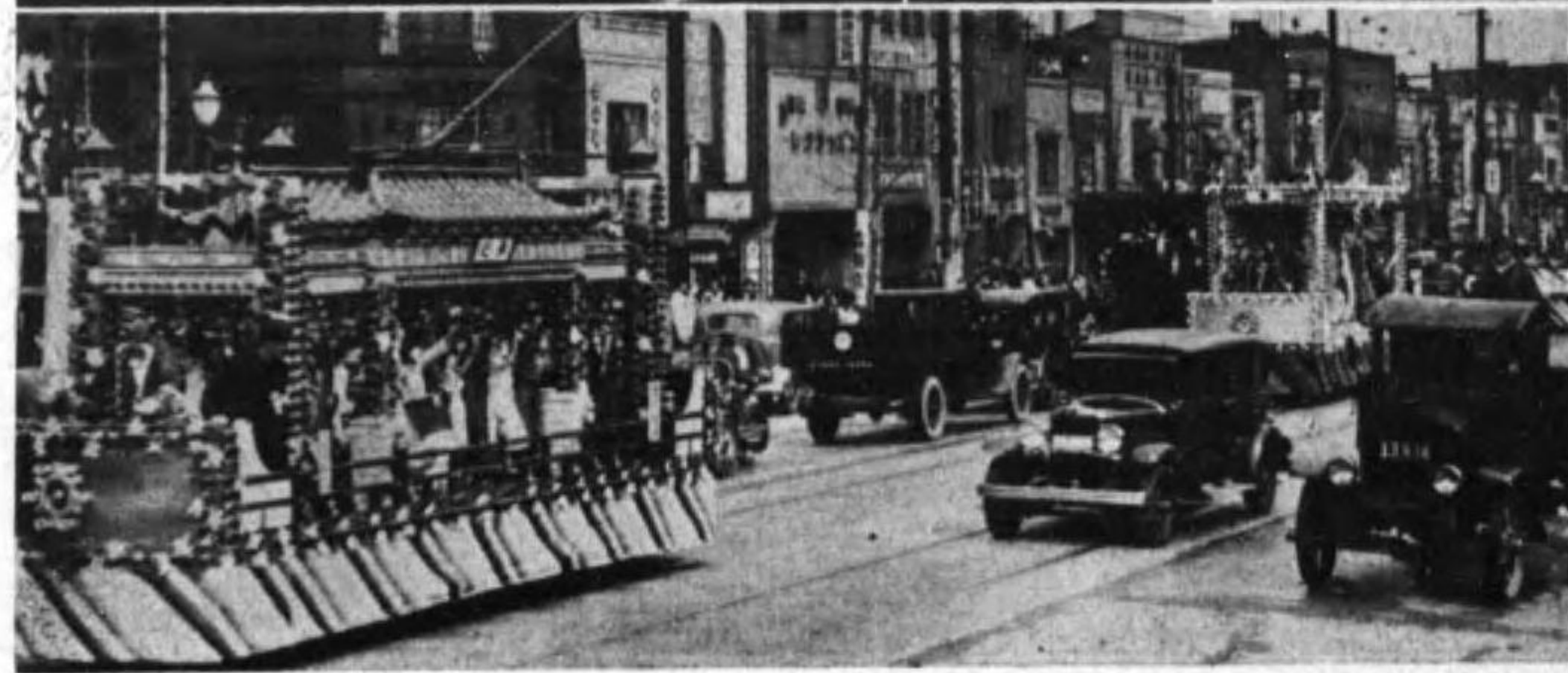
赤坂離宮の前奉迎大提灯行列



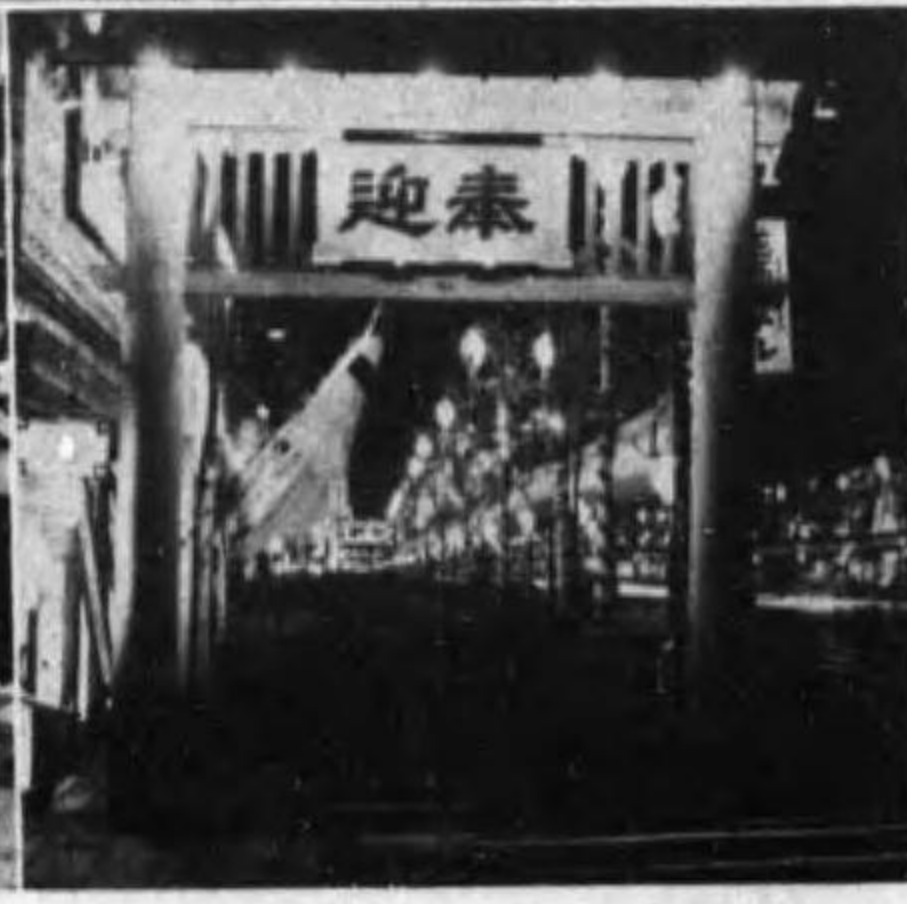
東京日本橋通奉迎塔



赤坂離宮の前奉迎女學生旗行列の一圖

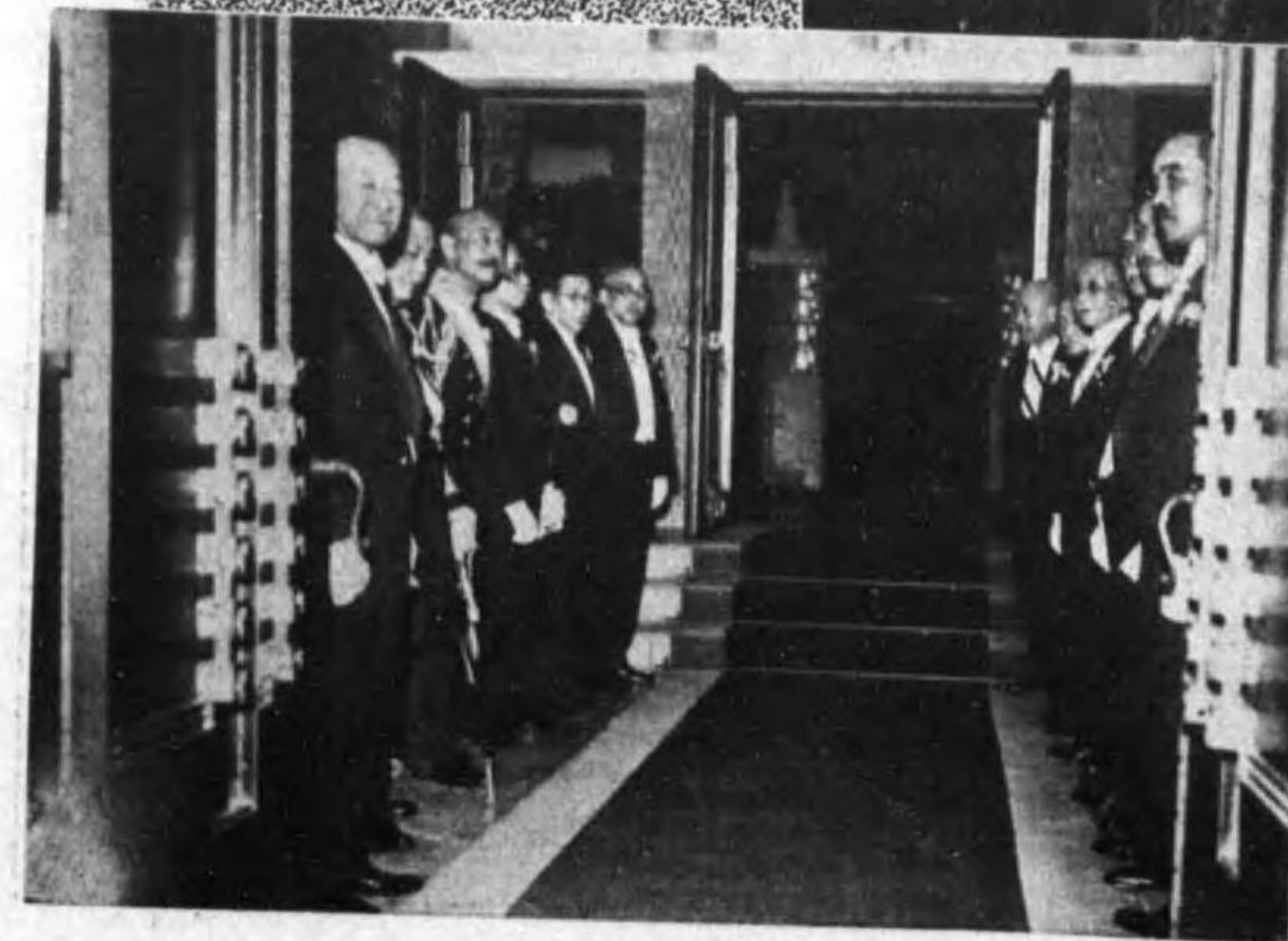
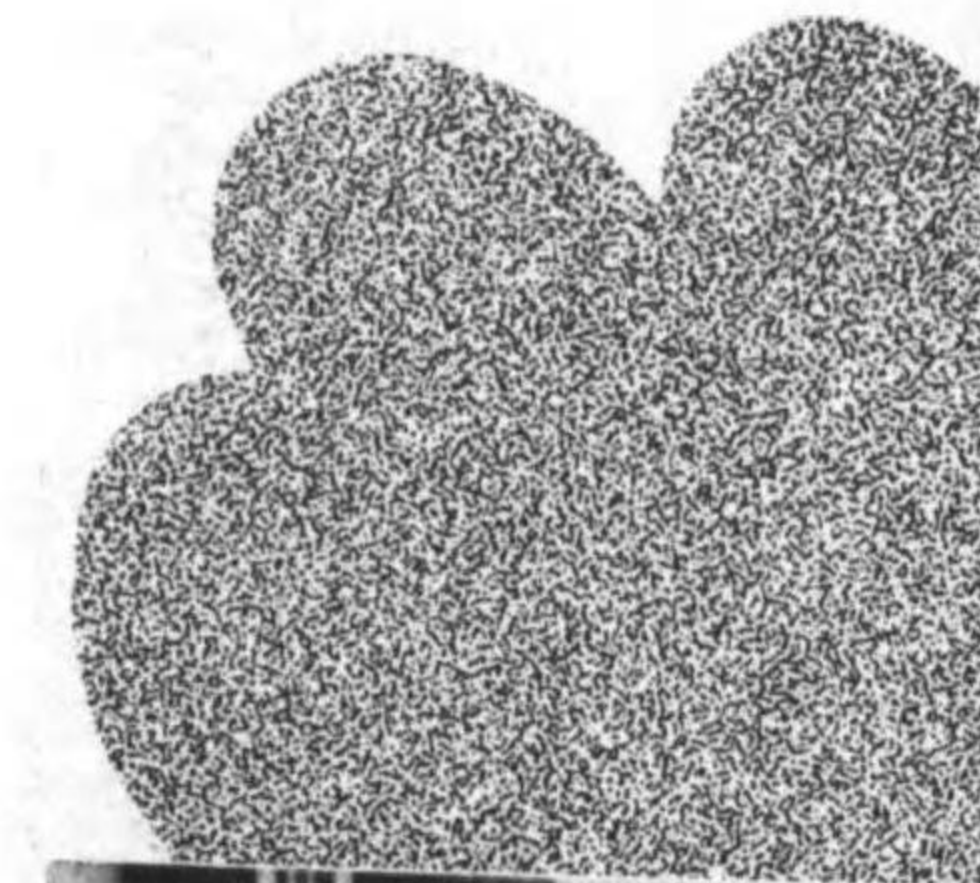
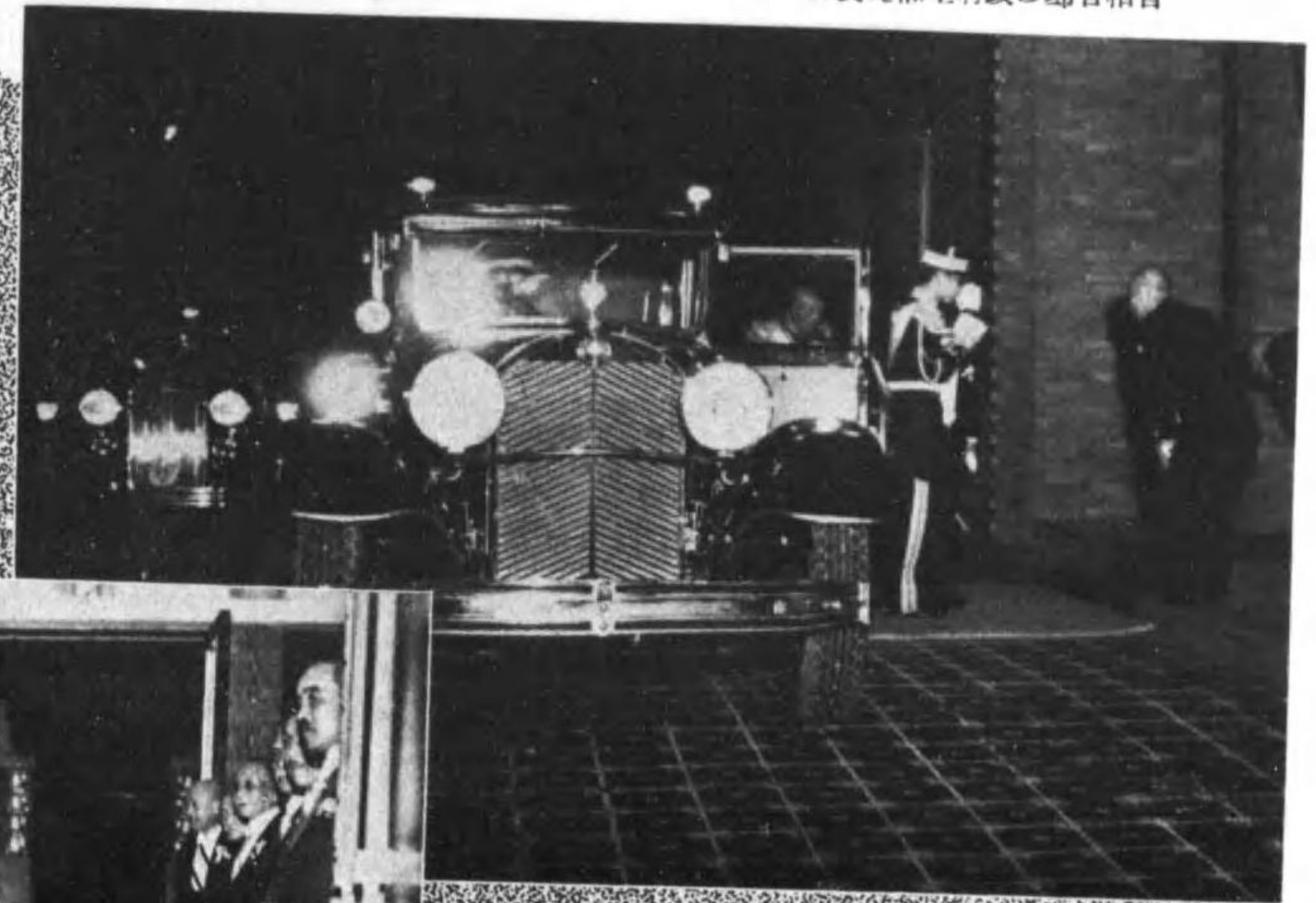


東京市電車奉迎花車

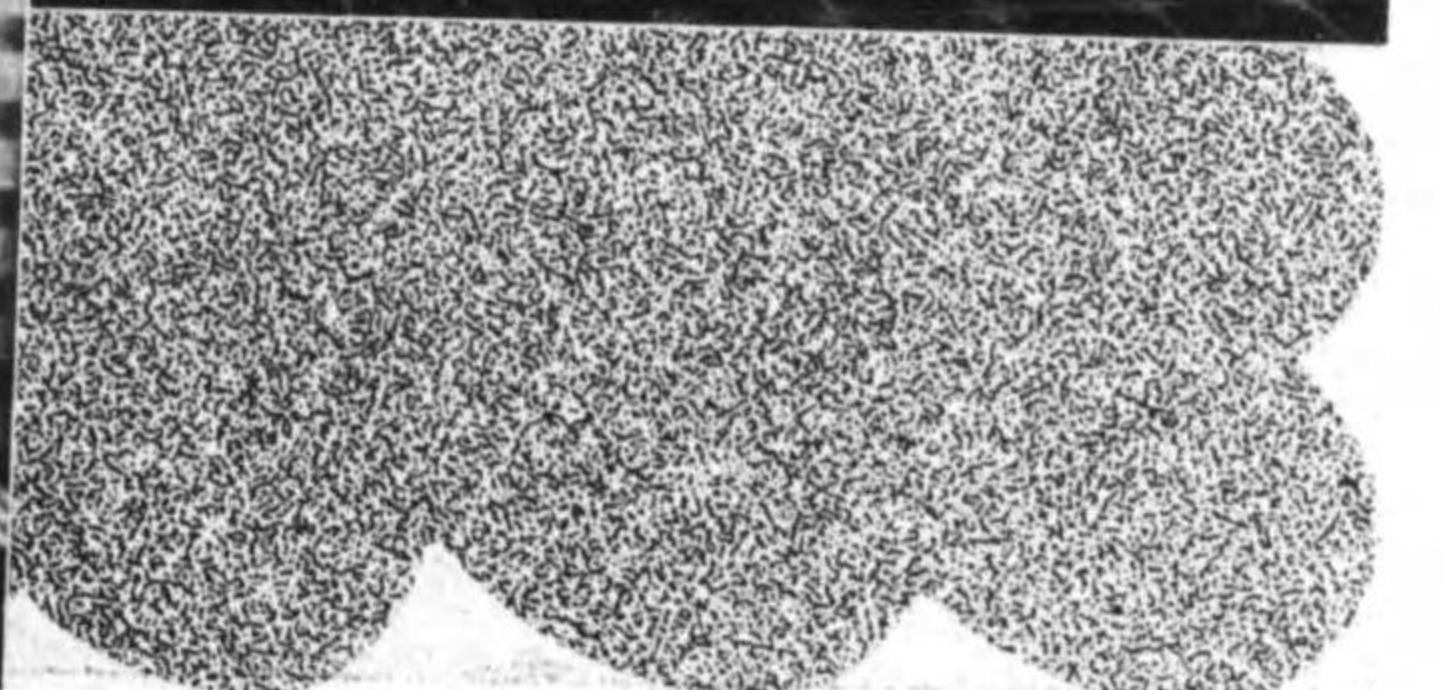


奉迎裝飾施たし東京銀座夜景

首相官邸の政府主催晩餐會に御成り



政府主催晩餐會に御臨親を御待ち申上るる閣僚

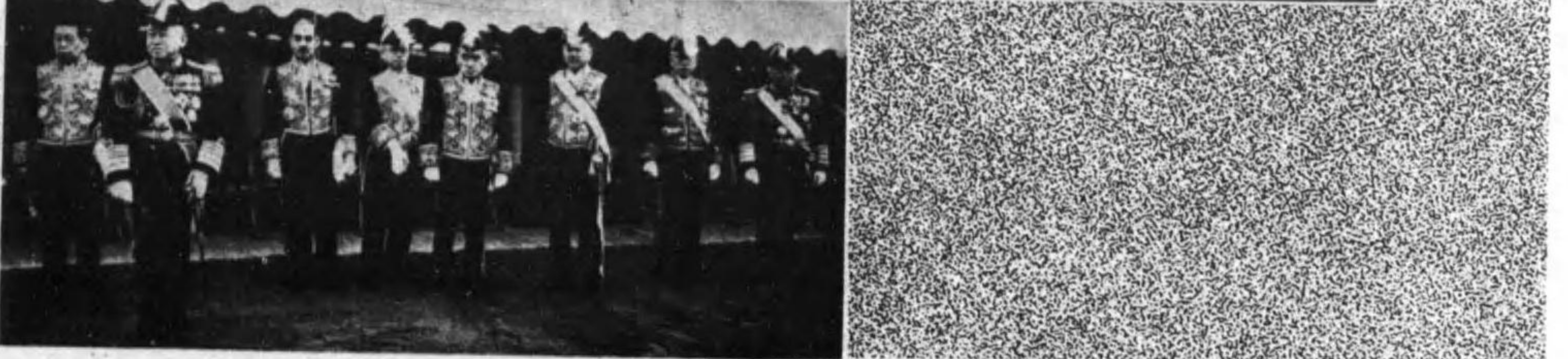
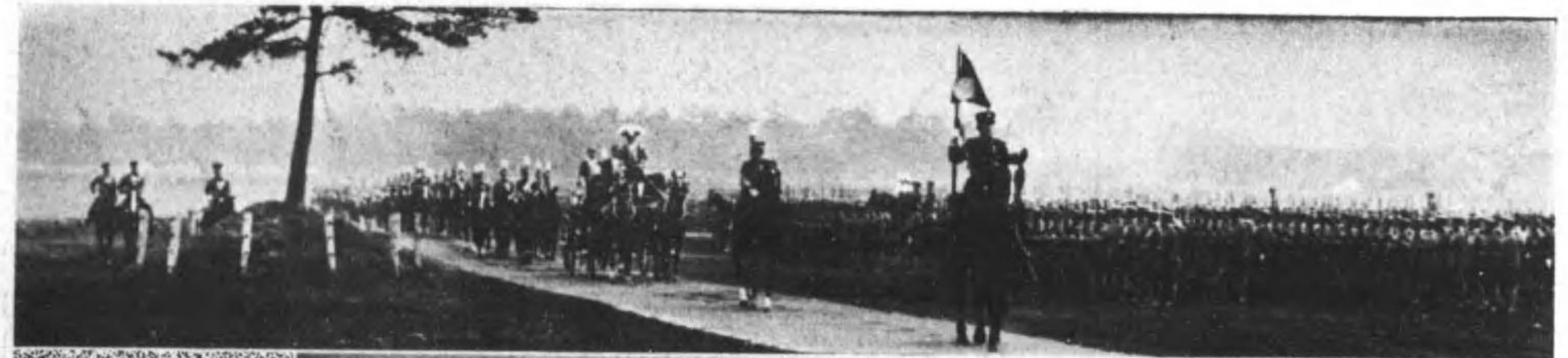


(三) 式兵觀團師衛近命特



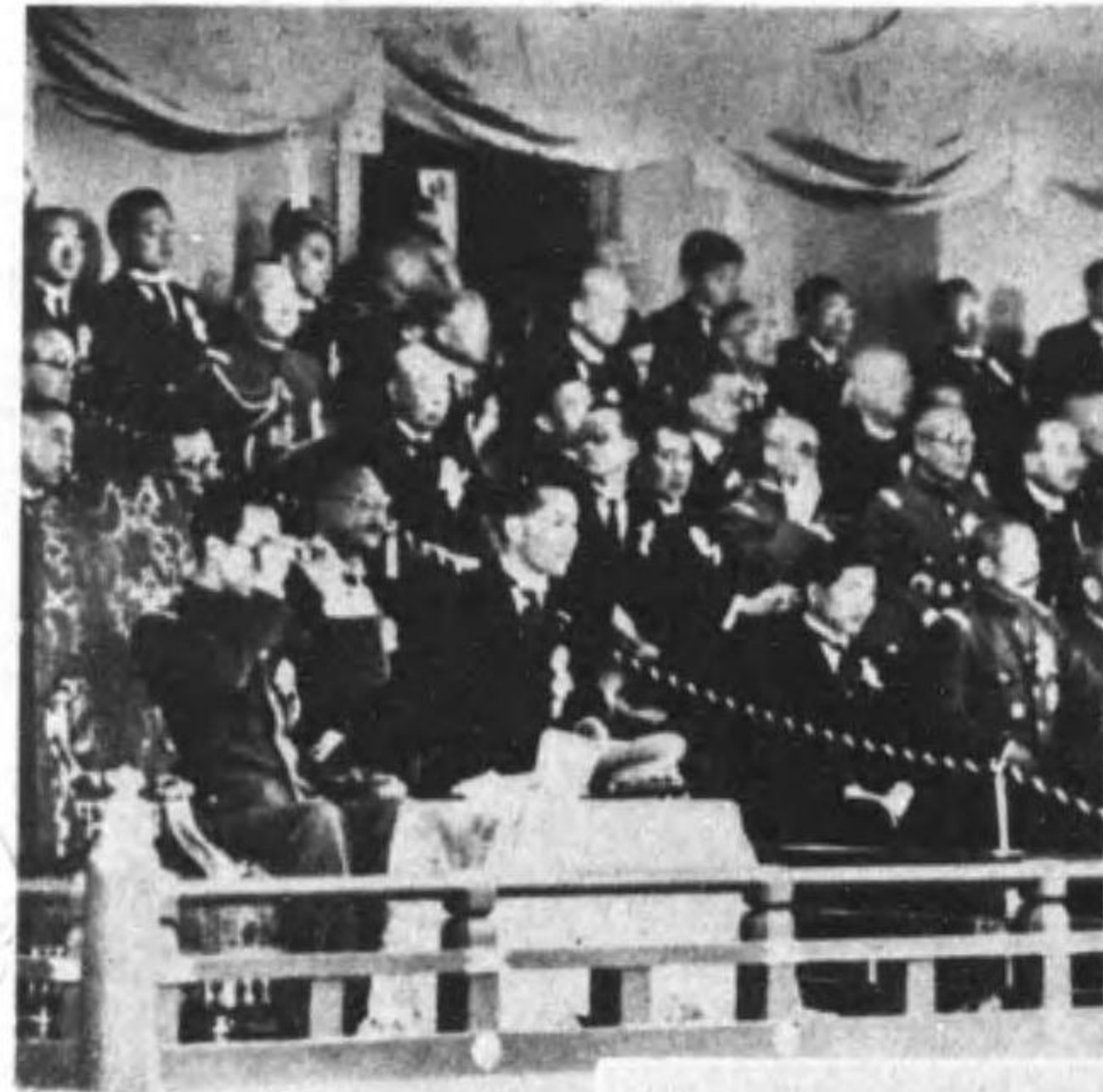
進行の銳精國帝るけ於に場式兵觀團師衛近命特

(二)(一) 式兵觀團師衛近命特るけ於に頭原木々代

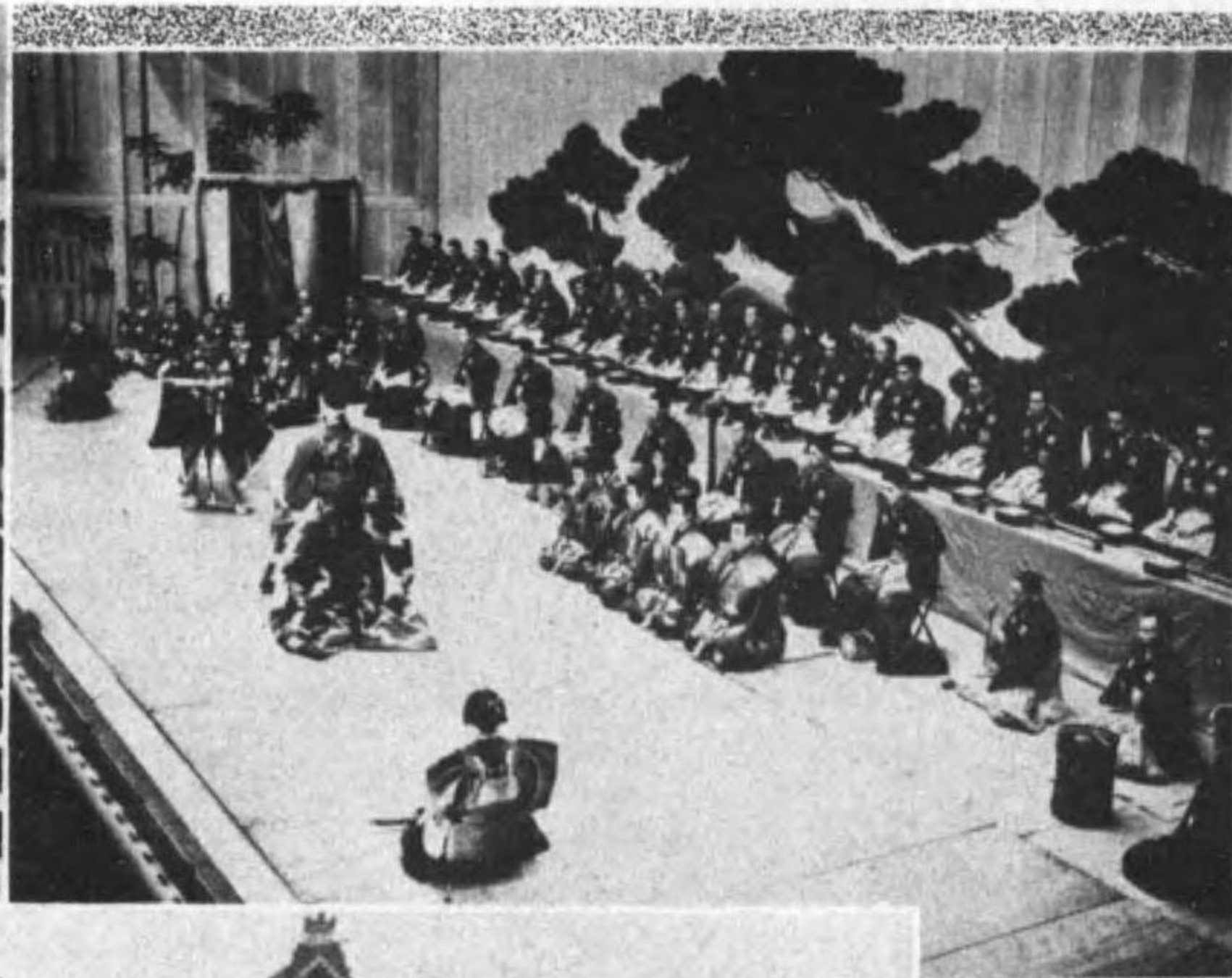


像開諸我の觀時式兵觀

寛御興餘の後式迎奉催主市京東るけに座伎舞歌

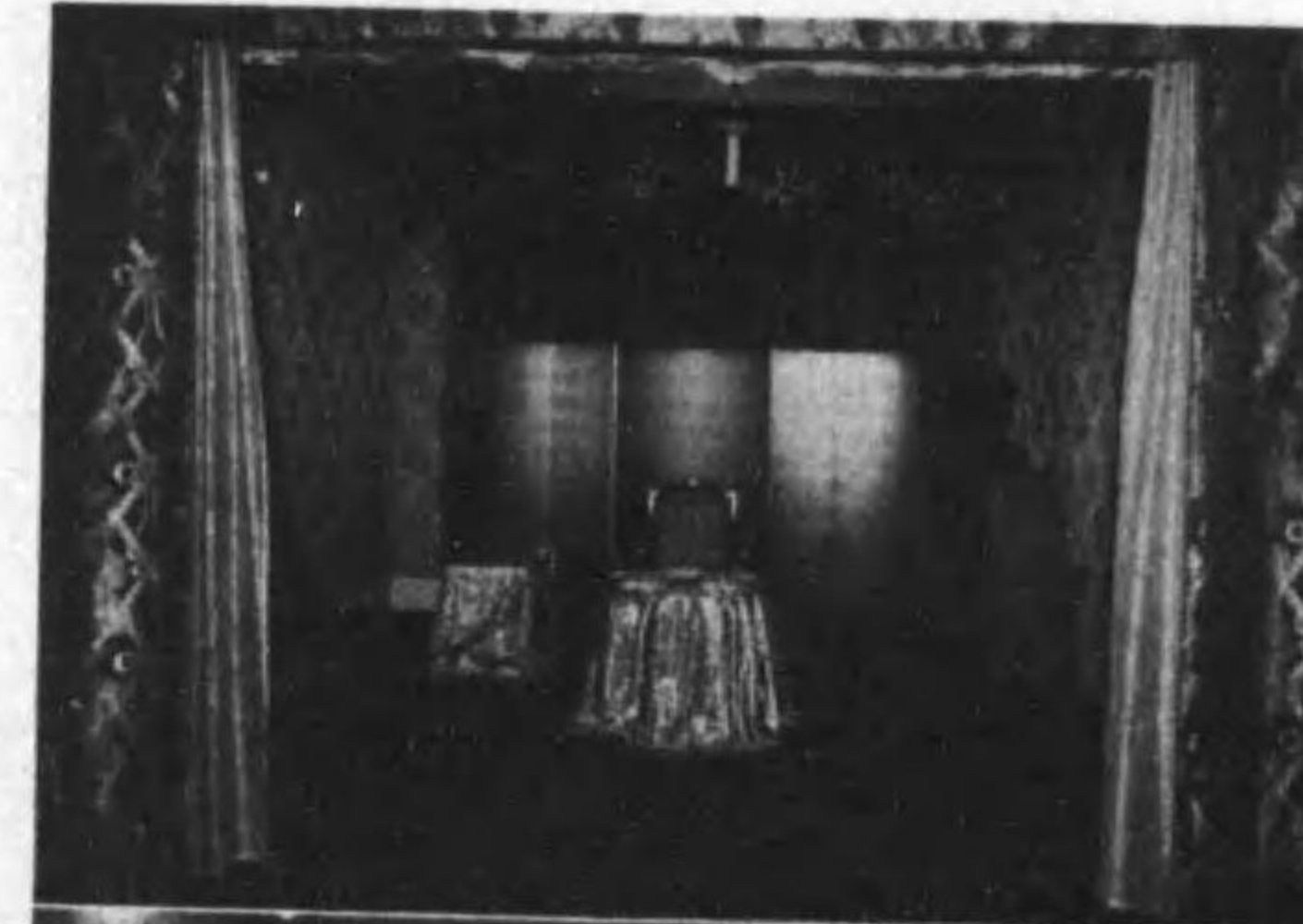


(帳進動)臺舞劇伎舞歌の興餘式迎奉催主市京東



面正座伎舞歌るた場式迎奉催主市京東

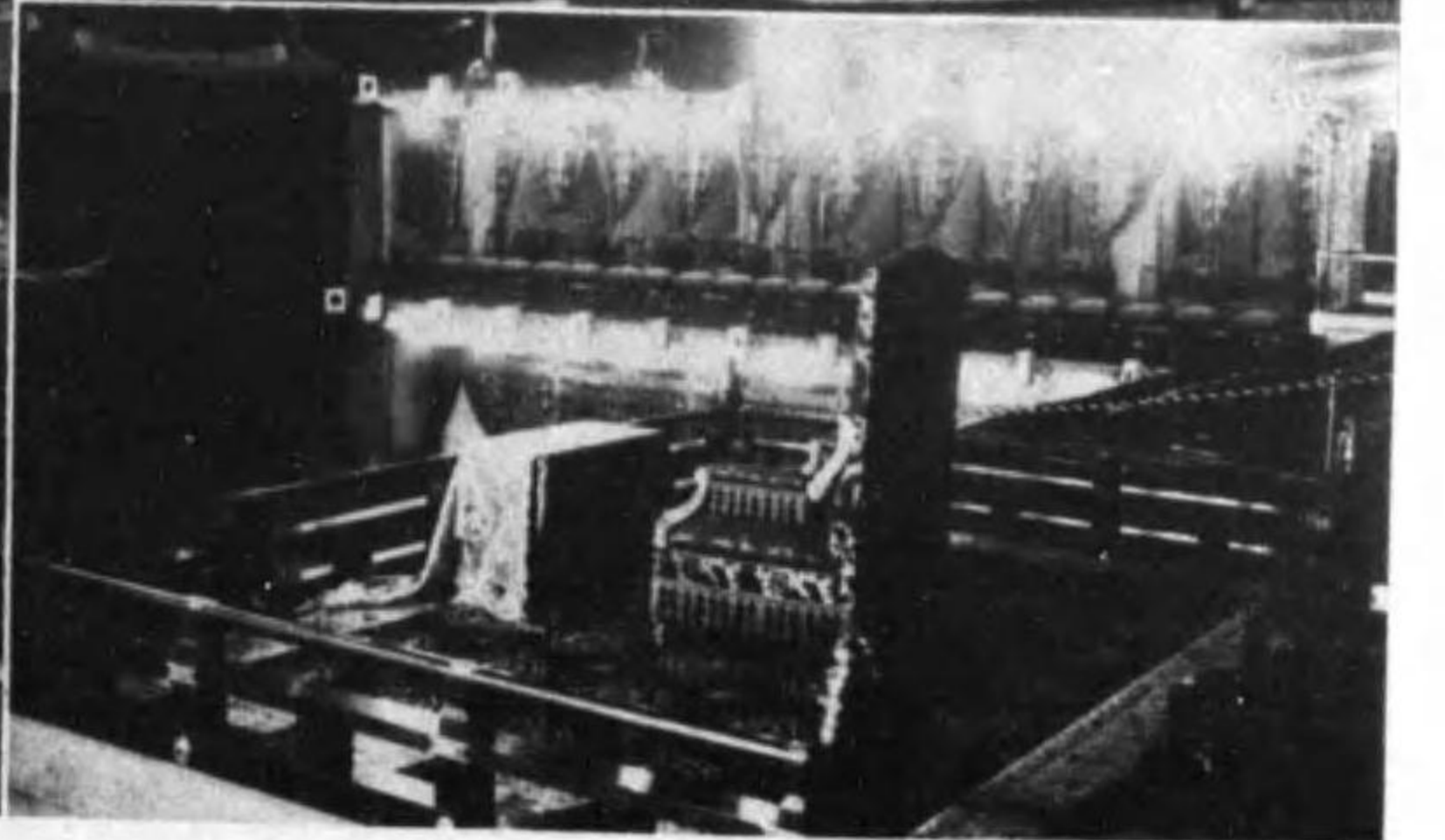
室憩休御場式迎奉



下陸帝皇 るけに場式迎奉催主市京東

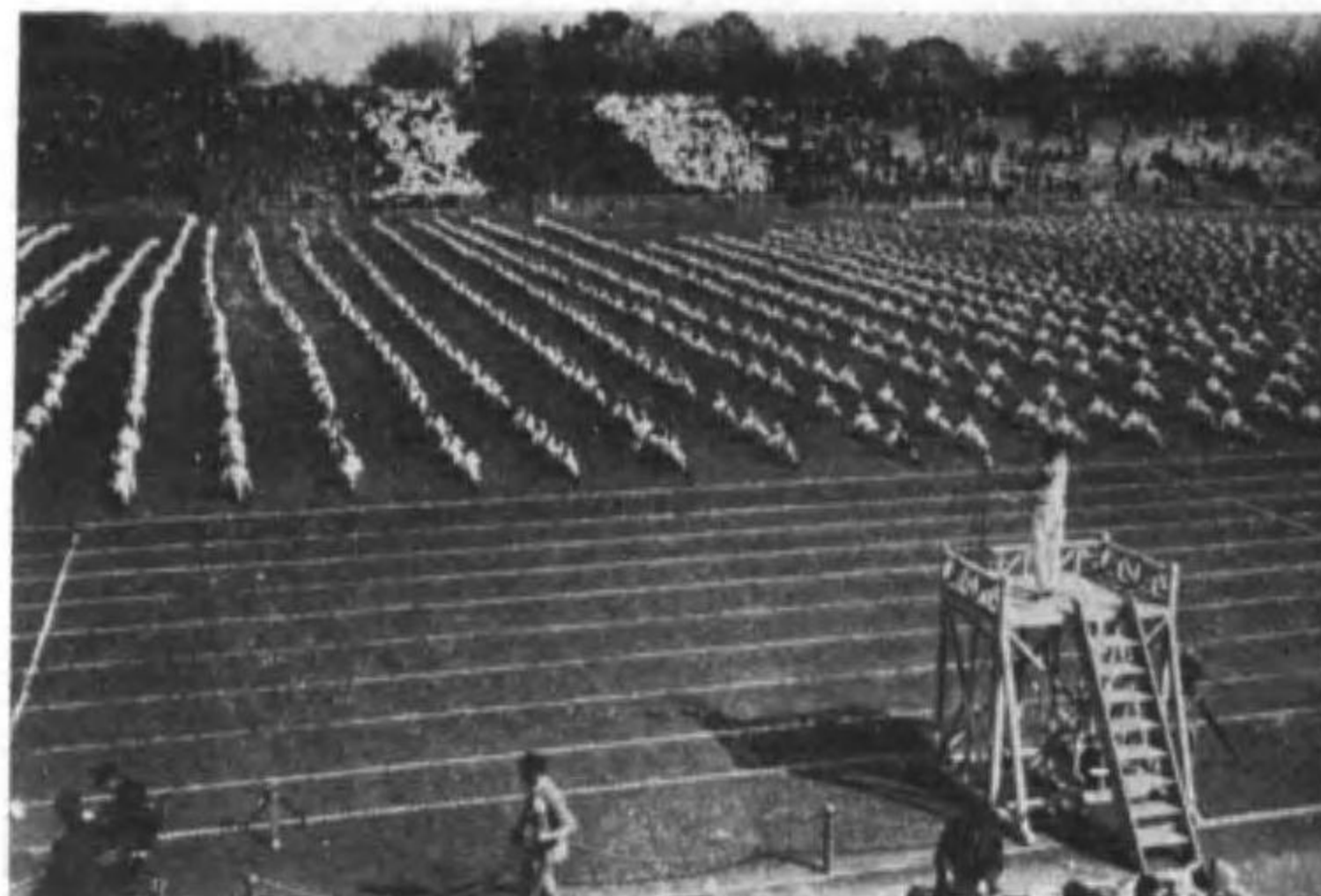


席々座伎舞歌場式迎奉催主市

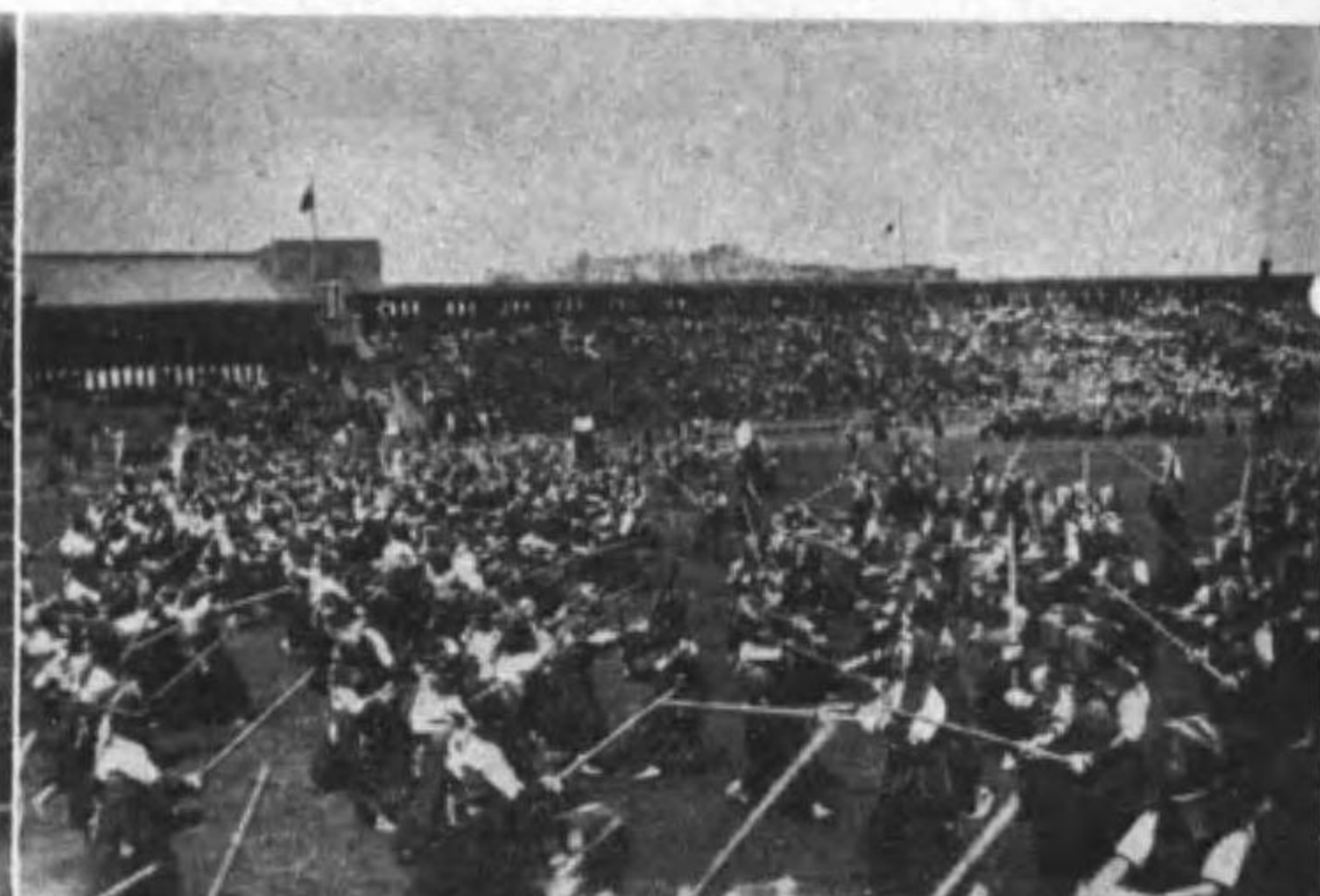


席寛臺御の場式迎奉催主市

(右同) 會大育體迎奉



(場技競苑外宮神治明) 合試野道劍迎奉の生學小市京東



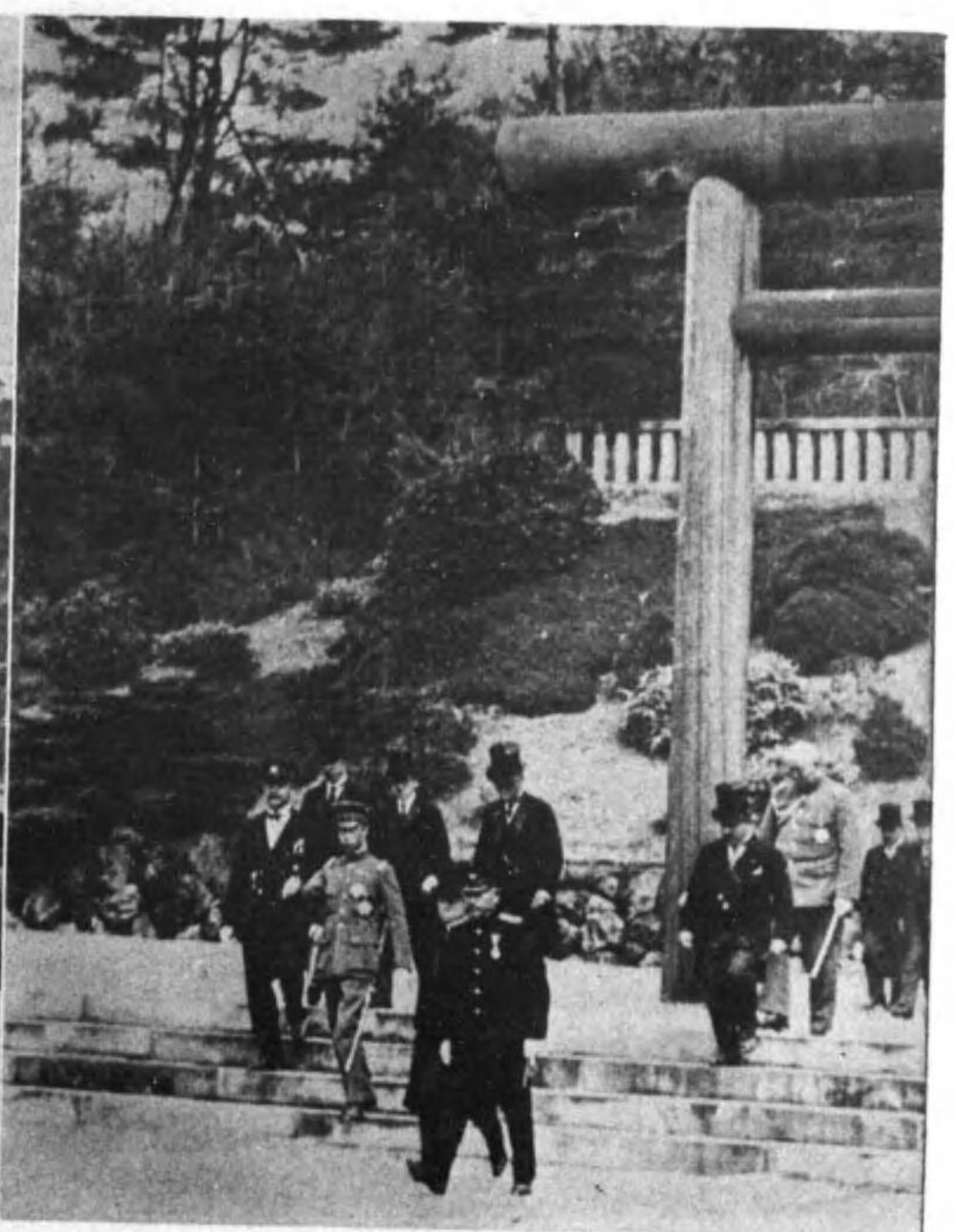
隨交の團年少滿日る契をみ誼の邦友



(てに堂會公谷比日) 會賀祝念記訪來御催主會協人婦滿日

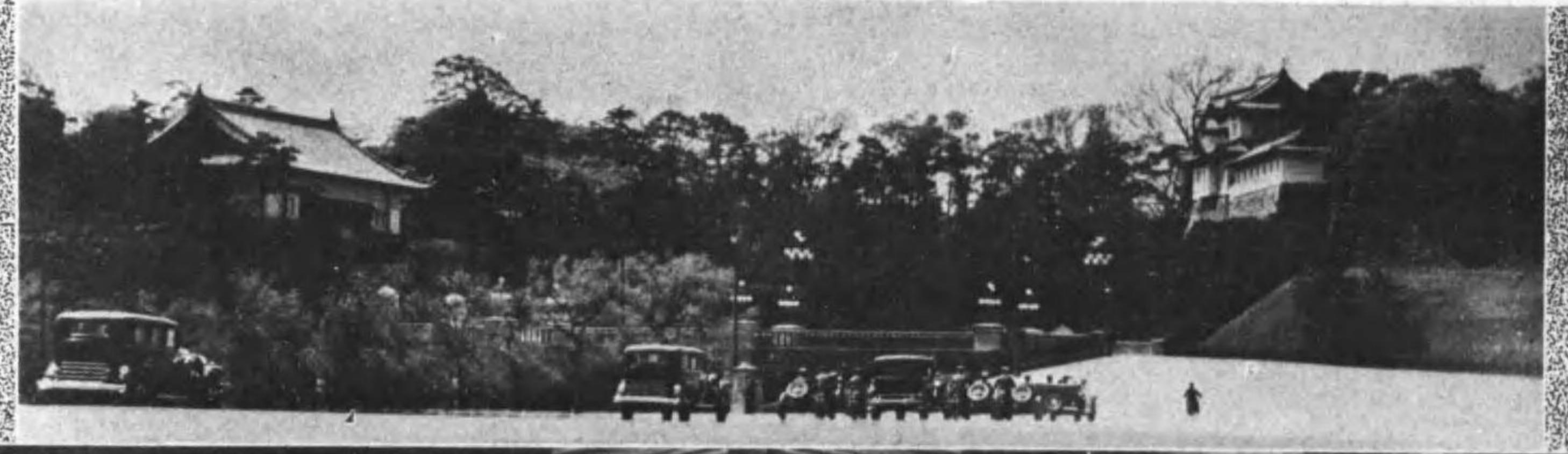


着御に談摩多



拜參御陵摩多下陸帝皇

入参へ中宮め爲の挨拶御の京退御下陸帝皇



下殿宮父秩のり送見御と車發御聯京東



手握御のれ別御と下殿宮父秩

拜参御堂聖島湯京東

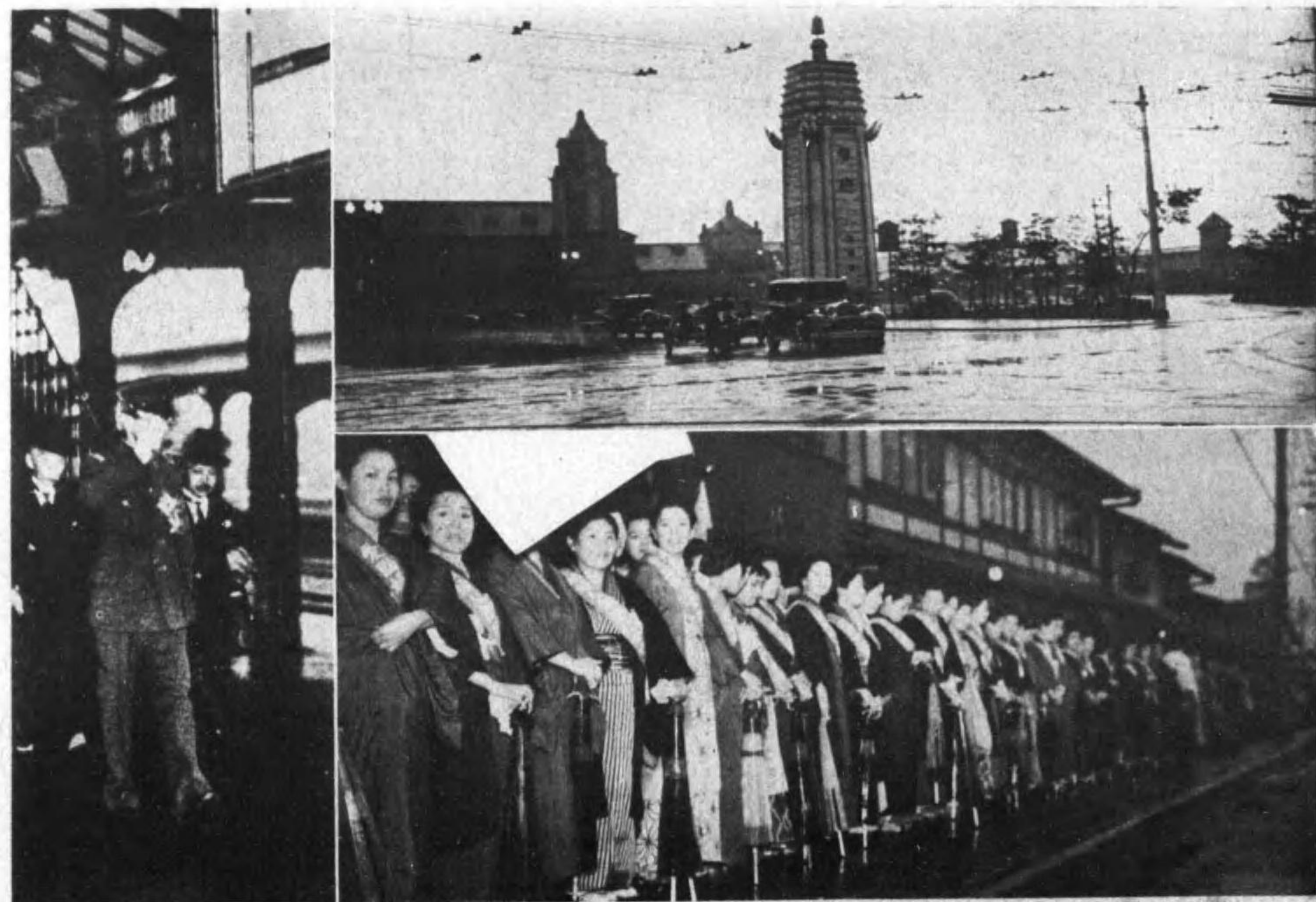


り成御院病成衛一第軍陸



問慰御を者傷負の變事洲滿てに院病成衛一第軍陸

薄雲の過通御を門迎奉前驛都京

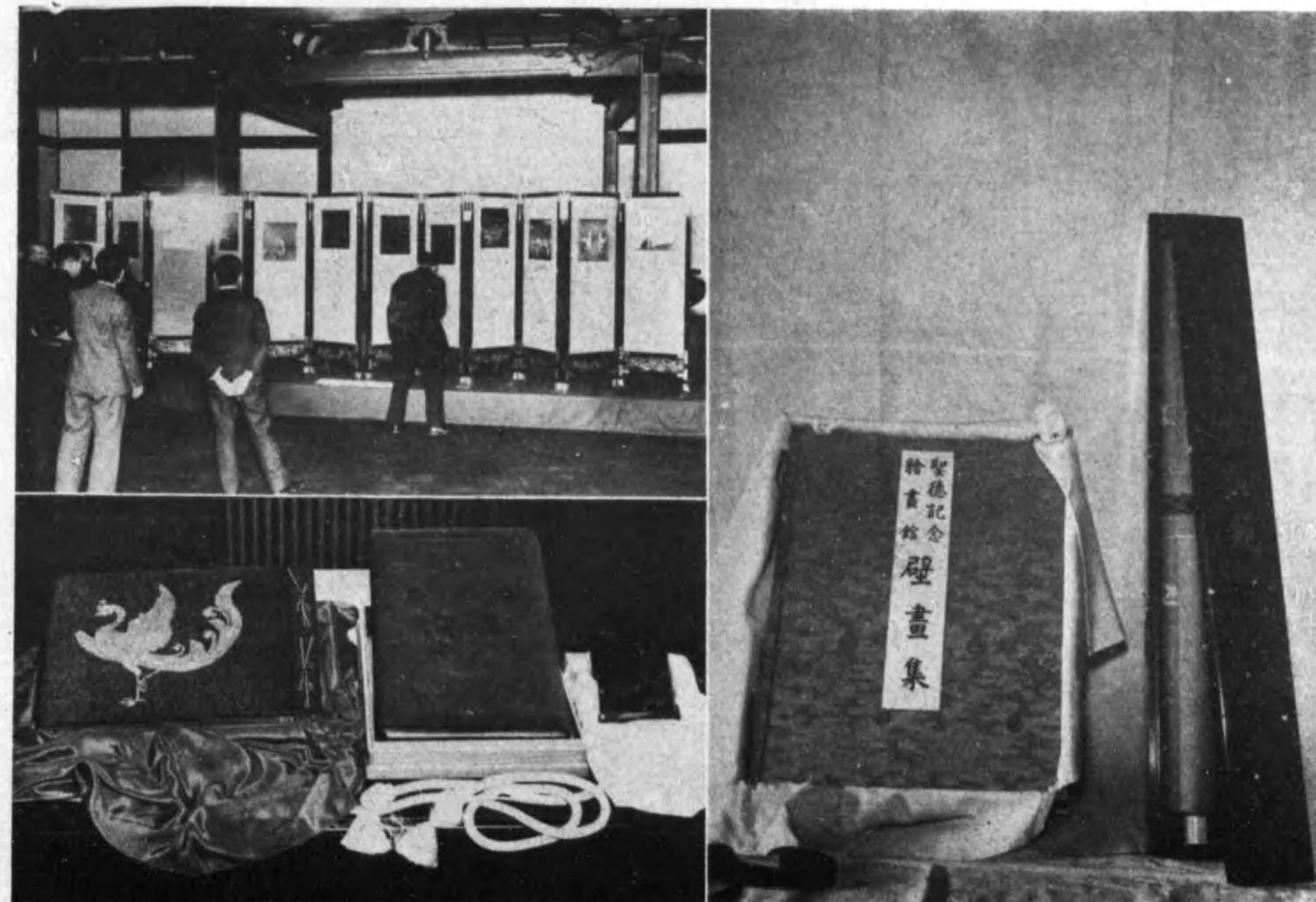


着御驛都京下陸帝皇

員會人婦國愛都京の迎奉中雨

風屏の上献市京東るため蒐を粹の術美本日

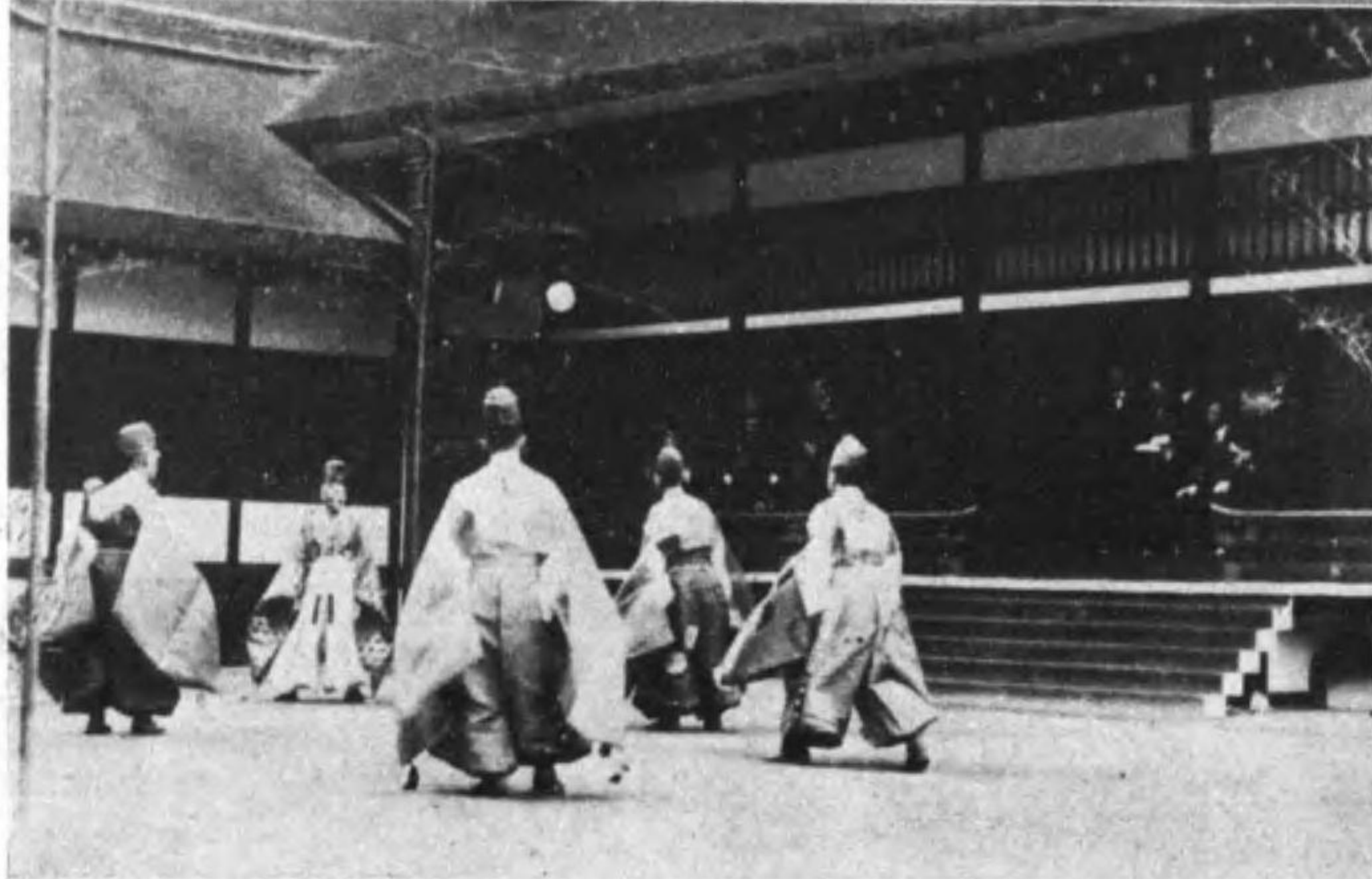
品上献種各



帖眞寫念記び及「表圖勢市京東」「要概政市」の上献りよ市京東

「集畫壁」と「園苑神宮神」の納献りよ宮神治明

（門禮建）入参御所御都京



し催の鞠蹴るす供に覽御

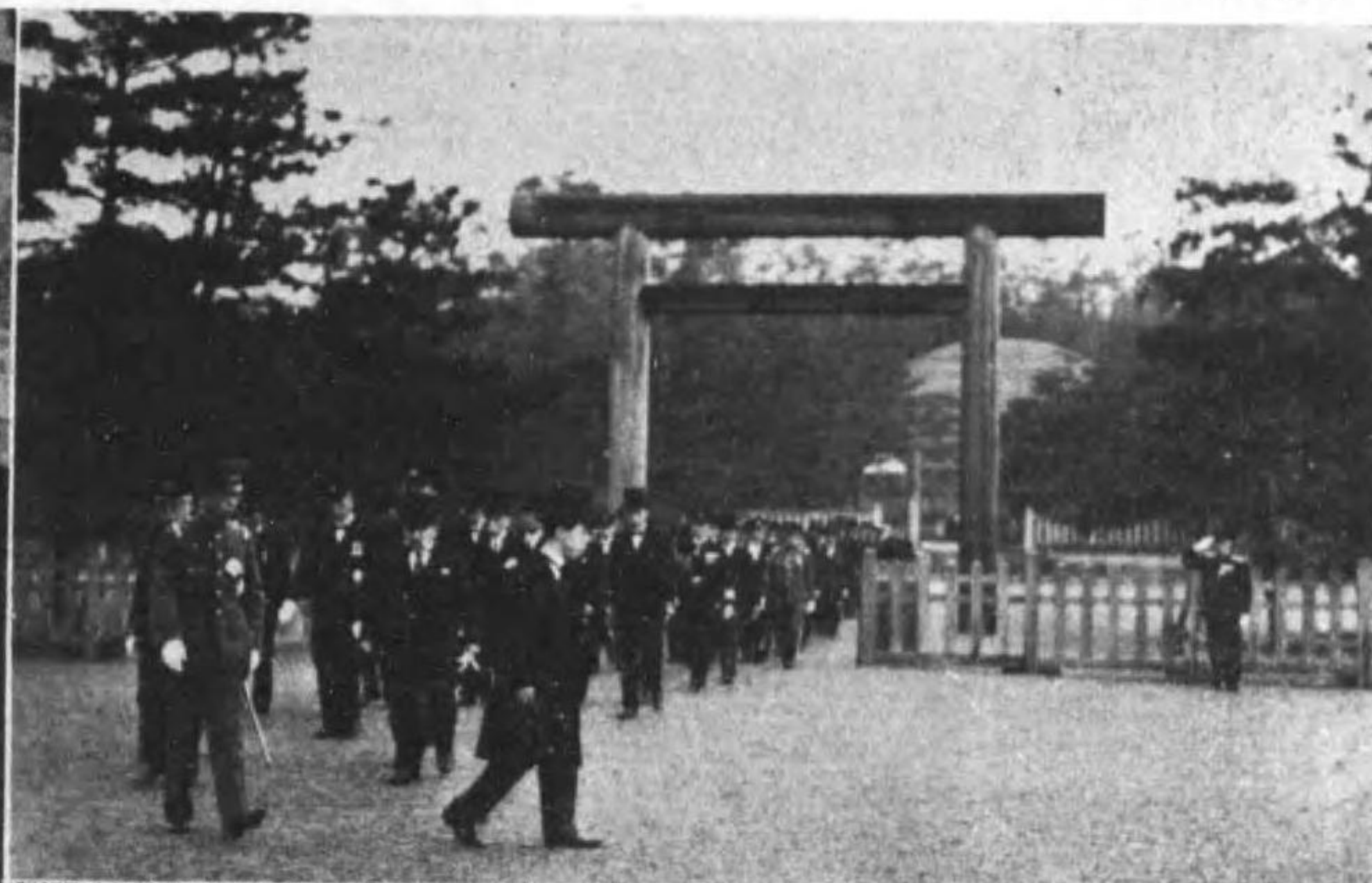


覽御鞠蹴下陸帝皇

拜参御陵山桃

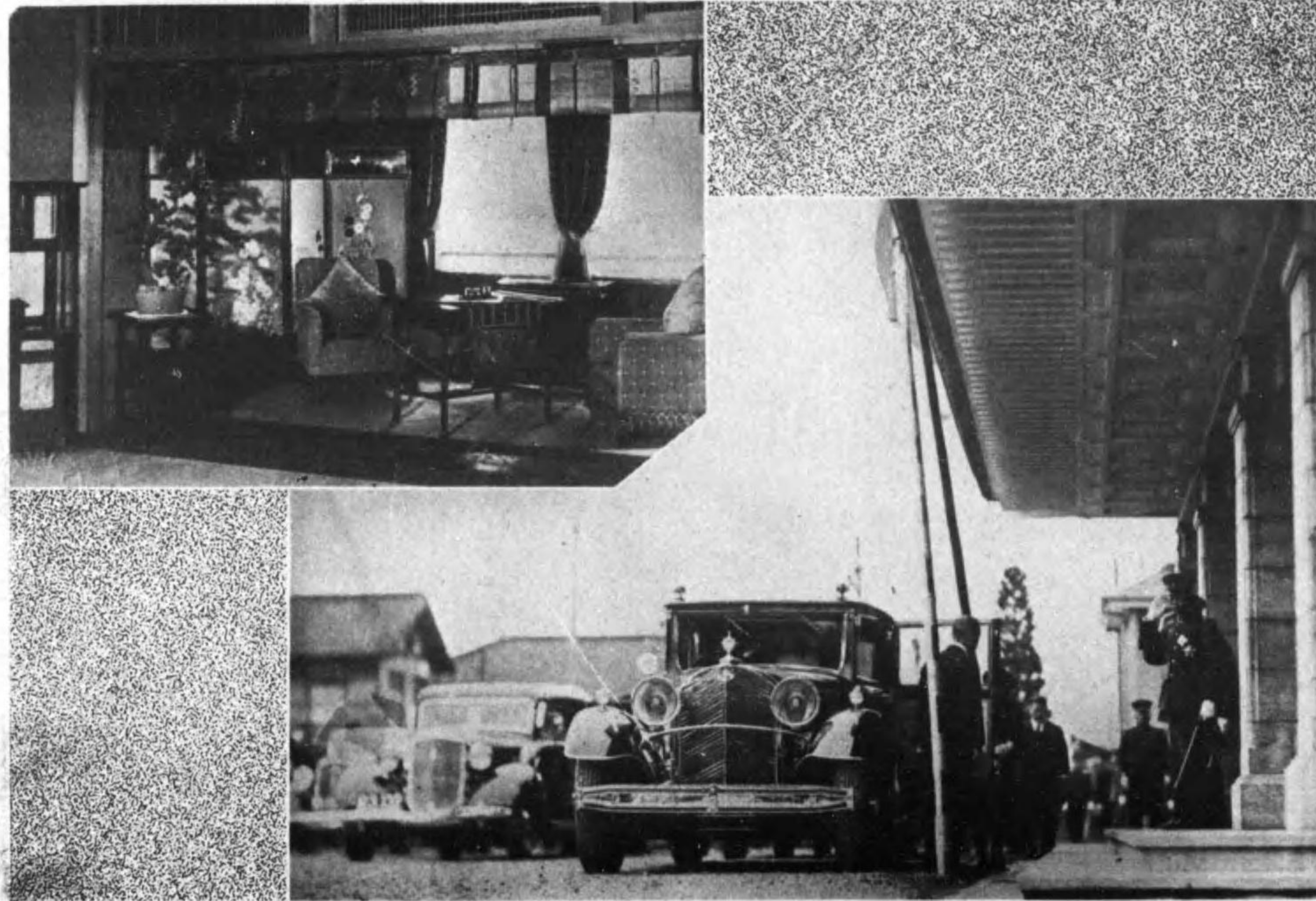


るは向に式迎奉れらせさへ終を拜参御に社神安平



唱奉歳萬るけ於に式迎奉の催主所議會工商市府都京

間居御のルテホ良奈



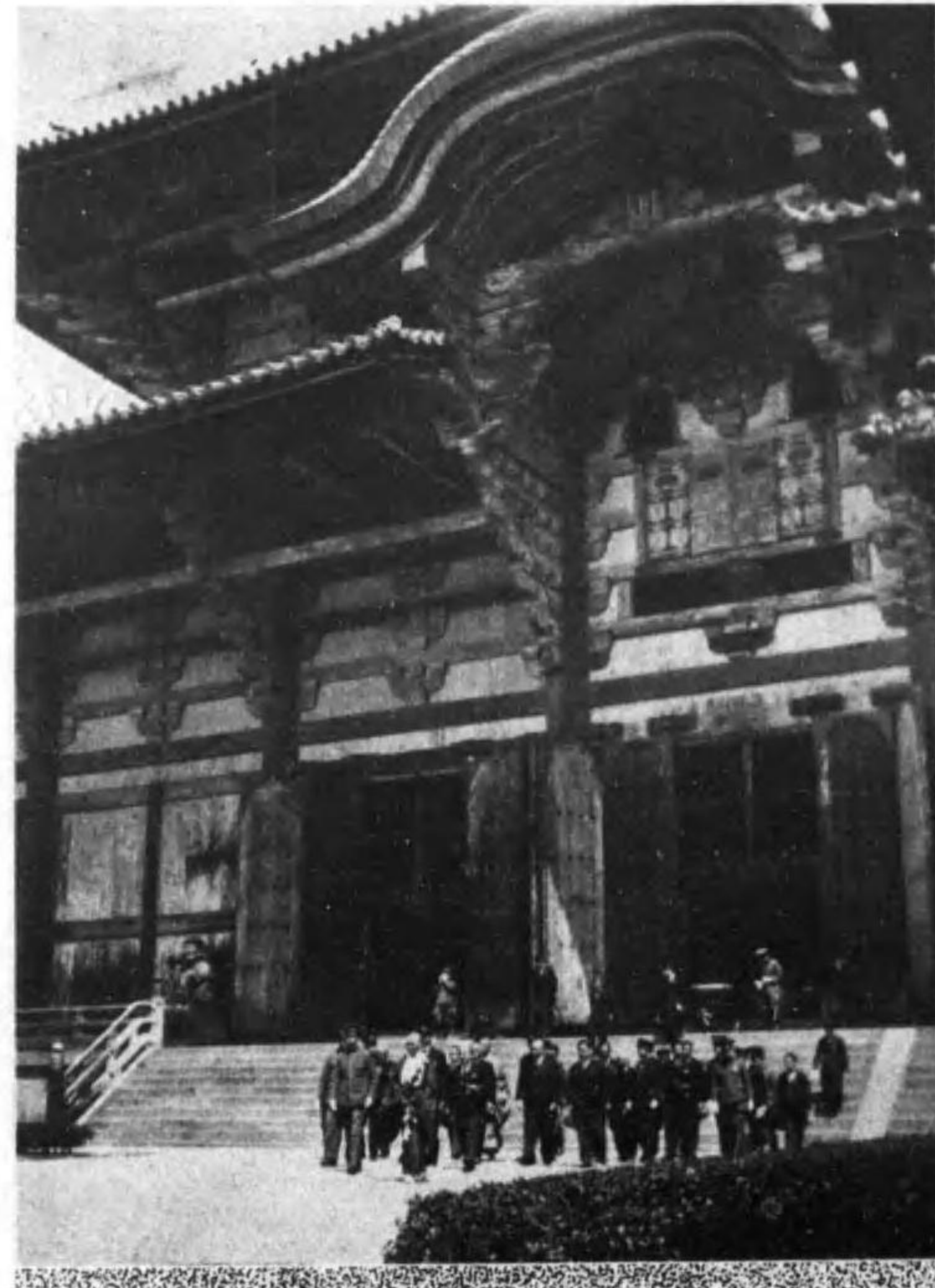
下陸帝皇の頭驛良奈



釋會御に迎奉の童學市全りとダシラエツのルテホ都都京



下陸帝皇の上樓閉金寺苑鹿都京



良奈大東寺の大佛殿御成

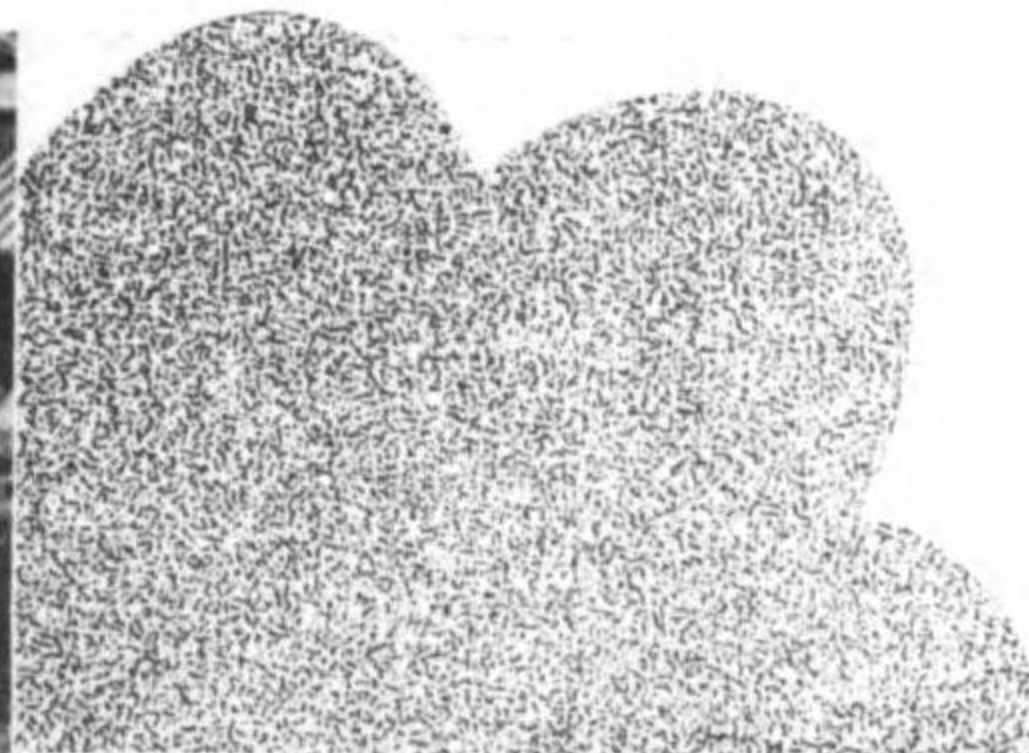


良奈正倉院御參觀

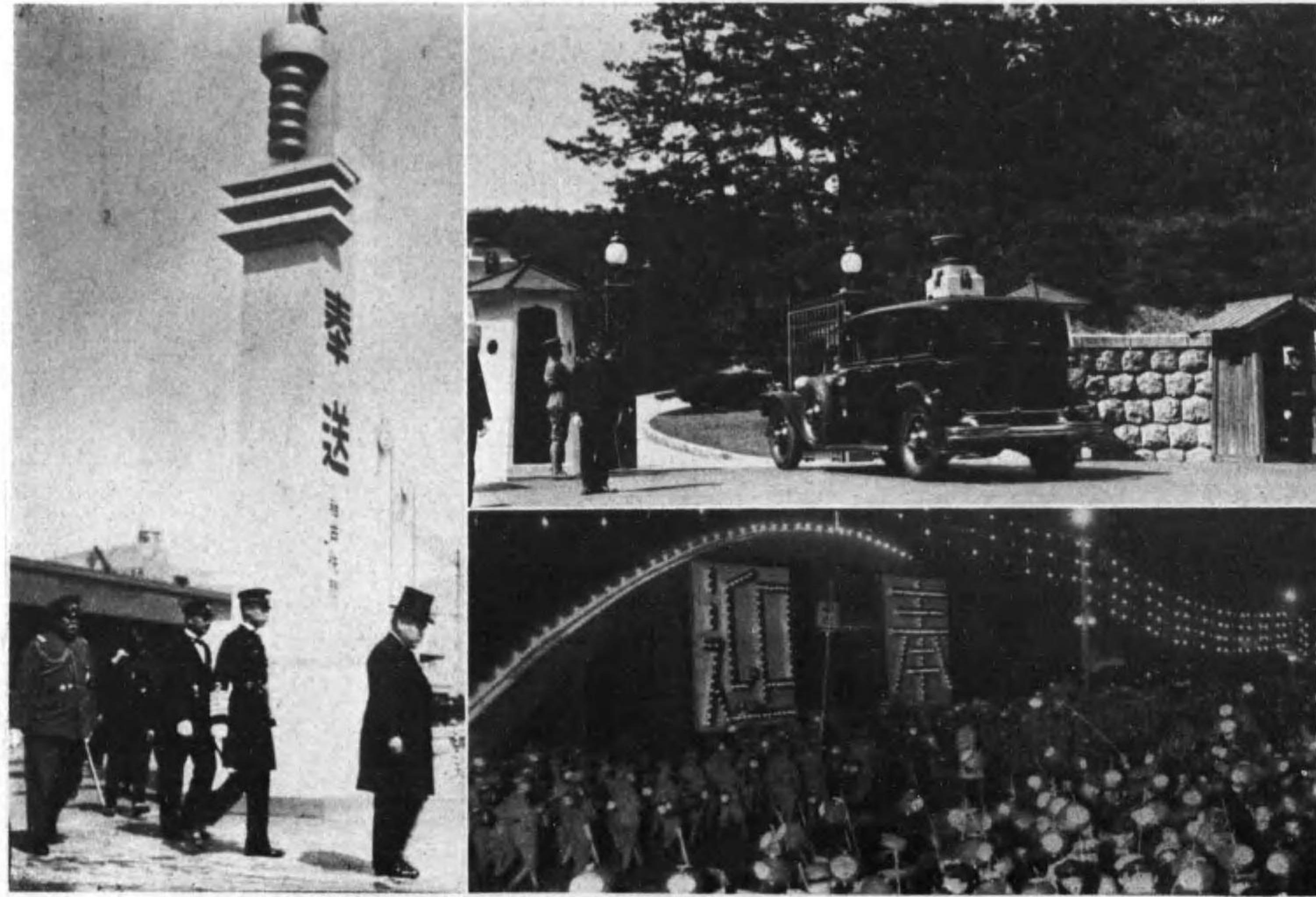
良奈名物鹿寄に興せさせ給ふ



良奈春日神社御參拜



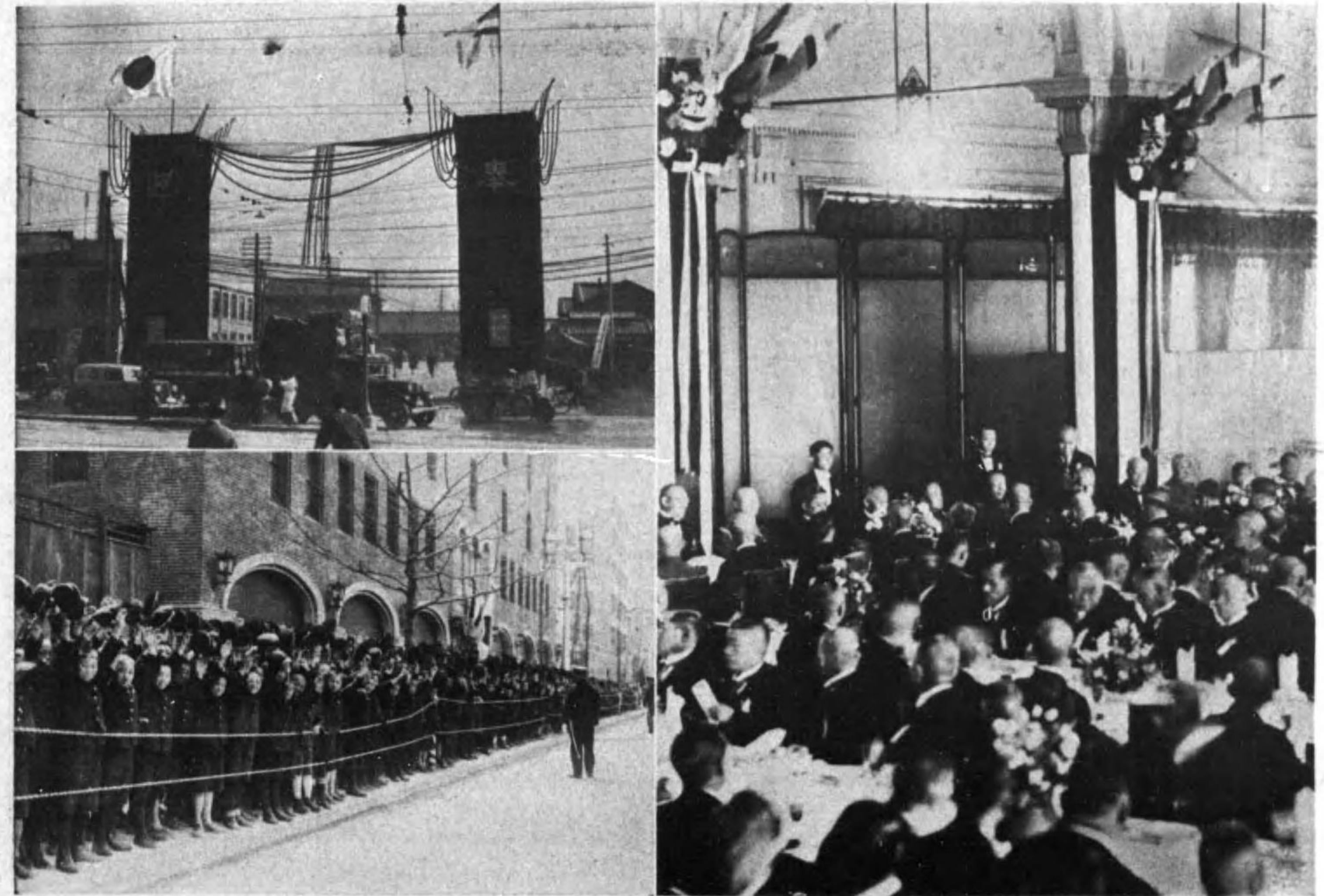
着御へ宮離庫武



過通御を傍の塔送奉頭埠戸神

列行灯提迎奉の等團年宵・生學の市戸神

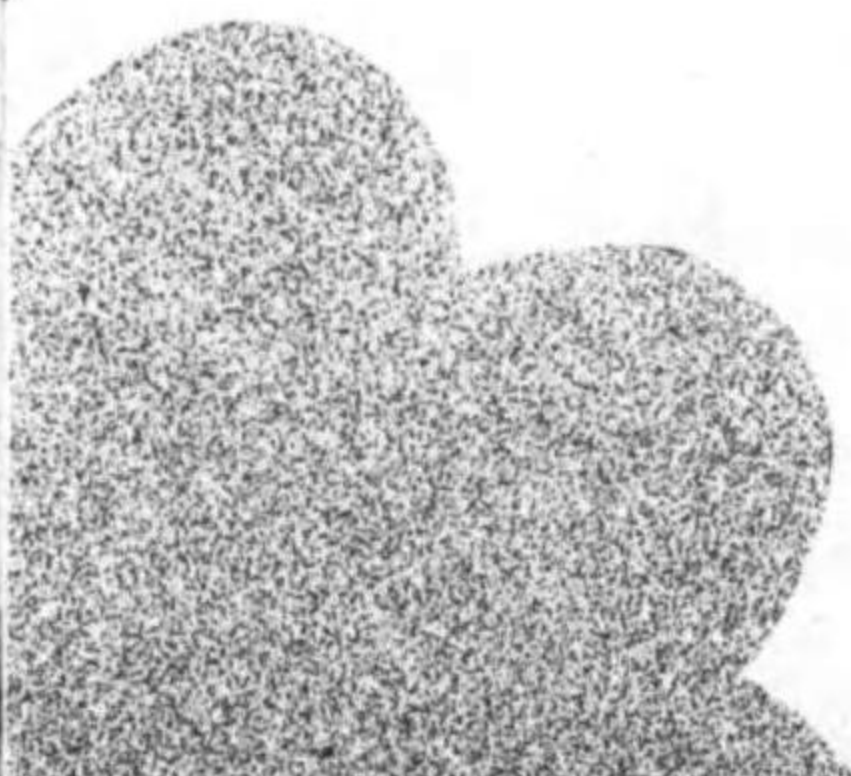
門迎奉の前驛町湊市阪大



生學小の迎奉るけ於に筋堂御市阪大

會迎奉催主市るけ於に堂會公央中市阪大
(下殿官長團師四第邇久東は左の下陸帝皇 央中)

生學小祝奉の島宮藝安

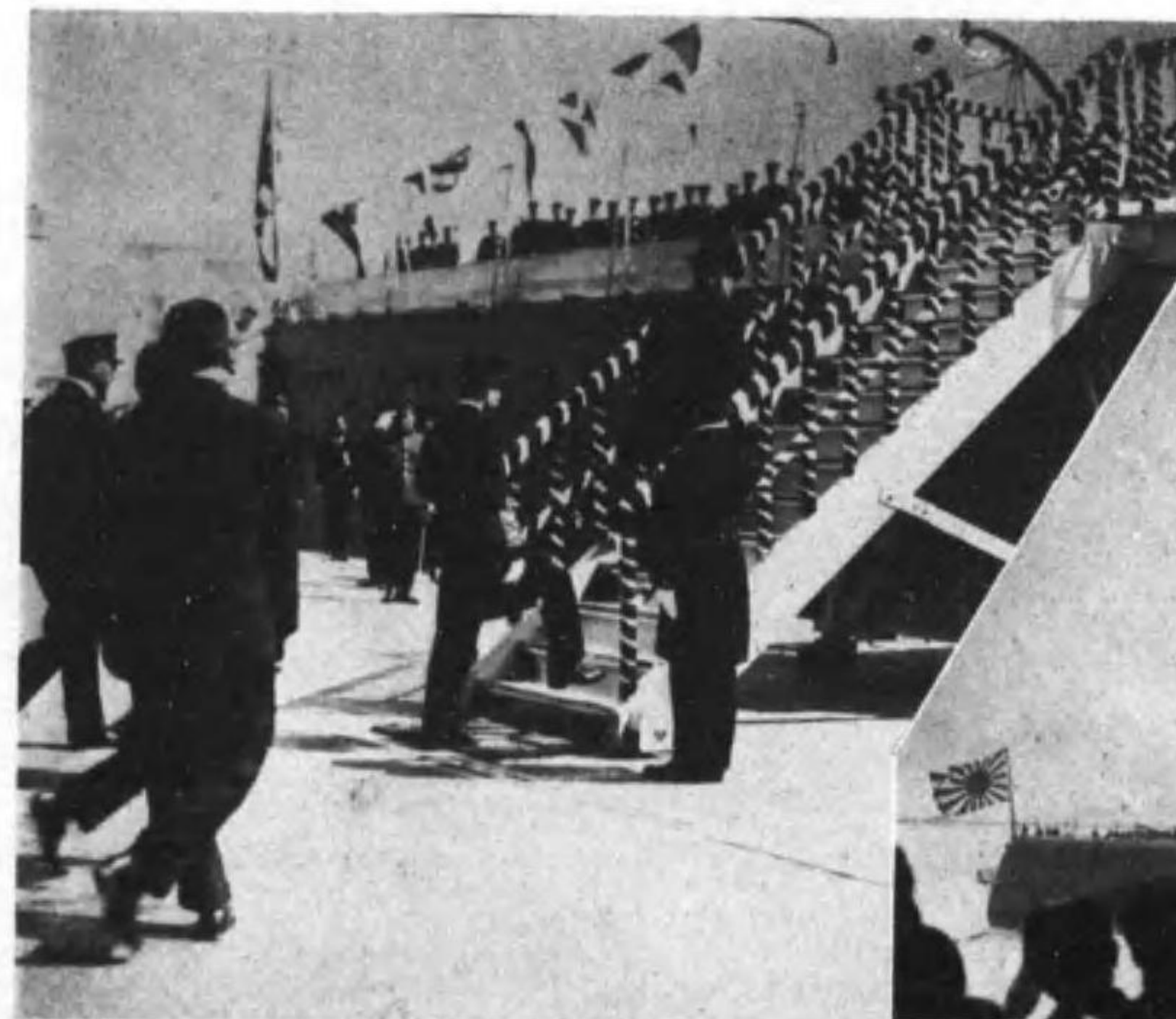


るらせは向に社神島殿地覽巡御の後最

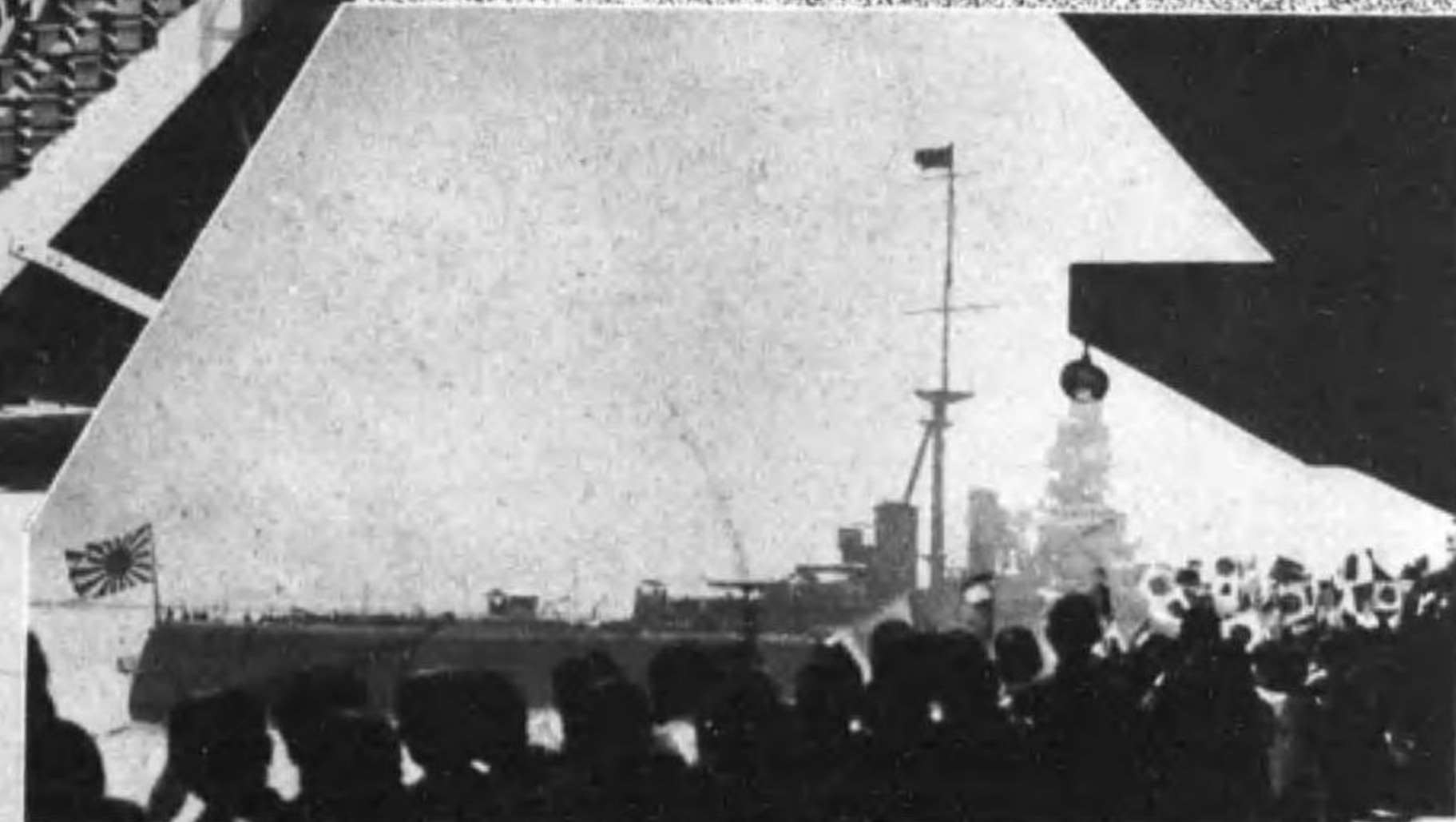
(要塞司令部檢閱済)

(要塞司令部檢閱済)

艦乗御に艦召御し際に出御港戸神



衆群の送奉と艦召御の頭埠港戸神



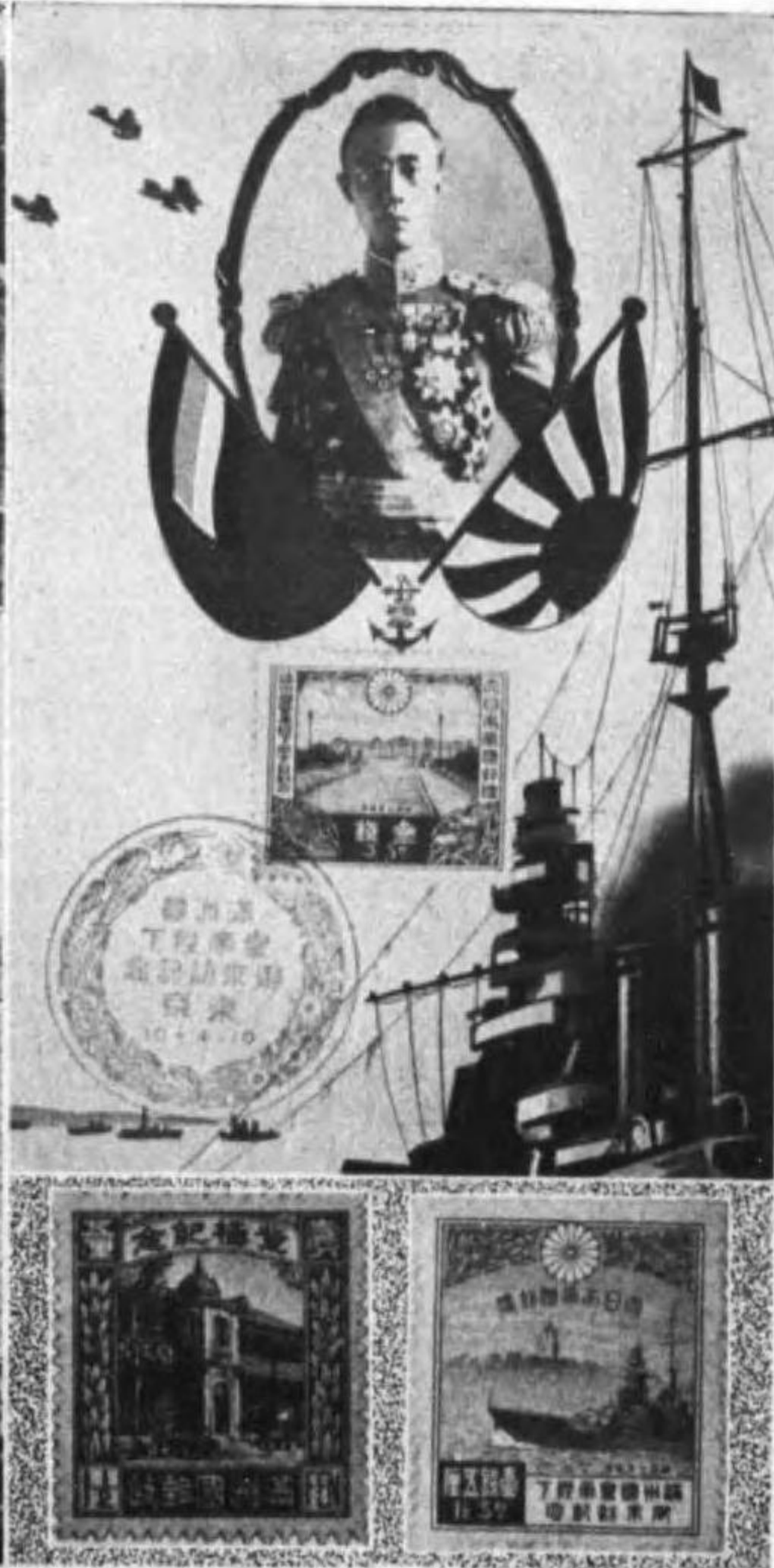
(船召御は艇火内央中) 悦滿御に割鯛の志有村内莊縣川香

幣輔國洲滿 幣紙新の行發行銀央中



行總行銀央中洲滿

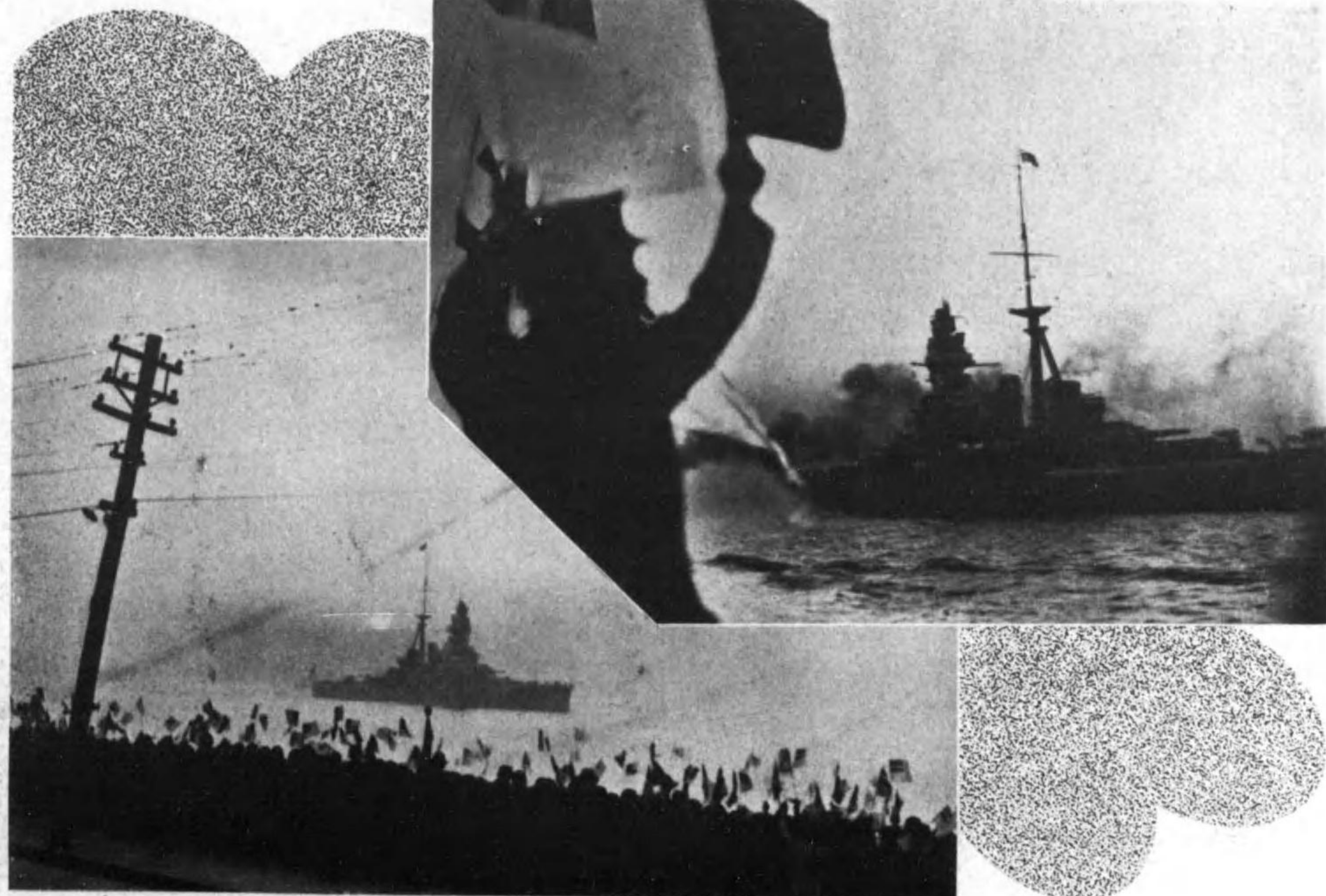
ブックス・書葉繪念記訪來御



票郵念記極登

手切念記訪來御

(津阪檢部令司塞要關下) (上言てに號信旗手を詞の送奉のりよ事知縣岡福山畑) 過通御峽海門關艦召御



(津阪檢部令司塞要關下)

過通御峽海門關艦召御

還時御に城宮てつ成禮大の極登



壇天極登の場廣天順村花杏



ふ給き赴に壇天の國肇てしまで出を門宮獨御



塔念記大國建國洲滿たれさ設建に麓寺山角關海山



印調の書定議滿日ぶ結を直親の隣善

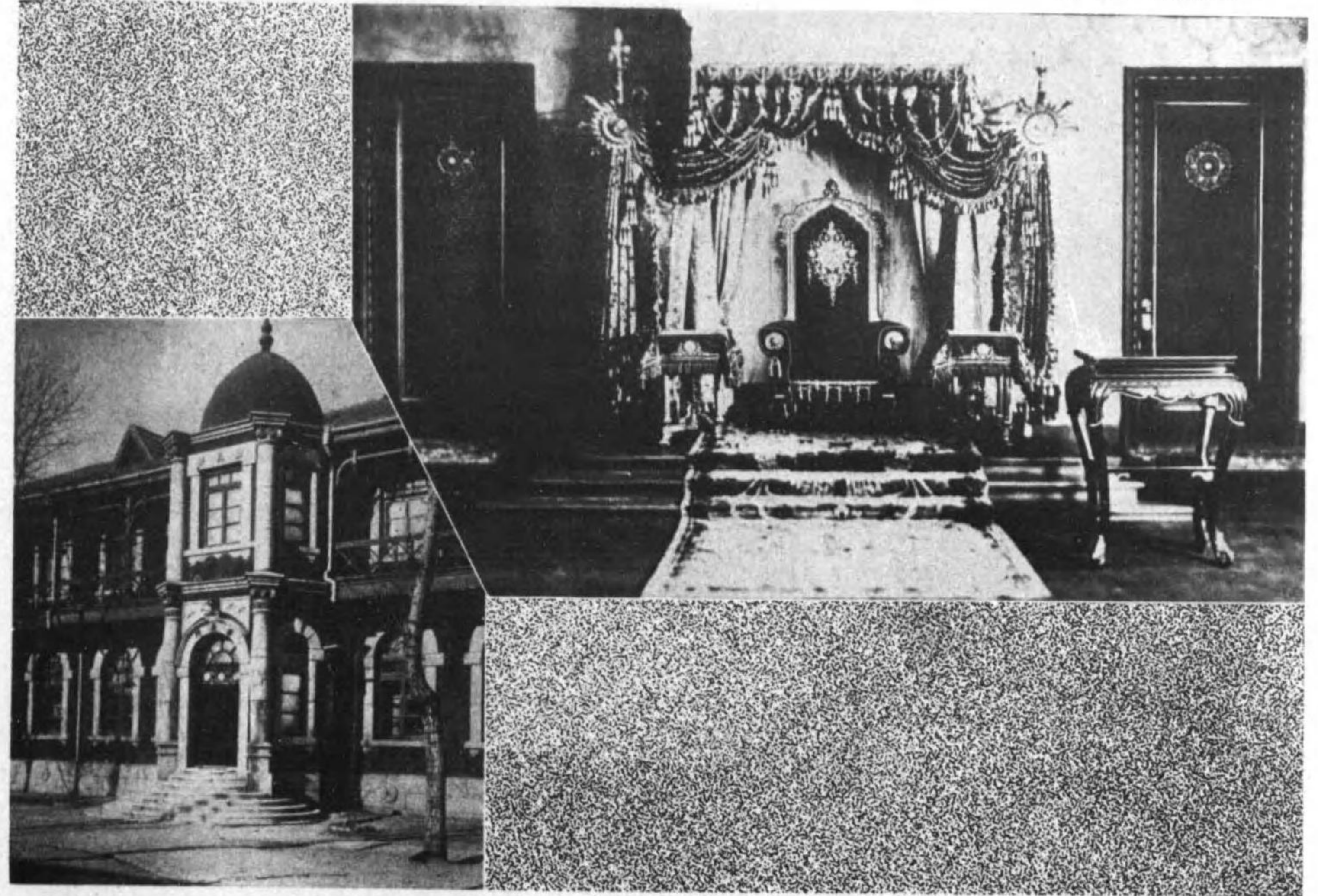
昭和十一年五月四日 奉天

(影撮念記會餐午催主權全刈菱) 下陸帝皇の席同御と下殿宮代名御父族



影撮念記式呈捧書國の使大權全滿駐南

座玉の下陸帝皇



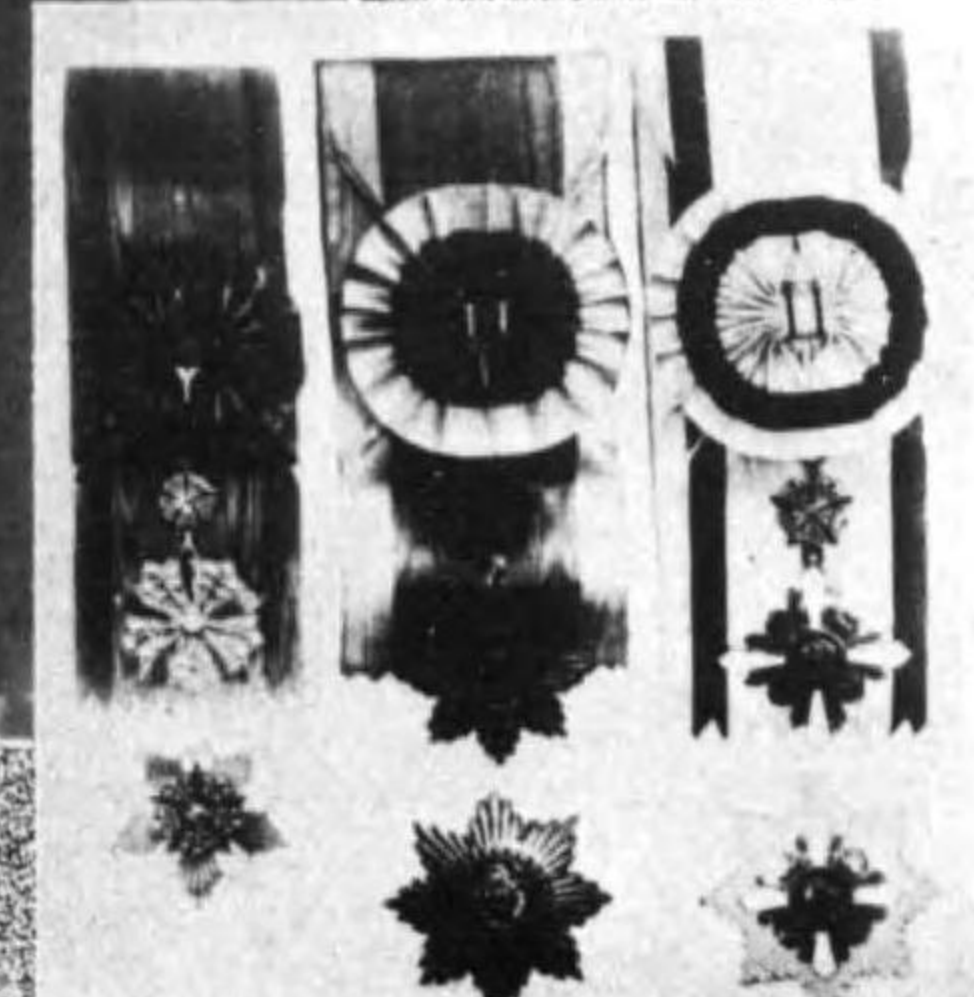
樓民勤府內宮

人 要 府 政 國 洲 滿



張 人 毅 式 威 臣 大 部 政 民 • 修 鑑 丁 臣 大 部 通 交 • 鵬 海 張 長 官 武 從 侍 • 惠 景 張 臣 大 部 軍 • 麟 瑞 沈 臣 大 府 內 宮

官 大 國 洲 滿 の 章 雲 景 賜 位 一 勳 叙



滿 洲 國 勳 章

章 副 及 及 章 綬 大 花 蘭 位 勳 大 龍 光 龍 章 副 と 章 綬 大 光 龍 章 副 に び 並 章 雲 景 位 一 勳

- 右 上 司 馮 法 部 大 臣 清
- 外 交 部 大 臣 石 介
- 尚 書 府 大 臣 金 鑑
- 國 務 總 理 大 臣 鄭 孝 賢
- 監 察 院 長 羅 振 玉
- 財 政 部 大 臣 熙 洽
- 實 業 部 大 臣 張 燕 卿

隊艦防江の上江花松



叭喇床起の軍國洲滿



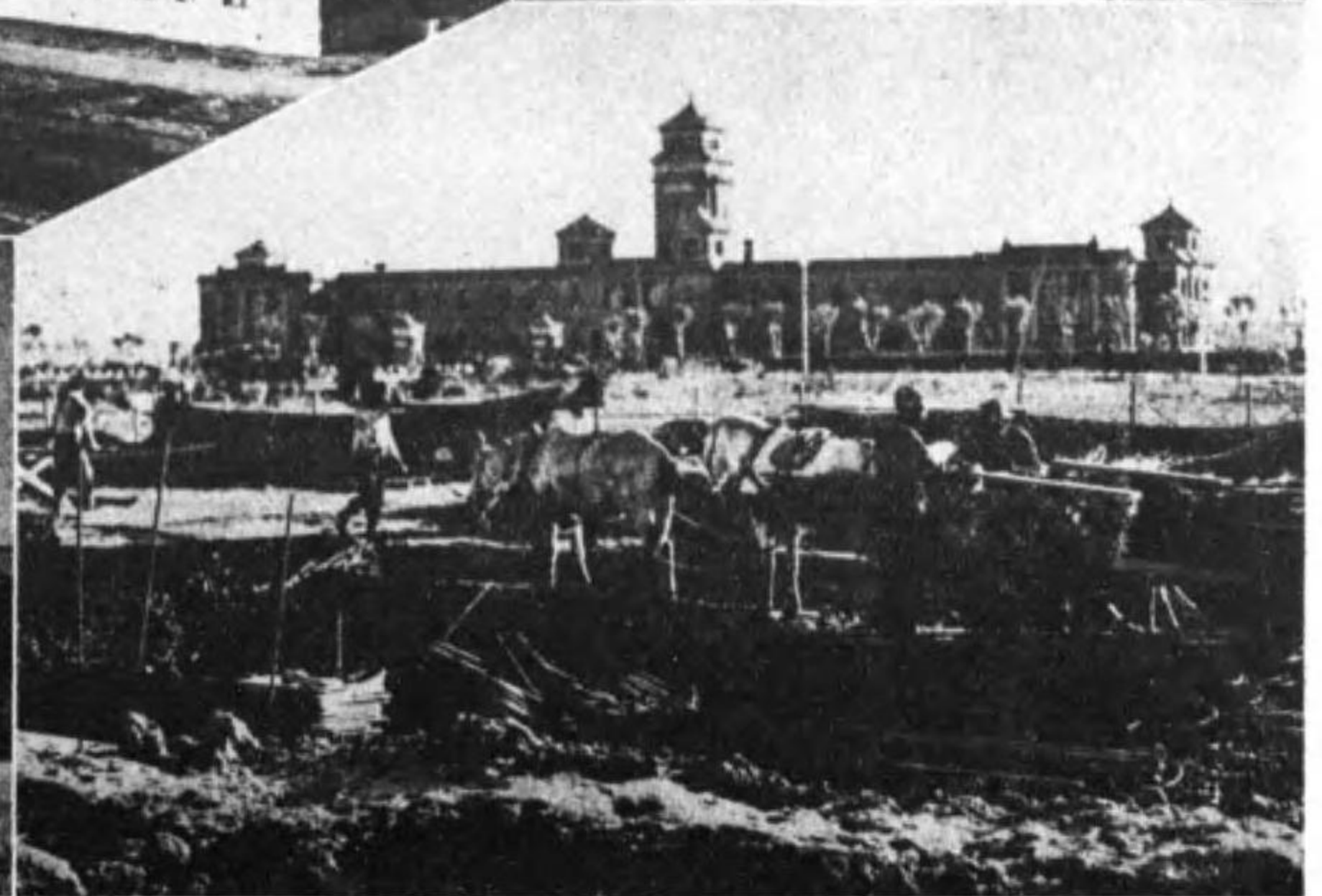
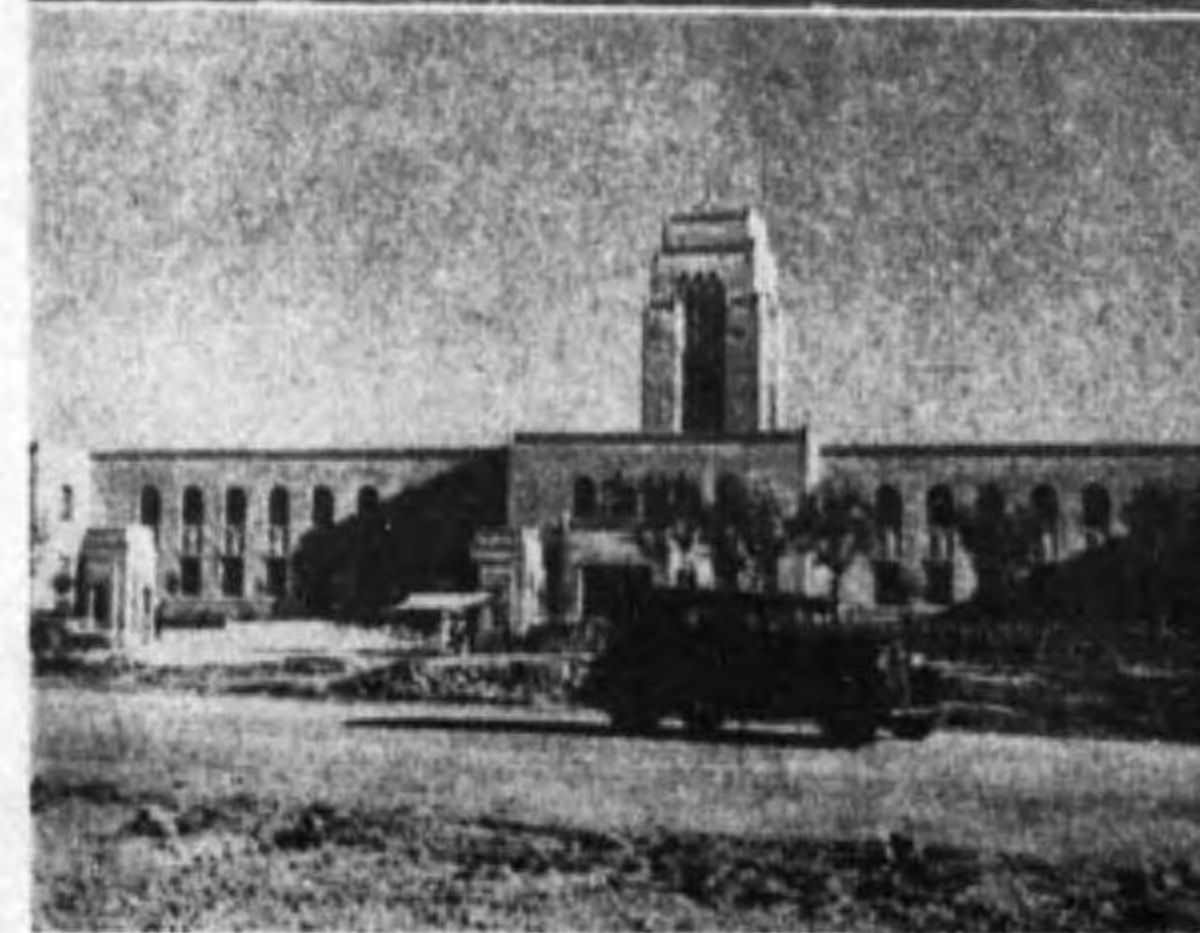
隊兵騎古蒙るな快壯

鳩用軍の部政々軍國洲滿

舍廳部政財



院務國



局設建都國

舍廳部法司・部交外

首都新東京の繁華街日本橋の通島

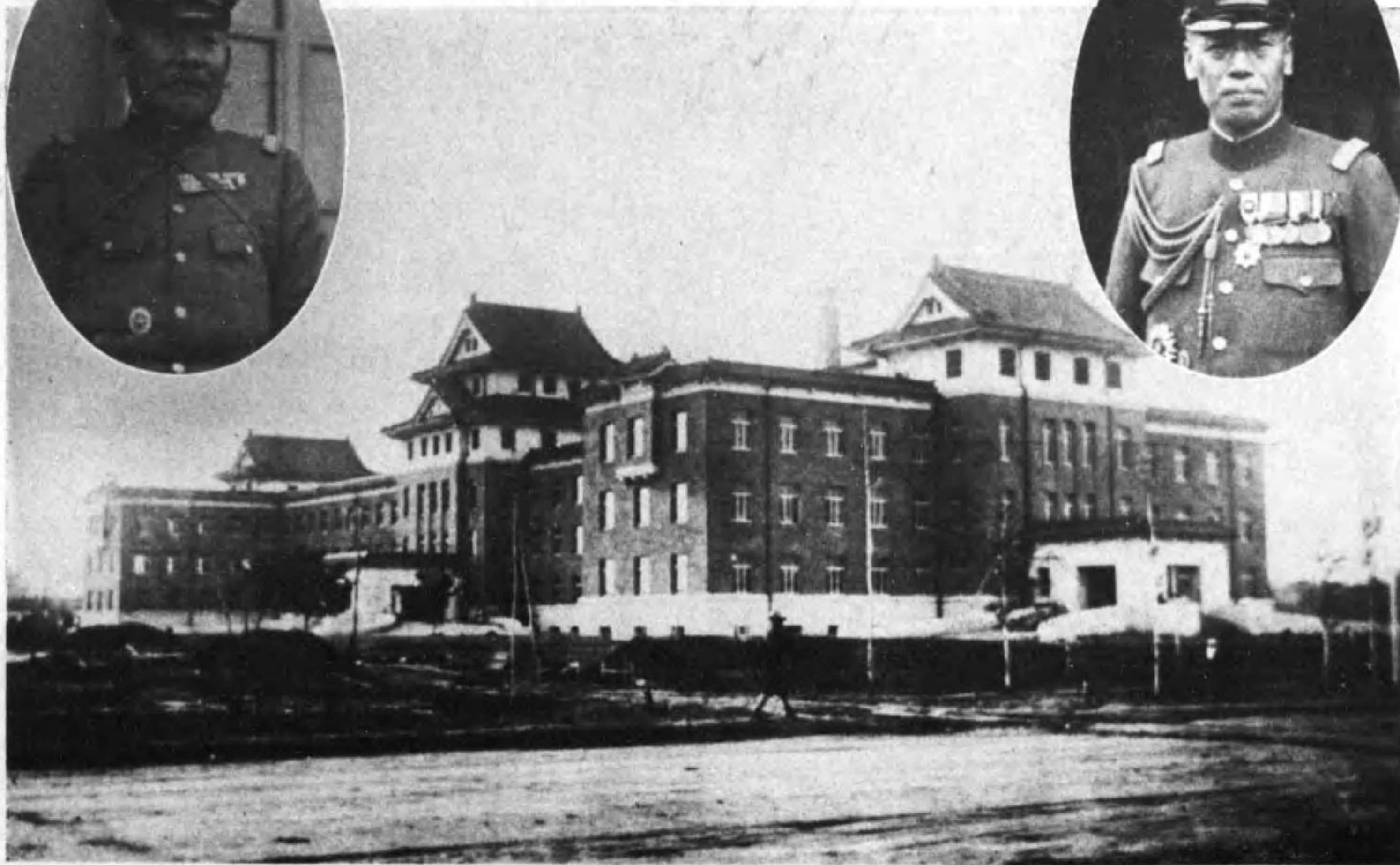


基礎工事急ぐ新東京事務所作業

在滿特命全權大使
關東軍司令官
南次郎大將



關東軍參謀長
西尾壽造中將



關東軍司令部

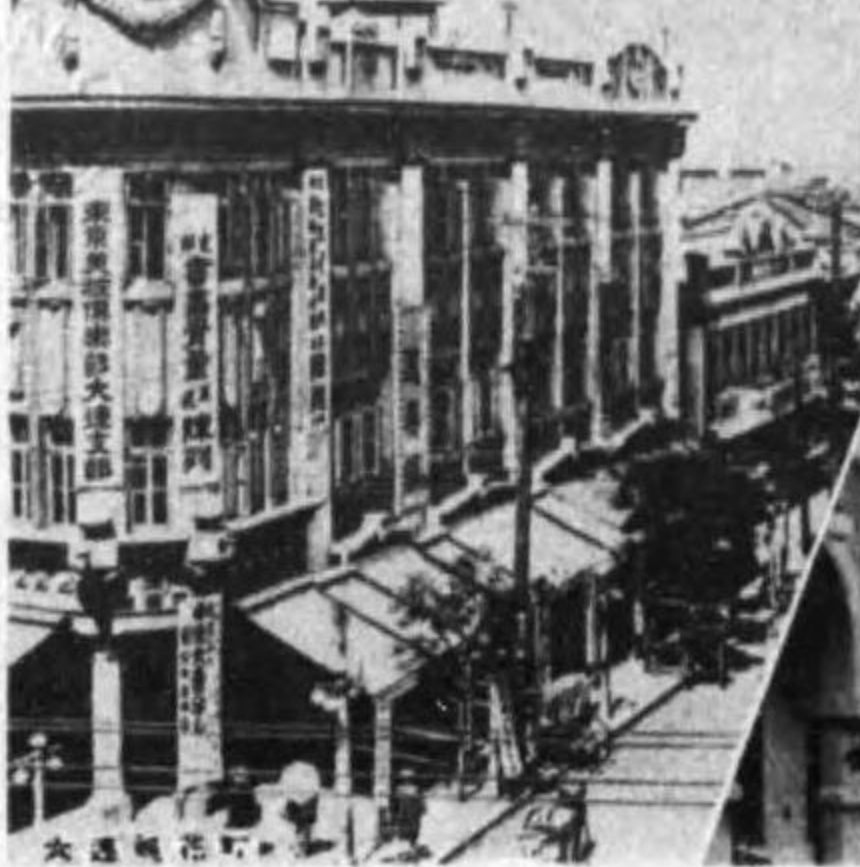
院病鐵滿連大



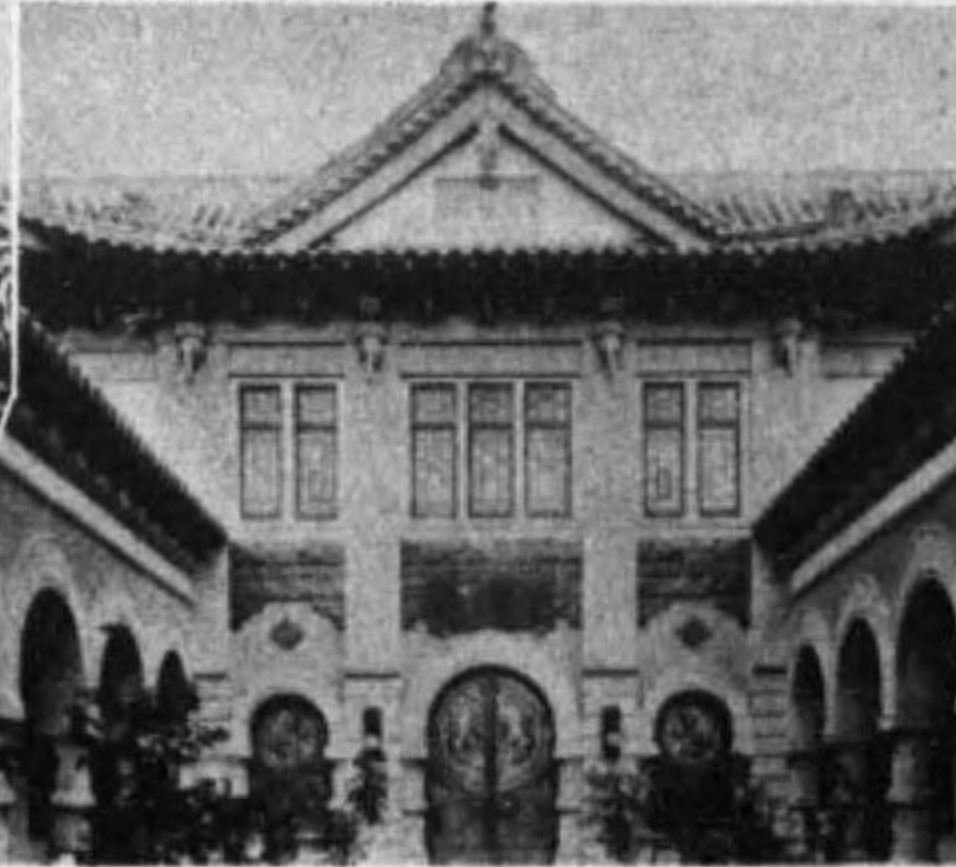
社本鐵滿連大



大連常盤町通り



り通町花浪連大

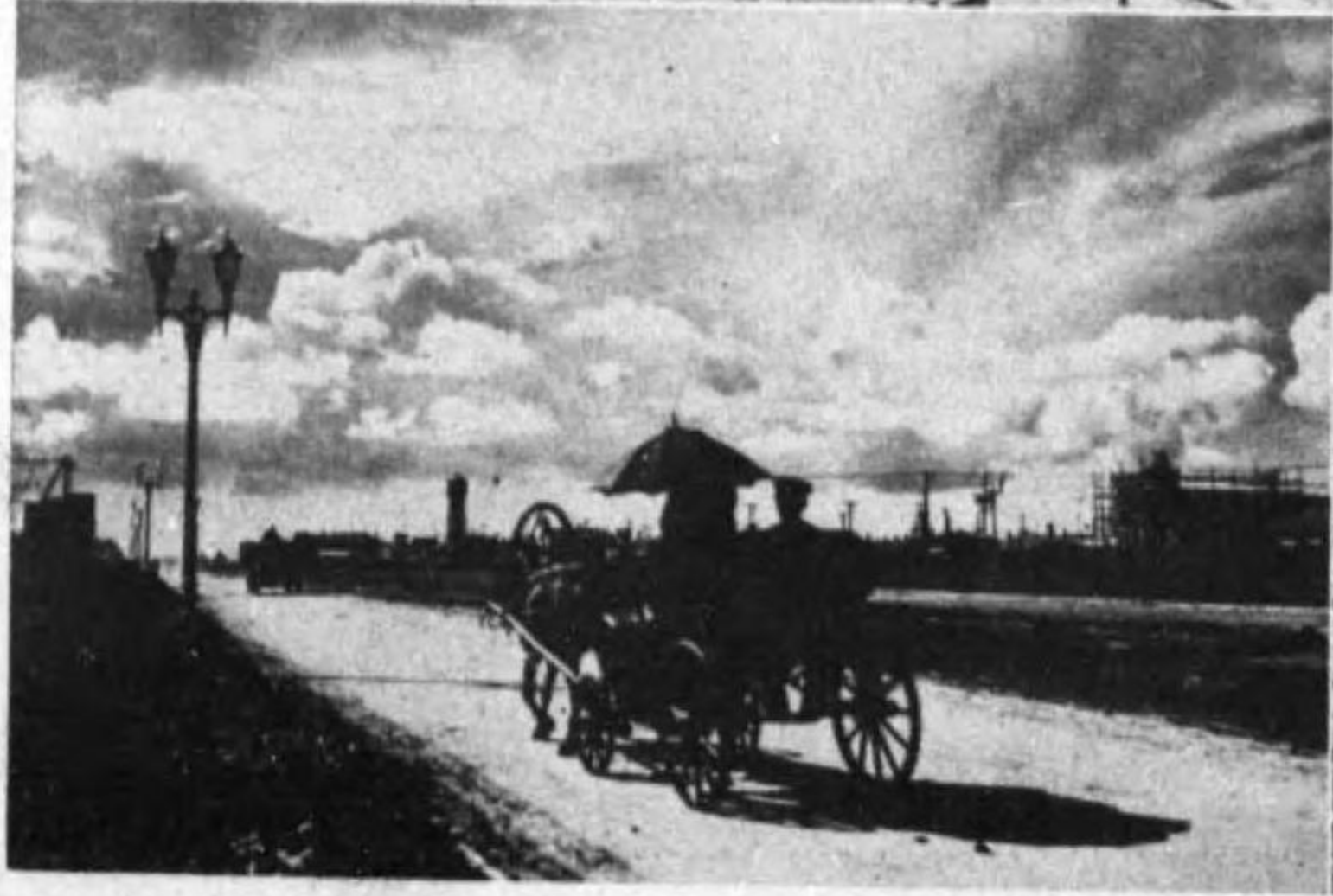
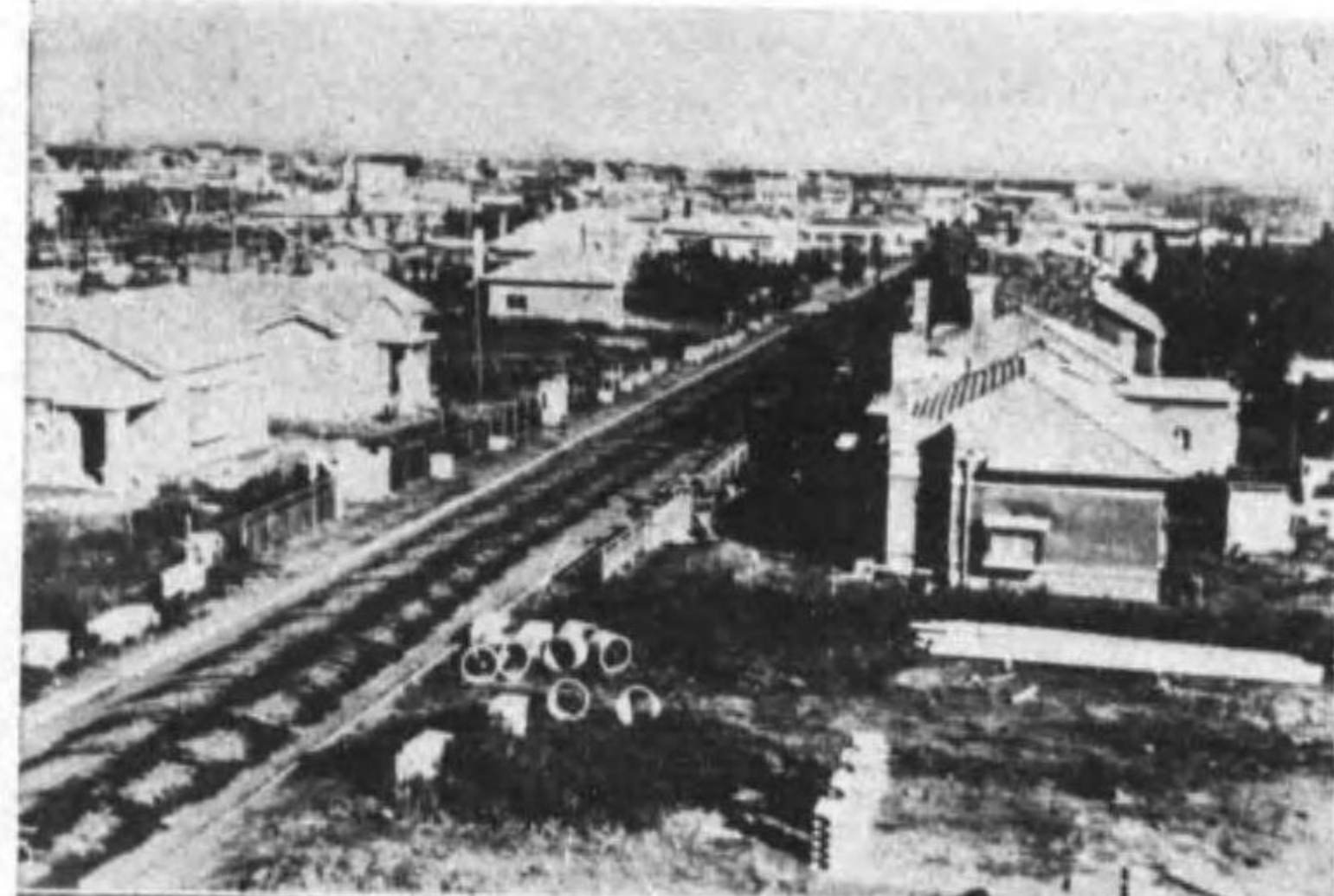


所公鐵滿天奉

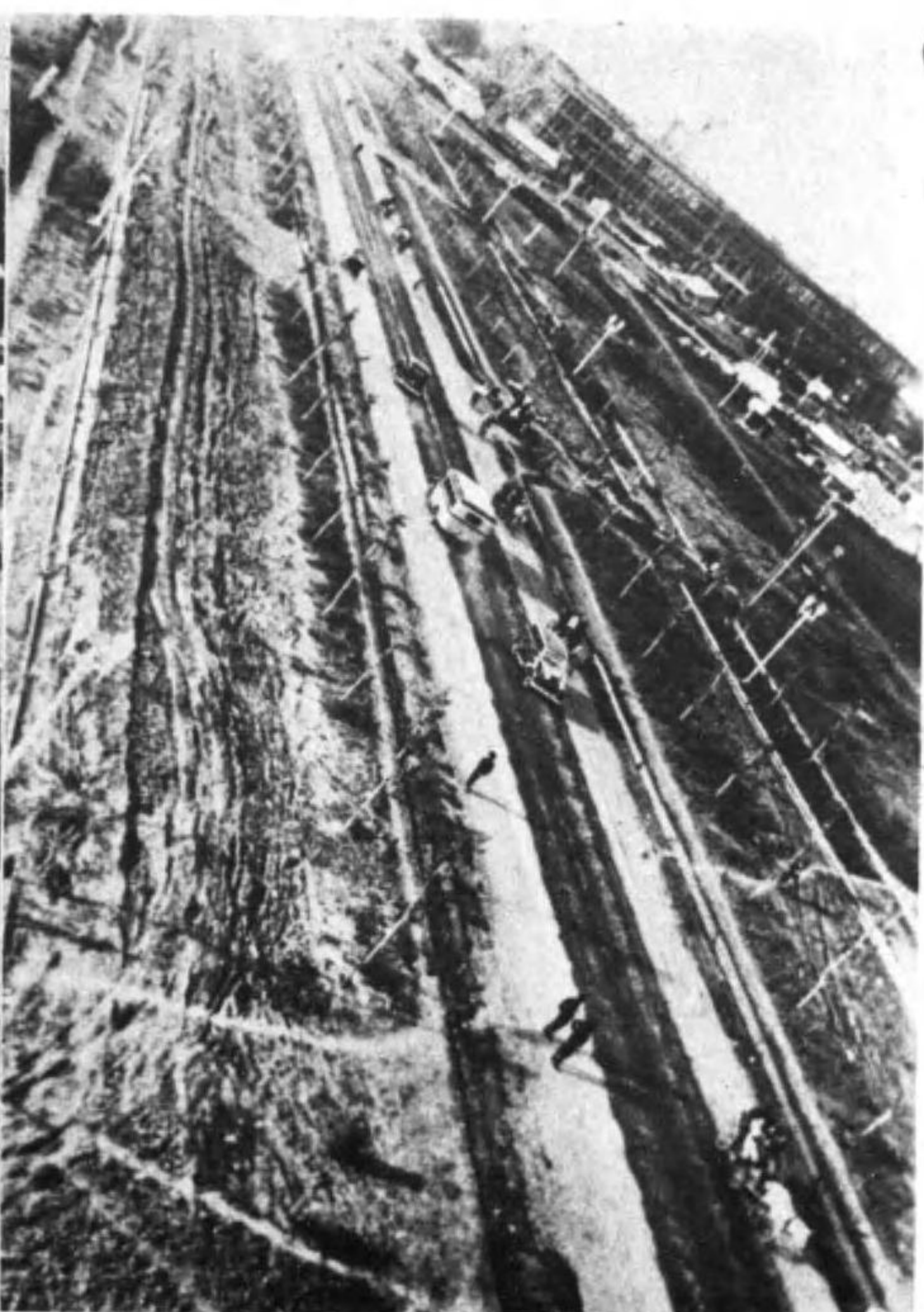


所務事頭埠鐵滿連大

部一の地宅住市京新くづ近に成完



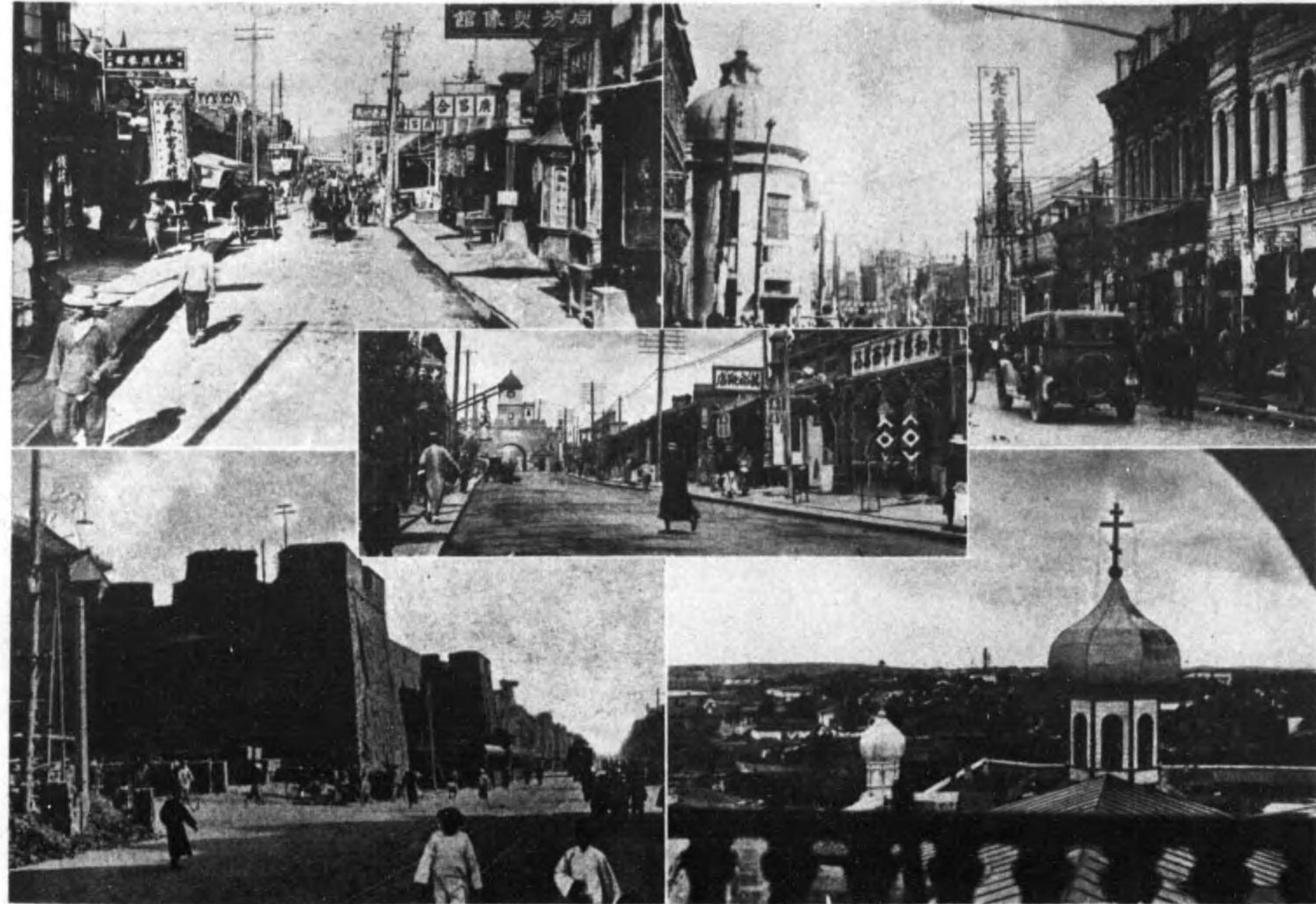
光風の陸大の街大同大京新



路要主の京新都國るあいづれき設建

況繁の街南河林吉

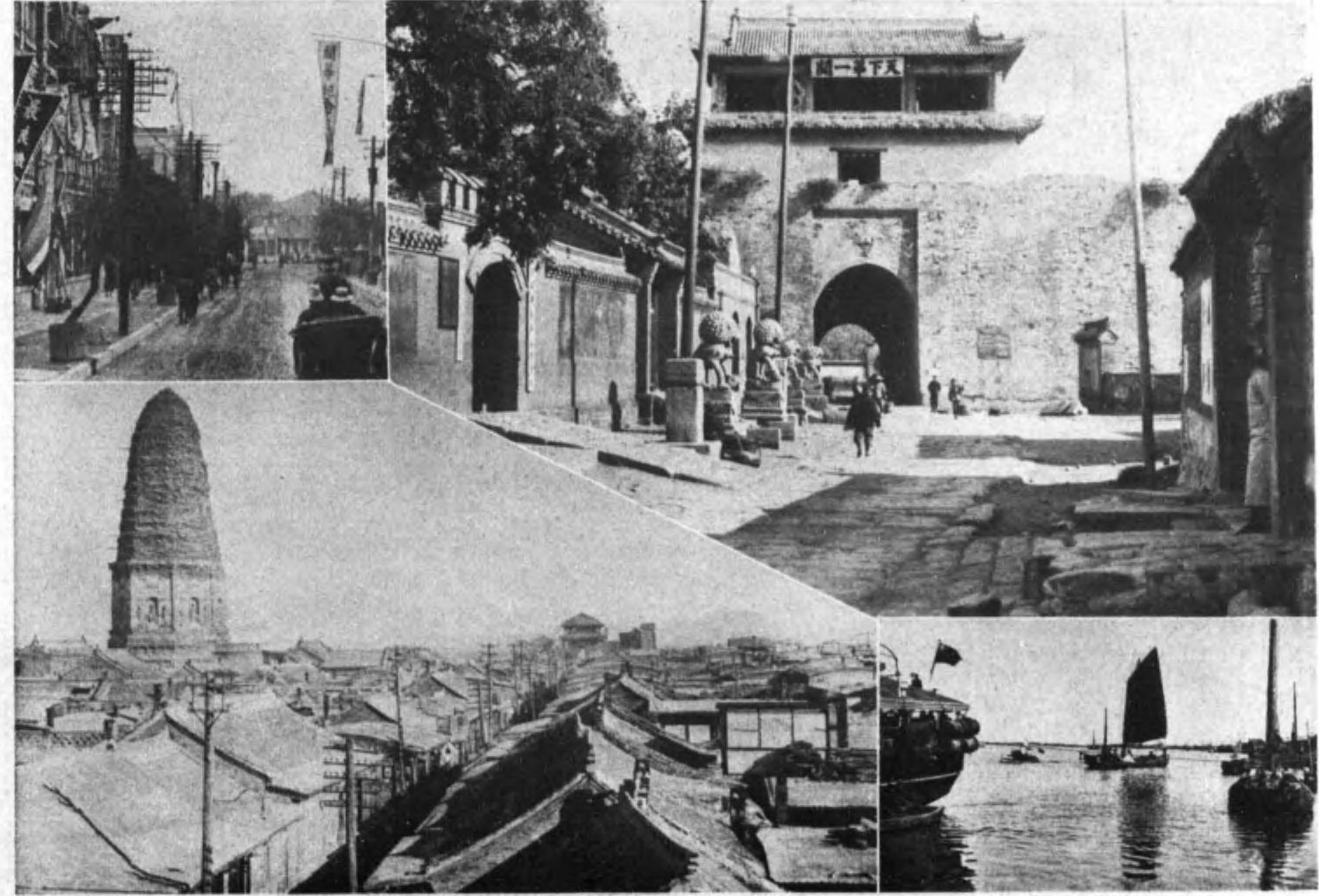
甸家傳街人洲滿濱兩哈



壁城の街人洲滿天奉 街市爾哈々齊(中央) 築建風アソロの里洲滿

街人洲滿縣東安

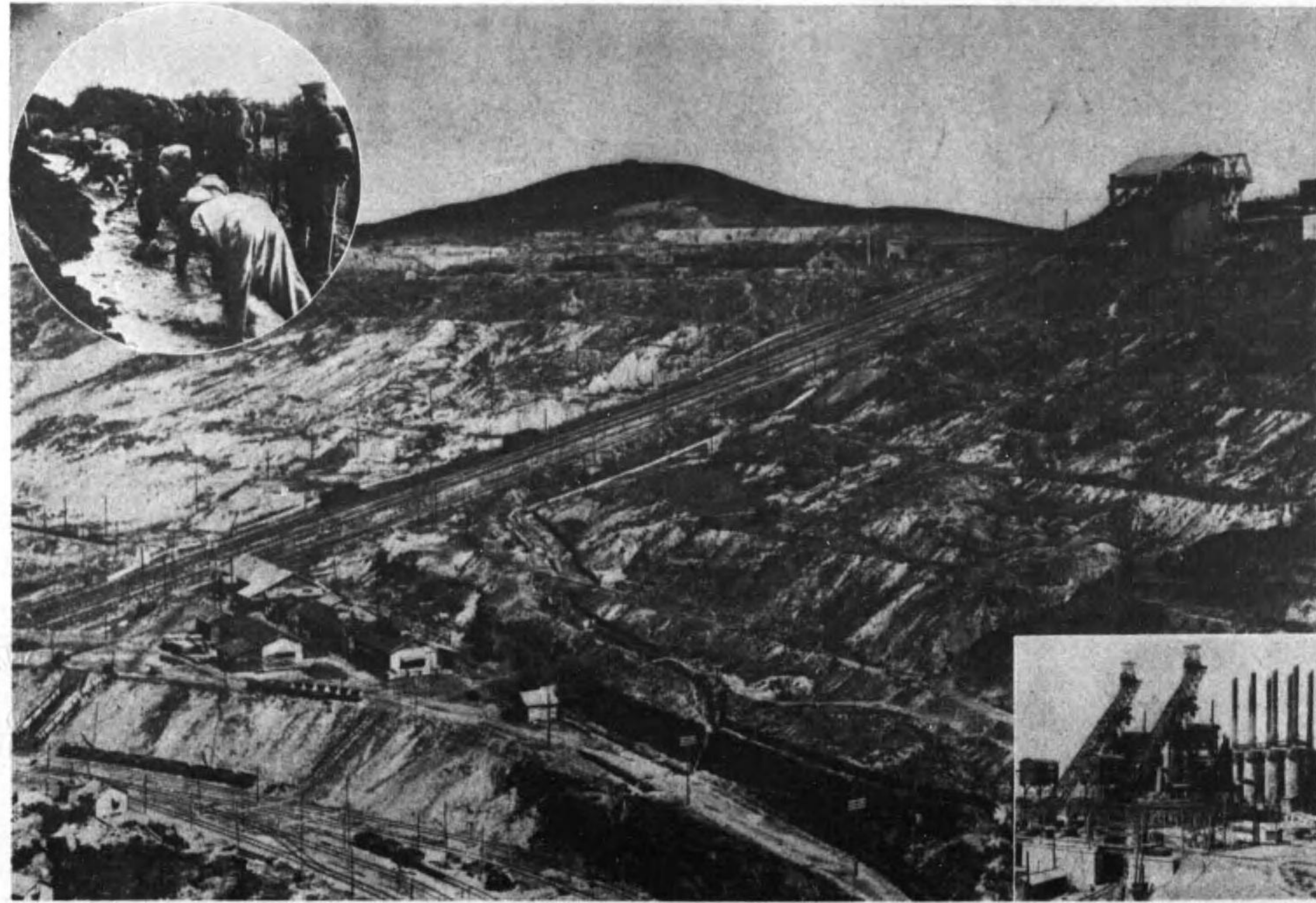
關一第下天の關海山



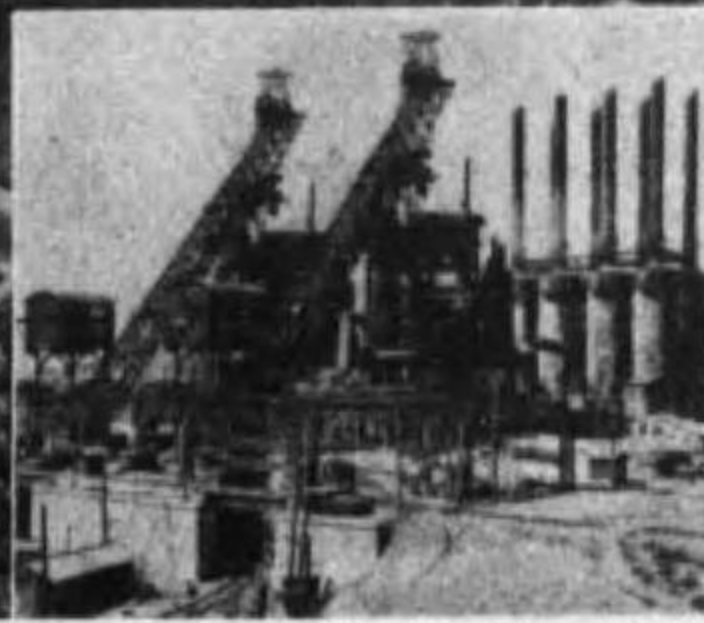
(塔喇喇寺濟廣はるゆ見に方右) 街市州錦地要樞の線沿山奉

埠商口營るす位に口々河運

場現集採金砂春暉の附視望



掘天露の礦炭順撫るな大壯模規



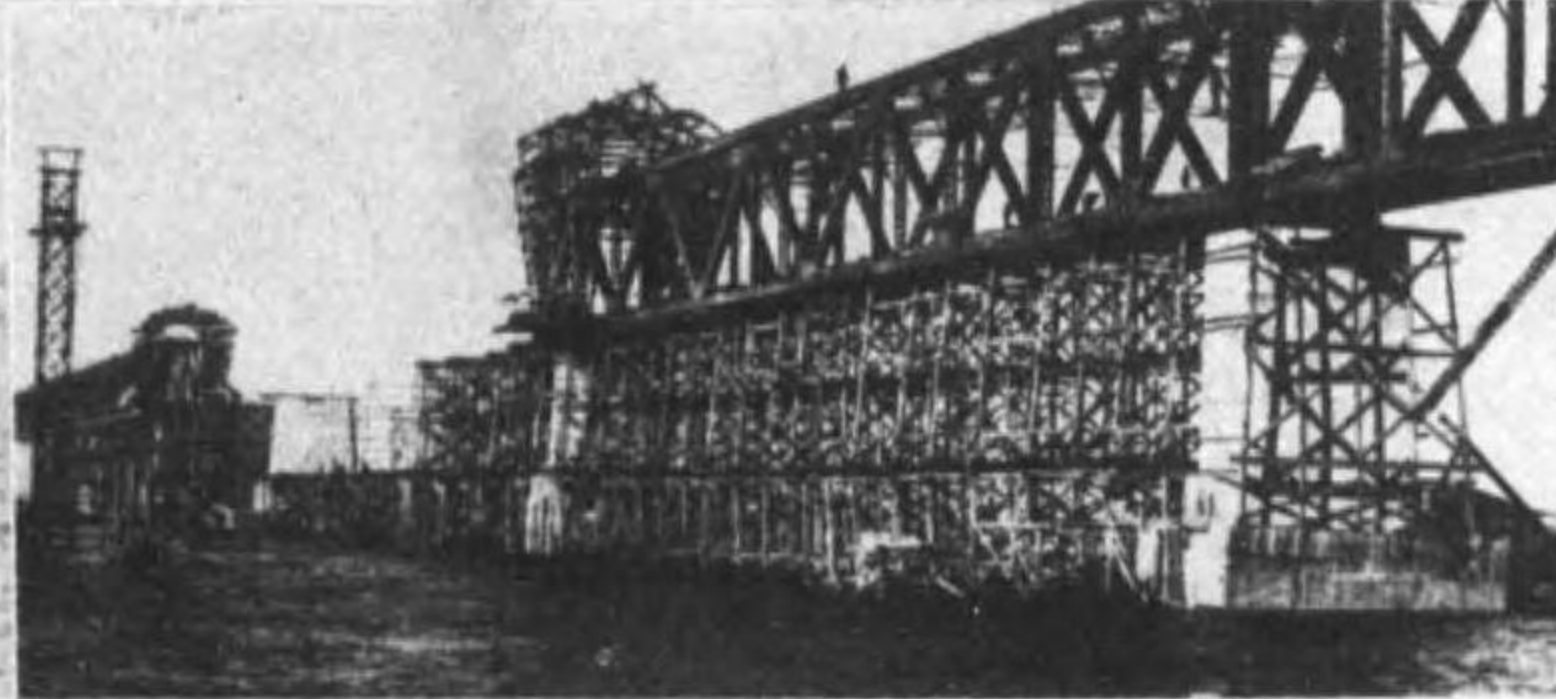
所鐵製山鞍

(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20) (21) (22) (23) (24) (25) (26) (27) (28) (29) (30) (31) (32) (33) (34) (35) (36) (37) (38) (39) (40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49) (50) (51) (52) (53) (54) (55) (56) (57) (58) (59) (60) (61) (62) (63) (64) (65) (66) (67) (68) (69) (70) (71) (72) (73) (74) (75) (76) (77) (78) (79) (80) (81) (82) (83) (84) (85) (86) (87) (88) (89) (90) (91) (92) (93) (94) (95) (96) (97) (98) (99) (100)

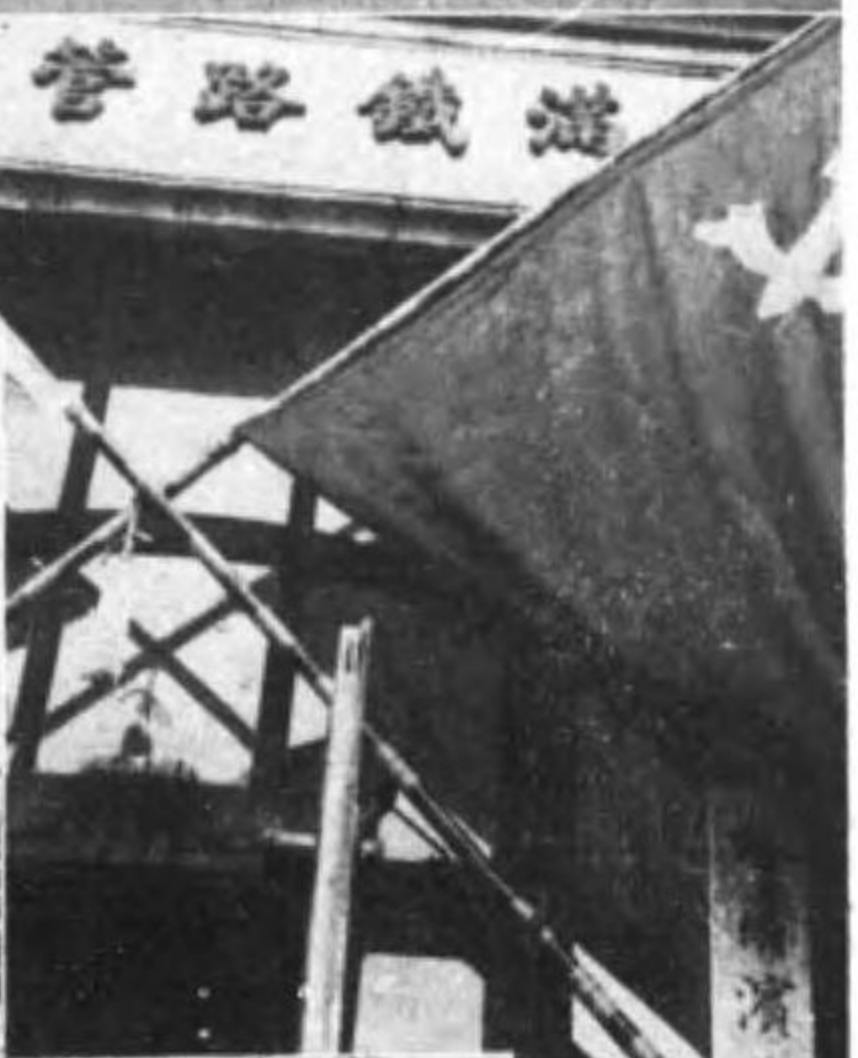
車輪一



橋鐵犬の中設架



隊駝騎く行を漠沙



船輪外の上江花松 (上)
輪 駟 (下)

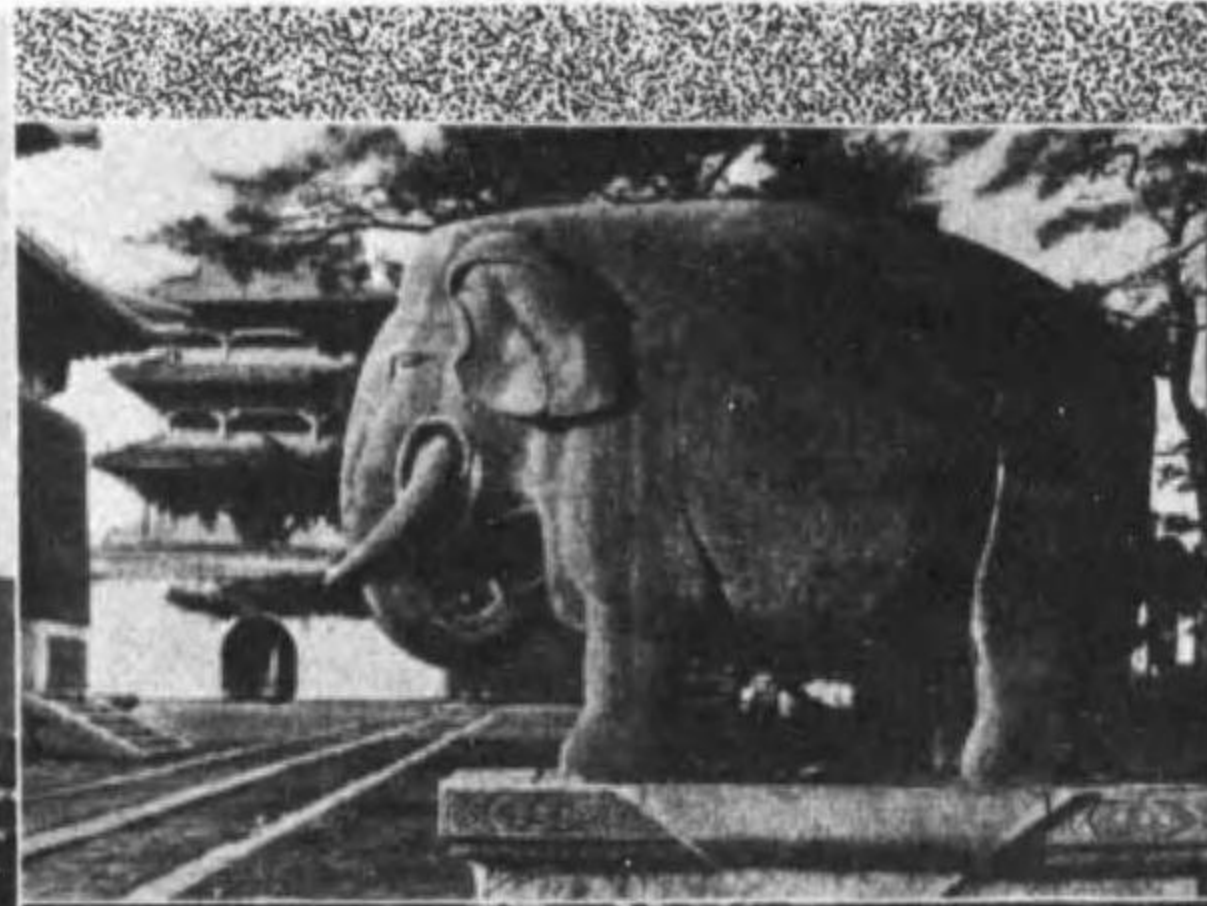
車關幾線地南の突煙太先 (上)
號洲滿機絡連滿日 (下)

局路鐵濱爾哈の日當收接鐵北

物風の陽朝省河熱府古



象石の陵北天奉



宮離の德承都舊



閣寺山千利古の陽遠

し出積豆大の上江花松



餐畫の中昌梁高(上)
搬運の糟豆(下)



牧放の原平古蒙(上)
望眺の田鹽大(下)



筏流の江綠鴨(上)
作耕の民移本日河力虎(下)

祭々娘の橋石大るた綿纏緒情



祭子孔る祀を聖古

行遊燈龍の州錦



典祭の寺嘛喇るな雅典

り蹄足高なか豊色方地

滿洲皇帝陛下御來訪

滿洲の春尚淺くとも、楊柳は既に色をふくみ、ポプラは新芽ふくらみ、すがくしき春のおとづれは隨所に目立つてゐる。康德二年四月二日、滿洲皇帝陛下は、遙に海を越えて、我々天皇陛下御訪問の爲に、國都新京を御出發遊ばされた。之れかや東亞平和の輝りまばゆき、世界歴史上に記録されるべき一大盛事の第一頁である。

新京御出發

その朝、午前五時といふに早くも、皇帝陛下は御起床、御身を潔めさせられて、祖宗の靈前を拜し、御默禱の後、皇后陛下、御令妹たちと御朝餐を召され。しばしの別れを惜ませられて、午前六時三十分、陸軍様式通常禮裝を召されて、侍衛處長、工藤侍衛官長等の御先導で、中和門から迎禮門に歩ませられ、眞紅の御自動車に御乗車あると、蜿蜒數町に亘る崗に肅然として、正門を出で、午前六時三十分、新京停車場へ御進發になつた。崗は前驛のオートバイ走りつゞいて騎兵第一旅、儀仗半個中隊が、鮮かな儀仗旗を朝風に翻へして自動車に分乗、次に侍衛處長の自動車、馬騎兵少尉の擁持する皇帝旗まばゆく、御召自動車には、宮内府侍衛官長、工藤忠、宮内府奏事官、吾元培の兩氏御陪乗申し、御召自動車の兩側には、御警衛用側車カー四臺が附隨し、之れにつゞく十數臺の自動車には、張侍從武官長、袁尙書府大臣、編尙書府秘書官、沈宮内府大臣、謝外交部大臣、遠藤國務院總務廳長以下の、宮中府中の高官が分乗し、最後に騎馬儀仗隊半個中隊が扈衛してゐた。

新京の奉送

これより先に、午前五時半頃には、早くも滿洲國禁衛歩兵混成第十旅、南嶺騎兵第一旅を始め、日滿の各國體は手にく國旗をハタメカシながら、奉送場所に増列した。それは驛前廣場を基點として、

中央通り西側には、滿洲國委任官以上の官吏、滿洲國軍隊、滿洲國各學校、一般團體等、東側には日本側在郷軍人、付屬地中、小、女學校生徒、青洲生、國防婦人會員等で、要所々々には日滿警官及び憲兵が水も洩さぬ警戒を爲してゐた。

新京停車場の構内には、紅と黄色との綵幕を張りめぐらし、玄關から御召列車までの御通路には、玉砂利を敷きつめられ、此處には日滿大官四百名が正装して御待ち申し上げてゐた。

新京驛御發車

尚書が幾多の奉送門を御通過、新京停車場に御着になつたは午前六時四十五分、軍樂隊の國歌吹奏と、皇禮砲の裡に、皇帝陛下には、稻川新京驛長の御先導、白井滿鐵新京鐵道事務所長の御誘導によりて、御歩を進めさせられ、御召列車の最後部なる展覧車に入らせられ、同六時五十五分、御召列車アジア號は驛をすべり出た。

奉天驛御著

斯て御召列車は、午前十一時十八分、奉天驛に御着、同驛構内には、蜂谷總領事、蔡省長、其他日滿各機關の代表、滿洲國軍隊、日滿學生、同各團體等が恭々しく整列して、奉送迎した。御召列車は同十一時二十四分、奉天驛發、一路大連に向けて馳せた。御召列車の新京驛を發するや、前記奉天驛の外、次の九驛に於ては、一分乃至五分間の停車があつた。

公主嶺、四平街、開原、鐵嶺、遼陽、海城、大石橋、瓦房店、金州、

大連御出發

大連市は早朝より全市日滿國旗を以て埋められ、驛構内は閑々までも清掃されて、驛頭には、南關東軍司令官を始め、田中旅順要港司令官、濱田要港部司令官、高橋、山内兩中將、竹下關東州廳長、水谷大連民政署長、八田滿鐵總裁其他の官民多數參列して、御召列車の御著を御待ち申し上げた。御召列車は午後五時二十分、暮色漸く色づく頃に着いた。皇帝陛下には、車中にて御召替へ遊ばされた海軍大元帥の御禮裝で、展覧車より御降車。南軍司令官等の奉迎者に、奉手の禮を賜ひつ

、井上大連驛長の御誘導で、宮内府差廻しの御自動車に御乗車、工藤侍衛官長御陪乗して、午後五時二十二分、驛前に於ける、成富艦長長の指揮する海軍増列兵二百名の掛け銃の裡を、尚書は應として進んだ。大山通大廣場、山縣通と、十五町に餘る御駟路を増列する奉迎者の奉送をうけ給ひつゝ、午後五時三十分、大連埠頭玄關に御着になつた。關根埠頭事務所長の御誘導、竹下關東州廳長官の御先導で、埠頭待合所から渡船所に出でさせられ、井上比叡艦長の御先導で、午後五時三十六分、比叡に御乗艦遊ばされた。滿洲國歌は吹奏され、皇禮砲は轟く、見る／＼比叡のマスクには滿洲國軍艦旗が翻つた。

皇帝陛下には比叡艦長の御誘導によつて、後部甲板ケビンハッチから御居間に宛てさせられた艦長公室に入らせられ、此處に於て、南關東軍司令官以下關東軍首領部、鄭國務總理大臣以下の各部大臣、重臣其他に訓を賜ひ、午後五時五十分、南其他の奉送者が一路御平安を禱りつゝ、御召艦を退くと、陛下は再び艦上に立ち出で給ひ、後部甲板第四砲塔の上に特に設へた御座所に御起立ありて、奉送諸員の最敬禮に對して、御奉手の禮を賜うた。時に午後六時、比叡艦長の出港命令が下され、比叡は徐々岸壁を離れた。この時御召艦の御出發を送る二十一發の皇禮砲が三度轟いた。警衛驅逐艦白雲まづ御先導し、比叡も亦艦首を南東方に向けつゝ波を蹴つて港外に出で、懷德艦球磨、第十二、第十五驅逐隊の奉送する中を、海上鮮やかな白練を残しつゝ、夕陽迫る海上に進み去つた。

【四月二日宮内省發表】滿洲國皇帝陛下、本日午後五時三十六分比叡御乗艦、午後六時大連御出港、海上平穩、御機嫌うるはしくわたらせらる。
【三日午前十一時海軍省發表】二日午後八時三十分比叡艦長發電】滿洲國皇帝陛下には二日午後五時三十六分總員奉迎、皇禮砲裡に御乗艦、大官二十五名扈從す、南大使以下に訓を賜ふ。午後六時解纜、橫濱に向ふ、大連埠頭、日滿要人、小學生等多數奉送し萬歳の聲海を壓す、陛下には御展望臺に上らせ御満足の體に拜し奉る、この日陽光麗らかに晴れて洵に太平謳歌の春なり二十分餘に亘り山縣接待員の御説明を御聽取、黄昏に暮れ行く大陸の山景を御遠望遊ばさる、艦は星光清き黃海を速力十五ノットを以て南下す、海上波靜か

海上の皇帝陛下

【三日午前八時海軍省發電】比叡艦長三日午前七時發電】三日午前六時艦の位置は北緯三十六度四十分、東經百二十三度二十九・五分（山東省の山東高山沖合）にあり、同所において天候測定の結果

果第一案により大隅海峡を通過することに決せり

【三日午後三時海軍省發表】三日午前十一時十分比叡艦長發電「海上の御一夜は明けて海靜かなること湖水に似たり、皇帝陛下には午前六時四十五分御起床、長途の御旅の御疲勞も拜せられず御機嫌御體しく、本日神武天皇祭、比叡、第十二驅逐隊は午前八時四十五分遣拜式を行ふ、このとき皇帝陛下には海軍通常服を召され御展望臺に出でさせられ艦員とともに御遣拜乗員一同感激す、午前九時二十分より艦長御案内申しあげしところ半時間にわたり御興味を以て御熱心に艦内各部を御覽遊ばさる、午前十時本艦の位置小黒山島の三百三十度、百十カイリ針路百五十五度、速力十五ノット、氣温十度、天氣半晴

【三日午後八時三十分海軍省發表】三日午後五時比叡艦長發電「本日(三日)海に明けて海に暮れ午後四時二十分僅に小黒山島の鳥影を認めし外終日水天劈割として陸影をみず、皇帝陛下には午後一時三十分後甲板に御臨場、艦員の角力、銃劍術、劍道、柔道の順に各競技を御覽あらせられ一々競技員に御會釋を賜はり御機嫌御體しく、午後二時三十分艦長以下准士官以上、接伴員及隨員とともに記念撮影を遊ばさる、右終りて明日行はる、聯合艦隊の軍容供覽に關し、高須接伴員の御説明を御聽取、引續き時餘に涉り警衛驅逐艦との陣形運動を御覽あらせらる、海上極めて平穩にて油の如き黃海を南下す

瑞鶴艦上に飛翔

【海軍省著電】比叡艦長三日午後九時二十分發電「午後五時鶴一番南の方より飛來し羽ばたきの音も軽く御召艦上を低く飛翔し東に向つて去る、まことに瑞兆の極みなり、陛下この趣を聞召され禽獸に至る迄日滿親善を欣ぶものにして天地の氣と人と物と自ら相通するものありと仰せらる、御晚餐には特に思召しにより兵食を供し奉りたる所、全く兵食のみにて御濟ませあそばされまことに感激の至りに堪へず、日没後午後七時四十五分警衛驅逐隊との聯合照射教練を御覽あらせられ種々微細にわたる御下問あり、接伴員これに奉答し至極御満足に拜せらる、午後七時艦は濟州島の西五十カイリにありて九州の南端に向ふ、九州西岸における滿洲國皇帝陛下奉迎作業は細雨のため視界狭少にして飛行作業を取止めたる外順當に終了す

【海軍省著電】四日午前九時三十分比叡艦長發電「午前五時四十三分女島燈臺の二百九十三度三七七度豫定の如く聯合艦隊と會合す、六時三十分皇帝陛下には特に海軍通常禮裝を召され御展望臺に出でさせられ一、二艦隊麾下戰隊の敬禮に對し一々御舉手の御答禮あらせらる、軍容正々堂々たる各種軍艦、驅逐艦、潜水艦、飛行機その他に關し接伴員の御説明を御聽取遊ばされ、わが聯合艦隊の威容に御感いと深く拜せられたり、聯合艦隊長官よりの御歡迎の電報に對し御鄭重なる御答電ありたり、本日風向、北東、風力十三メートル、視界五カイリ、海上波浪あり乗員一同士氣旺

盛にして衛生狀況極めて良好なり

聯合艦隊の偉容

これより先き、高橋三言中將の率ゐる聯合艦隊七十餘隻の艦隊は、日本海々戰の古戰場たる五島の南、男女群島を中心、三日午後五時迄、猛烈な訓練を行つてゐたが、同日夕刻迄に順次男女群島附近に集結を終つて、奉迎隊形を整へてゐた。翌くる四日午前六時頃、御召艦比叡は御警衛艦白雲を先頭に、霧雲、薄雲に護られて、雨にあげた洋上に雄姿を現はし來つた。聯合艦隊の旗艦山城の橋頭高く信號旗が翻ると共に、山城についで、第一艦隊第一戰隊榛名、扶桑、伊勢、第八戰隊、第一水雷戰隊、第一潜水戰隊、第一航空戰隊、ついで米山中將の率ゐる第二艦隊の旗艦鳥海を始め、第四戰隊高雄、摩耶、愛宕、第六戰隊、第二水雷戰隊、第二潜水戰隊、第二航空戰隊等、七十隻の艦隊が單縱陣を以て、御召艦と約二キロメートルを距て、逆に北上して、忽ちにして全艦隊の皇體砲轟き、滿洲國歌奏せられ、更に各艦は皆一齊に登艦禮式を行つて、艦員は萬歳を高唱した。かくて全艦隊は儀禮を了つて、雨の中を南へ向ふ御召艦を見送り申したが、海國日本の偉容を御覽あつて、皇帝陛下は接伴員の御説明を御體察あらせられ、御感いと深げにおはした。

鹿兒島沖御通過

【四日正午長崎無線電信局發表】四日午前十一時四十五分頃、御召艦比叡は鹿兒島縣沖合を御通過【四日午後十時宮内省發表】朝來降雨、波や高く、午後は艦橋に準備せし假室にて御休憩あらせらる、天候幾分回復の様

海上風波強し

【五日佐世保鎮守府發表】五日午前十時比叡艦長發電「四日夜來の低氣壓は、午前六時本艦の右三十海里を通過し、強風雨未だおさまらず、風速二十メートル、時々小雨あり、視界狭きも、天氣急速に恢復しつゝあり、本艦の動搖五度なるも、警衛驅逐艦は動搖大にして、波浪艦を洗ふを見る、艦は黒潮に乗りて、海上風暖く、流石に南海にあるを覺ゆ、皇帝陛下には前部御休息室にあらせられ、御機嫌體はしく、午前九時半、艦は土佐沖の真中に在り、午後一時二十分、潮岬を通過の豫定【五日午前十一時海軍省發表】四日午後九時二十分比叡艦長發電「四日朝來降雨、低氣壓は沖繩島西方より北東に進みつゝあり、之が影響を受けて波浪次第に加はる、皇帝陛下には前艦橋に特に設け

られたる御休憩所に移らせ給ふ、雨は沛然として至り、視界甚だ狭く、時に止みて、開閉鐵は僅に右の旗のみを現はし、艦は大瀨海峽に入る、動搖益々加はる、午後トキキ日像月像、太平洋の晴、夕暮の大鐘を鳴らし、隨日の無聊を感む、午後九時、本艦の位置、佐多岬七十度四十七海里、針路六十度、速力十五ノット、紀州南端に向ひつゝあり、風向南々東、風力十八メートル、氣温十七度

【五日午後三時半海軍省發表】午後一時半比叻艦長發【午後一時潮岬南方十カイリを通過す、本日午後に至り雲は時れ陽光照りはじめ天氣次第に回復しつゝあり、しかれども北西の烈風強吹して波浪艦首に擊し浪沫滔々を洗ひて海上一面白波あり、橋頭高く滿洲國軍艦旗は翻る、皇帝陛下には御機嫌御覽にしく御書見と御書道とに過ごさせ給ふ

遼州灣御通過

【六日午前一時十分海軍省發表】五日午後九時比叻艦長發電【太平洋上長浪大なるを慮り、豫定航路を變更して針路を陸岸近く執る、艦は遼州灣に入りて動搖次第に靜まり、鼓月録の如く近畿の山にかゝりて星光極めて消らかなり、皇帝陛下御機嫌ますます御覽はしく、御晚餐には滿洲料理を供進す、本夜北西の風十二メートル、本艦速力十五ノットにて東航中なり、豫定通り六日午前九時横濱に入港の豫定

横濱港の警備

昭和十年四月六日、滿洲國皇帝陛下の日本御來訪の御一步が横濱埠頭に印せらるべき記念の日である。其前日の横濱港は、朝來の曇雨であつたが、あすの歡びを持つ氣合が沈黙の裡にたゞようてゐた。五日午前十一時に、儀禮艦那珂は、艦長大佐小松輝久侯の指揮で、雨を肩して横須賀から廻航して、二十五番ブイに繫留し、横須賀防備隊旗艦嚴島は、司令官粕谷宗一少將が搭乘して、七番ブイに、横須賀警備隊旗艦那珂は二十四番ブイに繫留した。那珂には副長として伏見宮博義王殿下がおはす。而して四號岸燈を中心にして、海上には五十五隻の警備船を配置する外、港内の用意はおまゝに意になかつた。

御召艦横濱港御著

前日の雨は名残なく晴れて、四月六日の横濱は空海一碧の春光さやかな景色であつた。横濱の海陸は奉迎の歡喜に滿され、儀禮艦那珂、嚴島、那珂の滿艦飾は繪の如く美しい、港内に在る内外の汽船は皆々萬國旗を以て飾つてゐた。この日御沙汰による奉迎者、有資格者、海軍儀仗兵一個大隊、陸軍儀仗兵一個中隊、赤十字社、専門、中、小、女學校生徒、在郷軍人、青年團等約一萬人は、四號岸燈上屋前に増列して、御著を導くとぞ待ち構へてゐた。午前八時五十分、御召艦比叻は、霧雲、薄雲、白雲に護られながら、其雄姿を港外に現はすや、外港に碇泊の那珂、那珂、及び港内七番ブイの嚴島は、諸員登艦禮、一齊に皇禮砲をうち出した。内外大小の船舶は等しくサイレンを高らかに鳴らす、折しも銀翼をつらねて海軍機百餘機は、空中からの奉迎の爆音を轟かす、御召艦は悠々第十番ブイに繫留し、九時三十分繫留作業を完了した。

最初のメッセーヂ

之れより先き、入江滿洲國宮内府次長は、午前九時十五分、御召艦から海軍汽艇にて上陸し、四號岸燈上屋内で、沈宮内府大臣講話の形式で、日本國民に對する最初のメッセーヂを發表した。此ノ次我カ 皇帝陛下ノ日本國 皇室ヲ訪問セラルルハ空前未曾有ノ盛舉ニシテ東洋歴史上ニ一新紀元ヲ開カルモノニシテ洵ニ日滿兩國民ノ欣慶ニ勝ヘサル所ナリ我カ滿洲建國ノ始ニ方リ日本國ハ大義ニ仗ツテ之ヲ扶持シ力ヲ盡シテ援助シ軍事上ニハ無數健兒ノ生命ヲ犠牲トシ外交上ニハ儼乎トシテ國際聯盟ノ脫退ヲ惜マズ以テ我カ爲ニ立國ノ眞意義ヲ表明セラレタリ 我カ

皇帝陛下ハ曩ニ誠意民ノ爲ニ執政ノ任ニ就キテヨリ二年ノ間政協ヒ人和キ復ヒ天意ニ順ヒ多方ノ贊助ニ依リ帝政ヲ實施セシメ三千萬ノ民衆遂ニ歸依スル所アリ共ニ王道政治ノ樂ミヲ享ケタリ 登極大典ノ禮既ニ成ルヤ日本 天皇陛下特ニ

皇弟秩父宮殿下ヲ差遣シ給ヒ厚ク賀ヲ致シ誠意周旋訴合開ルナン既往ノ事實既ニ然リ此ノ誠懇ノ酬答無キ能ハサル所以ナリ

兩國ノ特殊緊密ノ關係ハ分難ス可カス蓋シ天然ノ形勢ト我カ東方固有ノ道德ニ本ツキ相結合セルニ外ナラス

此ノ次

皇帝陛下ト日本

天皇陛下ト親シク相睦ミ給ハハ兩國國交ノ親善當サニ日ニ益々濃厚ヲ加ヘテ鞏固トナリ必ラス東洋平和ノ上ニ莫大ノ效益アラム是レ將來ニ企圖スル所ニシテ此ノ盛大ナル舉無キ能ハサル所以ナリ

容讓深遠ニシテ誠ヲ積ムコト既ニ久シク今ヤ春景和明ノ候ニ値ヒ乃チ毅然トシテ

駕ヲ命シ期ヲ定メテ東行セラル海陸萬里毫モ跋渉ノ艱勞ヲ憚ラス爰ニ四月二日ノ朝六時五十分新京發轅トナリ午後五時二十分大連驛ニ臨マル各團體及ヒ民衆ノ歡呼シテ奉送スル者甚々多シ是ヨリ先

キ日本

天皇陛下ノ特派シ給ヘル御召艦比叡既ニ火ヲ升ケテ發航ヲ待ツアリ同三十分艦ニ登レハ禮砲隆隆トシテ春雷ノ震フカ如ク同六時ニ出港艦中一切ノ設置招待ハ備サニ隆盛ヲ極ム航海ノ間

皇情豫悅異常ニシテ

起居モ亦康適ヲ極メタリ四日行キテ九州ノ西南海ヲ過クルニ高橋海軍中將ノ統率スル聯合艦隊七十餘隻ト遇ヒ各戰隊毎ニ皇體ヲ放ツテ奉迎セリ六日東京灣ニ至レハ横須賀鎮守府管下ノ各航空隊アリ歡迎分列式ヲ行フ壯觀極リナシ

今日朝九時

御艦横濱ニ安着官紳民衆ノ熱誠ナル歡迎ニ深ク感動スル所アリ

秩父宮殿下旋アリテ

天皇陛下ノ命ヲ銜ミ港ニ來リ迎冠セラル尤モ瑞麟等ノ感激光榮ニ勝ヘサル所ナリ

聖駕發御ノ前ニ當リ新聞紙上報スル所ニ據リ貴國ノ種々鄭重ナル歡迎ノ準備ヲ知り我カ國朝野上下既ニ萬分ニ感激セサル者ナカリシカ今ヤ航海ノ中ト入境ノ際既ニ備サニ盛況ヲ瞻未嘗有ノ盛事タルヲ信セリ

皇帝陛下ノ此ノ行ハ貴國

皇室ニ對シ親シク忱懼ヲ致シ平素ノ積憤ヲ擲ヘラレトス既往ノ酬答ハ之ニ依ツテ稍々感謝ノ意ヲ申フヘシ而シテ將來ノ企圖亦必ラス無限ニシテ圓滿ノ希望アラム兩國ノ交情ハ殆ント上天ノ作合シテ之ヲ玉成スル所ナリ瑞麟ハ赤クモ恩從ヲ領シ斯ノ盛典ヲ羨ク感幸ノ極言ハント欲スル所ヲ盡サス

横濱御上陸

長き邊りの御沙汰によりて、御出迎の秩父宮殿下には、陸軍大尉の御正装にて、林權助男以下の接伴員を従へさせられて、横濱税關に成らせられ、午前九時四十五分、海軍々樂隊の奏する君が代と、再度轟く皇禮砲の砲聲裡に御召艦に召され、棧橋御出發、明石税關港務部長の嚮導艦を先頭に警衛艦を従へさせられて、比叡に成らせられた。皇帝陛下とは約一年ぶりの御再會で、比叡艦上に駐い御握手を御交はしになり、天皇陛下の御沙汰によりて御出迎へ遊ばされた旨を御述べになつた。皇帝陛下は、林出通譯の御通譯で、我皇室の御歡待を謝せられた。

殿下は、林接伴員以下の各接伴員を御披露あり、陛下は、沈宮内府大臣、謝外交部大臣以下特任官以上の隨員を、殿下に御披露あり、次で皇帝陛下には、特に末次横須賀鎮守府司令長官に謁を賜うた。

午前十時三十分、皇禮砲の齊射、諸員奉送の裡に、皇帝陛下、秩父宮殿下は御揃ひで、比叡を御退艦、御召艦に御移乗遊ばされ、第一、第二の扈從艇を従へさせられて、海陸に湧き起る萬歲聲裡に同三十八分、第四號岸壁の浮棧橋へ御着になつた。

陛下は陸軍様式大元帥の御正装で、我皇室より贈進遊ばされた大勳位菊花大綬章をおびさせられ、雄々しくも御上陸の第一歩を印させ給うたのであつた。

この時、秩父宮殿下には、御沙汰によつて御出迎へ申し上げた次記の諸員

末次横須賀鎮守府司令長官、柳川第一師團長、谷東京灣要塞司令官、眞崎横須賀港警備隊司令官、粕谷同防備隊司令官、飯田横濱税關長、石田神奈川縣知事、大西横濱市長等

を御披露遊ばされ、皇帝陛下は一々是等の人士に對して御會釋を賜うた。

次に、肅然として兩側に堵列奉迎せる陸海軍儀仗兵を、宮田海軍大佐、伊集院陸軍少佐の御先導で、親しく御視閲ありて後、飯田税關長の御先導で、プラツトホームに御足を運ばせ給うた。臨港驛ホーム下に於て御待ち申し上げた神奈川縣知事、横濱市長は、沈宮内府大臣を通じて、夫々奉迎文を捧呈すると、御満足の御様子に御嘉納なり。秩父宮殿下と御揃ひで、十時四十五分、金色御紋章標たる御召列車に御乗車になり、四たび轟く皇禮砲や、飛行機の揚音や、奉迎者萬歲聲裡に、日滿小國旗の浪を翻うて、午前十時四十七分、御召列車はホームを離れて東京に向つた。

奉迎の準備整ふ

晴れの御入京を待ち奉る東京驛は、前日來清掃につとめた。殊に第三ホームは、天皇陛下と初の

御會見あるべき光榮の場として、殊更に入念して、六日午前十時交通遮断後、ホーム床を油で磨きあげ、真紅の絨毯を敷き、天皇陛下の御便殿である松の間、皇族方の御休憩室である梅の間、奉迎委員室に充てらるゝ竹の間、供奉員室等、其設備をととのへ、松竹梅の三十餘の鉢植も飾つて夫々の準備に怠らなかつた。

驛前の奉迎者は、午前七時頃には既に集合し來り、時刻の移るにつれて、軍隊、各團體等其指定の位置につめかけて、春光を満面にうけた沿道一帯は、早くも奉迎の準備が全くとのつてゐた。

御旅館と定められた赤坂離宮も、東南隅一階の皇帝御座所には、大理石の圓卓を中央にして、數脚の椅子、長椅子は配置せられ、ラヂオの特設、壁畫、天井繪、老松に富士櫻や深山椿を配した生花等の飾り付けから、御書見室、賜謁室、大食堂其外の各室の裝飾もとのひ、御内苑の櫻も此春を嘉き氣に咲きみだれてゐた。

東京驛御著

天皇陛下には、午前十一時十分、宮城御出門、東京驛正面の御車寄に着御、陸軍様式御正装にて龍御殊の外御麗はしく、御便殿松の間に入御。十一時二十二分、御便殿を出御、堀尾東京驛長、池田東京鐵道局長、松平式部長官の御先導で、第三プラットホームへ玉歩を運ばせ給うた。此所には、高松宮殿下、閑院宮殿下、伏見宮殿下、賀陽宮殿下、梨本宮殿下、朝香宮殿下、東久邇宮殿下、北白川宮殿下、竹田宮殿下、李王垣殿下、李鐵公殿下、李鶴公殿下の各皇、王公族方が御並列遊ばされ、少し下つて岡田總理大臣以下の國務大臣、牧野内大臣、湯淺宮内大臣、西東京警備司令官、田代憲兵司令官、小栗警視總監、横山東京府知事、牛塚東京市長等及び丁滿洲國公使並に公使館員、ついで親任官待遇以上の文武官、特に許されたる元駐支公使芳澤謙吉氏、前滿洲國顧問宇佐美勝夫等が、大禮服正装に威儀を正してゐる。天皇陛下には是等諸員に對して、御會釋を賜はりつゝ、御定めめの御位置に就かせ給ふと。間もなく日滿兩國々旗を交叉した御召列車は、午前十一時三十分、驛内に着した。皇禮砲は轟き、滿洲國歌は吹奏せらる。

尊き御握手

六輛編成の御召列車の最後部の展望車が、天皇陛下の御正面に正止すると、東京鐵道局堀井技工長が鞠躬如として、其扉を開きまゐらせ、秩父宮殿下についで、皇帝陛下は、歩、廊に御足をおろさせられた。皇帝陛下の濃藍色に金色燦たる御帽には、黄色な鹿鳥の羽が春風にそよぐ、御一歩御一歩、天皇陛下の御前に進ませられ、秩父宮殿下の御紹介により、天皇陛下と皇帝陛下との玉手が、堅き御握手を御交はしになつた。正に日滿交驛の最高潮の尊き御場面であつた。滿洲國歌は天華の降るが如くに吹奏された。

天皇陛下は、原田式部職御用掛の御通譯で、皇帝陛下御遠來をねぎらはせられ、皇帝陛下は、天皇陛下御親らの御出迎、併せて皇室の御歡待を深謝せられた、嚴肅と莊嚴と響へ響き和氣とが満ち／＼で、眞に瑞光かゞやくが如き崇嚴な盛觀であつた。ついで、天皇陛下には、各皇族殿下を、順次御紹介遊ばされ、皇帝陛下は御一方づつと御握手を御交はしになつた。再び滿洲國歌は奏され、天皇陛下には、御左手に皇帝陛下を御誘ひになつて、眞紅の絨毯の上を御併進遊ばされて、其御後には原田御用掛が扈從し、續いて秩父宮殿下以下、鈴木侍從長、本庄侍從武官長等其御後に、ホームに増列の近衛儀仗隊は最敬禮を行つた。

午前十一時三十六分、皇帝陛下は、同驛正面御車寄にて、天皇陛下の御見送りのうちに、秩父宮殿下と、四頭立の美しい儀裝馬車に御同乗。林接伴員御陪乘、沈宮内府大臣其他の扈從員は六臺の馬車に分乘、警衛處長以下は十三臺の自動車に分乘、十一時四十分、東京驛御出発、赤坂離宮へ向はせられた。

天皇陛下は御見送り遊ばされて、便殿に入御、十一時四十五分、便殿出御、自動車直薄で、宮城へ還幸遊ばされた。

赤坂離宮に向はせらる

東京驛から宮城前を経て、虎の門、溜池、赤坂見附から赤坂離宮に至る沿道は、近衛第一師團の増列兵、文部省直轄學校生徒、國防婦人會、赤十字社、愛國婦人會其他の諸團體の約十萬の奉迎者に加ふるに、黒山の如き一帯奉迎者も埋められて、沿道至る處に大歡呼が起つた。當日の奉迎者数は二十餘萬人に上つたといふ、皇帝陛下の直薄は、次に記すが如きものであつた。

- | | | | |
|---------|--------|----------|--------|
| 警部(騎馬) | 近衛將校 | 近衛將校 | 張侍從武官長 |
| 警視(騎馬) | 四頭立 | 皇陛下 | 工藤侍衛官長 |
| 近衛騎兵 | 御馬車 | 秩父宮殿下 | 大谷接伴員 |
| 近衛騎兵 | 近衛將校 | 林接伴員御陪乘 | |
| 近衛騎兵 | 近衛將校 | 近衛將校 | |
| 沈宮内府大臣 | 第三 | 森向書府大臣 | 第四 |
| 入江宮内府次長 | 馬車 | 皇尚書府秘書官 | 馬車 |
| 白根接伴員 | 橋本接伴員 | 馬車 | 遠藤總務局長 |
| | | | 馬車 |
| | | | 桑島接伴員 |
| | | | 山縣接伴員 |
| | | | 馬車 |
| 許總務局長 | 警部(騎馬) | 列外自動車十三臺 | |
| 張掌櫃長 | 近衛騎兵 | | |
| 徐掌櫃長 | 警部(騎馬) | | |
| 高須接伴員 | | | |

宮城御参入

赤坂離宮に御着き遊ばされた皇陛下は、二階の御食堂にて午餐を召させ給ひ、裏庭に降り立たせられて、秩父宮殿下を始め奉り、扈從員、接伴員等と記念御撮影の後、午後一時四十四分、御入京の際と御同様の菊花御紋章ある、無蓋の四頭立儀裝御馬車に、秩父宮殿下と御同乗、林接伴員御陪乘、沈宮内府大臣以下六輛の馬車に分乗、赤坂離宮を御出門、宮城二重橋正門から御参入遊ばされた。長くも、天皇陛下には陸軍様式御正装で、御車寄階上に出御、御待受け遊ばされ、松平式部長官は、御車寄階段下に於て迎へ奉つた。兩陛下には再度の御會見に、御親しき御握手を交はし給ひて、天皇陛下には、式部長官の御先導で、皇陛下を鳳凰間に御誘引。こゝに、皇后陛下にはロブ・モントの御装ひで、竹屋女官長等を隨へさせられて御出迎ひ遊ばされ、天皇陛下の御紹介にて、皇陛下と初の御對面あり、御握手を御交はしになつた。祝晴れの御交禮の行はさせられる鳳凰の間に、天皇、皇后兩陛下、皇陛下、秩父宮殿下の外には、式部長官と、御通譯の原田、岩村兩御用掛が侍立するのみで、湯淺宮相、廣幡皇后宮大夫、竹屋女官長其他側近の者は、次の御間に、皇陛下の扈從員は控間に、夫々控へていたのであつた。

皇陛下には、滿洲語で、滿洲國建國以來の我皇室の厚き御援助、昨夏、御名代秩父宮殿下の御渡滿に對する御厚誼を深く謝せられ、天皇陛下には御懇篤な御歡迎の御言葉を送り給うた。更に、皇陛下には、天皇陛下に滿洲國最高勳章大勳位蘭花章頸飾を、皇后陛下に大勳位蘭花大綬章を、夫々御宮に納めた儀御贈進遊ばされた。ついで皇陛下は、隨員御披露遊ばされ、右終つて、皇陛下は

御眼を告げさせられ、皇后陛下には鳳凰間入側迄、天皇陛下には御車寄迄、御見送り遊ばされて、皇陛下は、秩父宮殿下御同乗で、午後二時三十五分宮城御出門、同二時五十八分赤坂離宮へ御歸還遊ばされた。

天皇陛下御答訪

鳳凰間御會見の後、天皇陛下は御答訪の爲、御通常禮裝に、大勳位蘭花大綬章、副章並に大勳位菊花大綬章、副章を御佩用、午後三時三十分、宮城御出門、略式自動車直簿で、侍從長、宮相、侍從武官長等を從へ給うて、赤坂離宮へ行幸遊ばされた。離宮の御車寄に、皇陛下は御出迎へになり、控間に於て御對顔。天皇陛下より御答訪の御挨拶を送らせ給ひ、鈴木侍從長の捧持した大勳位菊花章頸飾を御贈進遊ばされ、午後三時五十分、赤坂離宮御出門、同五十八分宮城に還御遊ばされた。

豊明殿の御宴

春雨けむる四月六日の夜、宮中豊明殿に於て、御歡迎の大盛宴が催された。其夕べ、滿洲國皇陛下には、林接伴員御陪乘の御自動車で、宮内府、尚書府、外交部の三大臣其他の扈從員を從へさせられて、午後六時十分、赤坂離宮御出門、同二十分宮城へ御参入あらせられた。天皇陛下には御車寄階上まで御出迎へ遊ばされ、牡丹間に御誘引。皇后陛下の御紹介で、皇陛下は、御先者の各宮妃殿下と御對面、御挨拶を交はされた。松平式部長官の御先導で、天皇、皇后兩陛下と御揃ひで、皇陛下は千種間に威儀を正した岡田首相以下の日本重臣に御會禮を賜ひつゝ、豊明殿に成らせられた。かうくしきシャンデリアの光りは、御食卓に飾られた和洋の名花の香りと共に、一入の美しさを添へ、取りわけ滿洲國花なる蘭花の蔭立つて氣品高きが自立つた。

天皇陛下には正面玉座に、御左右に秩父宮妃、高松宮妃兩殿下、御向ひ側には、皇后陛下、其御右側は皇陛下、御左側に秩父宮殿下が御著席遊ばされ、各宮、同妃殿下を始め奉り、岡田首相以下御召の榮に浴した顯官重臣百六十名は、順次威儀を正して御陪席の御席に列つた。宮内省音楽部の洋樂はしづかに流れ、御洋式の御盛宴は開かれた。御宴半にして、天皇陛下は御起

立遣はされて、滿洲國皇帝陛下の御來訪に對して深く歡迎の意を表し給ひ、日滿兩國の離るべからざる關係にあるを述べさせ給ひ、滿洲國の國威愈々固く、王業益々昌なるを慶賀し給うて、今次の御來訪は時日短きも、我國情及び風土を及前御親臨御觀賞あらん事を望ませられ。又、皇帝陛下に對する、我皇室及び官民の款待の誠意が、御歸國の御思出の一端ともならば幸ひなりと述べさせ給うて、最後に、皇帝陛下の御健康を祝し、併せて滿洲國の國運益々隆昌悠久ならん事を囑らせられて、御杯を舉げさせ給うた。

ついで皇帝陛下には御起立、先づ本日の盛衰を深謝せられたる後、今般自ら來訪し、親しく赤誠を陛下に披すを得るは、非常なる愉快なりと述べさせられ、即位以來國基略定まれるは、一に貴國の總始一貫せる援助によるものにして、兩國は更に同心協力して、東亞永久の平和を保ち、世界人類の幸福を謀るべしと説かせられ。今回親しく貴國を訪問して受けたる、陛下の御款待と、貴國々民の歡迎の誠意は、永久に忘るゝ能はざる所なりと述べさせられ。終りに兩陛下の御健康と、日本帝國々運の隆昌とを祈らせられて、御杯を舉げさせられた。

嘯唳たる奏樂裡に、御乾杯ありて、莊重な光景の裡に御盛宴は閉ぢられ、御召の諸員には、寶船の銀製ボンボニールを下賜され。天皇、皇后兩陛下、並に皇帝陛下は、再び千種間に入らせられた。斯て皇帝陛下は、天皇陛下の御披露によつて、岡田首相以下の各國勅大臣、湯淺首相、鈴木侍從長、本庄武官長、廣幡皇后宮大夫、並に前官勳進以上の重臣親官に對して、順次勲を賜つた。次に牡丹の間にて、天皇、皇后兩陛下を始め奉り、各皇族殿下としばし御歡談の後、正殿に於て、此夜特に皇帝陛下の御旅情を御慰め遊ばす爲に、御催しになる舞樂をば御覽遊ばされた。

春宵の舞樂

春宵既に闌なる午後八時三十分、宮中正殿に御椅子を移され、各皇族方をはじめ奉り、首相以下の下重臣、接待員にも際觀を許された。朱の欄干を周らされた絳の舞臺には、大太鼓、小鼓の響きもたへに、光榮の舞臺東儀信太郎、上近正、東儀博、奥邦夫の四少年は、紅梅をかざした天冠をつけ、兩手に御拍子をもつて迦陵頻を舞うた。次に、安倍季巖、東儀文盛の納曾利、蘭廣高、東儀使輔、奥好察、辻壽男の春庭花を演じて、日本上代文化の優美典雅さを表はした。舞樂終るや、皇帝陛下には、天皇、皇后兩陛下の御見送りをうけさせられて午後九時三十八分、御自動車にて宮城御退出、同四

十六分赤坂離宮に御歸還あらせられた。

明治神宮御參拜

滿洲國皇帝陛下には、御來訪の第一夜を、赤坂離宮に過ごさせ給ひ。あくれば四月七日、折柄雨後の麗日に、御歡喜まします明治天皇陛下の御神靈鎮まります明治神宮へ御參拜をなし給うた。午前九時三十二分、陸軍様式御通常禮装にて、林接待員御陪乘の御自動車に召され、扈從員の乗れる自動車と共に、四臺の自動車兩輛にて、赤坂離宮御出門。同九時四十四分、明治神宮南神門にて御下車。館神社局長等、先著の隨員奉迎裡に、純白狩衣姿の秋岡權宮司の御先導で、拜殿右手に新しく設へた御手洗にて御手水を取られ、御修祓をうけさせられて。拜殿正面から御參入、沈宮内府大臣扈從して、中門内本殿木階下に立たせられた。有馬宮司は狩衣姿にて本殿石階上に祇候。皇帝陛下には秋岡權宮司の捧ぐる玉串を執らせられて、恭々しく拜禮遊ばされた。御拜後、秋岡權宮司は玉串を拜受して、木階を上り、大床の案上に之れを奉奠して、階を降つて復命。皇帝陛下は更に御幣物を奉獻遊ばされた。午前九時五十二分御退出、直に南澤を外苑の聖德記念繪畫館に向けさせられ、同十六分御著。

聖德記念繪畫館御巡覽

聖德記念繪畫館にては、内田外苑管理署長御先導、有馬宮司御説明のもとに、御聖德のかずかずを描いた壁畫を丹念に御巡覽。わけても御踐許の壁畫の前には、しばし御佇立遊ばされた。かくて午前十時五十五分御退館遊ばされた。此日の午後、有馬宮司は赤坂離宮に伺候して、明治神宮神苑圖一幅と、聖德記念繪畫館壁畫集一部を献納した。

大宮御所御訪問

聖德記念繪畫館の御歸途、午前十一時五十七分、青山の大宮御所を御訪問遊ばされた。入江皇太

后宮太夫は、大宮御所御車寄階下に御出迎へ申し、其先導で、御會見間へ御導き申し上げた。皇太后階下に於ての外御喜びの御模様で、宮村式部職御用掛の御通譯で、御無談遊ばされた。又、富士のつゞれ錦の懸掛及び座敷の象の御物をお贈進遊ばされた。皇太后陛下は重なる御歡待に御喜びも深く謝辭を述べさせられ、沈宮内府大臣以下特任官の扈從員を、皇太后陛下に御披露あらせられ、午前十一時二十四分、大宮御所を御退出遊ばされた。皇太后陛下は同日午後四時、御使として入江大夫を赤坂離宮へ御差遣ありて御答禮あらせられた。

靖國神社御參拜

大宮御所御退出の後、午前十一時三十分、九段靖國神社へ御參拜の爲に成らせられた。社頭には折柄の櫻が咲き亂れて春爛漫の景である。中門内に林陸相、大角海相其他の陸海軍將星懸列して奉迎裡に、皇帝陛下は中門外に御下車。芝小路禰宜の御先導にて、拜殿を経て中庭に入らせられ、更に本殿御拜所に進ませられて、賀茂宮司が玉串を奉れば、皇帝陛下には御軍帽をとらせられて、恭々しく御拜禮、御黙禮遊ばされ、同十一時三十七分、中門御發、同四十五分赤坂離宮へ御歸還遊ばされた。賀茂宮司は御禮の爲に、直に離宮に伺候し、靖國の銘うつた日本刀劍録所製の短刀一口、神鏡、寫眞帖等を獻上申し上げた。

御舊知を御引見

七日午後五時より、御旅館赤坂離宮に、皇帝陛下は特別の恩召を以て御舊知の人々を召されて、階上旭間で御見仰付けられ、別室に於て茶菓を賜はつた。頭山清、白井哲夫の兩氏は都合によりて拜辭したが、御召の光榮に浴した諸氏は
陸軍中將森連、同大谷一男、同安藤紀三郎、同高田豊樹、同小泉六一、同少將二宮健市、同土肥原賢二、同岡村寧次、同大佐喜多誠一、同塚田攻、海軍大佐伊藤整一、陸軍中佐和知應二、同竹下義晴、同片倉衷、徳富猪一郎、駒井徳三、三宅福馬、栗原正、宮島大八

赤坂離宮御晩餐會

七日午後六時三十分より、皇帝陛下には、我皇族殿下を赤坂離宮に御招待ありて、大食堂にて盛んなる御晩餐會を催された。六時ごろから秩父宮、同妃、高松宮、同妃各殿下を始め奉り、御在京の皇族殿下には、陸海軍の御禮裝、妃殿下にはロブ・デコルテの中禮服を召されて御參入。御二階旭間に於て、陸軍様式御禮裝の皇帝陛下と御對面、御無談の後、御開宴の時刻至ると共に、大食堂花鳥間に成らせられた。正面に皇帝陛下、御右に秩父宮妃殿下、御左に高松宮妃殿下、皇帝陛下の御前に秩父宮殿下御著席、宮内省業部員の管絃樂吹奏に御開宴、御無談のうちに御會食遊ばされ、春の一夜をいと和やかに御交馳遊ばされ、皇帝陛下には各殿下に遼陽の白塔を模した銀製のボンボニールを贈らせられ、終つて別殿で茶菓を召されつゝ重ねて林出書記官の御通譯で各皇族殿下と御無談ののち、各皇族殿下には同八時三十分お暇乞ひの上御退出遊ばされたが、秩父宮、同妃兩殿下は更に御居残り遊ばされ、御三方はお寛ぎの上、心ゆくばかり御談笑遊ばされ、折柄同夜九時すぎ東京市電氣局が熱誠をこめて作つた色彩とりくの花電車が、離宮門前を通過して御旅情を御慰め申上げたが、皇帝陛下には兩殿下とお揃ひで彰鷲の間のバルコニーに立たせ給ひ、御感興深く御覽、殊の外御満足遊ばされ、秩父宮、同妃兩殿下には同九時二十分御退出遊ばされた。

顯官重臣御引見

八月上旬九時四十分、岡田首相以下各國務大臣、牧野内府、湯淺宮相、前官禮遇者清浦、鈴木、山本諸氏、親任官、菱刈、荒木、加藤各大将等陸海軍親任官並に同待遇、近衛、濱田貴業兩院議長其外、我文武高官九十七名は、何れも禮服に威儀を正して、赤坂離宮に參集すると、午前十時、皇帝陛下には、沈宮内府大臣以下を従へさせられ、旭間に入らせられ、順次九十七氏に御引見あらせられた。終つて一同は花鳥間に於て茶菓を賜つて退出した。

滿洲國公使館奉迎會

我顯官を召されて引見を終らせられた皇帝陛下には、沈宮内府大臣以下の扈從員を従へさせられて、自動車兩輛にて、赤坂離宮御出門、午前十一時二十九分、麻布區櫻田町の滿洲國公使館に成らせ

られた。公使館所在の櫻田町や隣接材木町邊では、軒毎に滿洲國旗をひらめかし、区内の小學校、女學校、中學校の生徒は手に／＼滿洲國々旗を携へて、奉迎すると、皇帝陛下には一々皇子の御答禮あらせられた。公使館本正門内側には、千參事官を始め公使館員、滿洲國童子團員等排列して奉迎申したが、皇帝陛下は丁公使の御先導にて、一旦御休憩所に入らせられ、御小憩の後、東側ペランダに設けられた御席につかれ、庭園芝生に整列してお待ち申し上げてゐた在京滿洲國人、並びに建國功勞者に調を賜つた。第一列には皇帝陛下の御弟、溥儀氏、皇后陛下御弟、溥儀氏、御妹に當らせられる瀋陽氏夫人の御三方はじめ公使以下館員が肅然とならび、第二列には趙欣伯、宇佐美前國務院顧問、駒井初代總務長官、多田前軍政部長高野等ならび、其後にはこの御盛儀を拜すべく來朝した協和會の人々、滿洲國童子團、東京帝學生等が整列してゐた。丁公使恭々しく奉迎文を朗讀して捧呈し、同公使の發聲で、一同萬歳を三唱した。皇帝陛下には再び御休憩所にて御小憩の後、館内に陳列した百餘鉢の蘭花を御觀賞遊ばされ、午前十一時四十七分御發、同五十七分赤坂離宮へ御歸還遊ばされた。

秩父宮御殿御歡談

秩父宮殿下には、皇帝陛下とは昨夏御渡滿以來已に御相識の御間柄ではす上に、這回は御入京以來、特に御接待の任に當らせられ給うたが、公式の機會を離れて、皇帝陛下と御歡談遊ばされたき御思召から、皇帝陛下を表明御殿に御招き遊ばされた。皇帝陛下は大に御喜びになり、八日午後三時四十分、離宮の御内苑苑つたひに、御徒歩で、秩父宮御殿へ御成りになり、宮及び宮妃兩殿下の御出迎ひを受けさせられ、又澄宮殿下にも御出ましになり、春の日をいと御なごやかに御歡談遊ばされた。

政府主催奉迎晚餐會

帝國政府主催の奉迎晚餐會は、八日午後六時五十分から、麹町區永田町首相官邸に於て、皇帝陛下御臨場のもとに開かれた。この夕官邸の正門には、日滿兩國の大國旗が交又され、庭園には數々の雪洞の燈火が浮んでゐた。

午後六時三十分、陸軍様式御禮裝の皇帝陛下には、自動車兩輛で、扈從員を從へて首相官邸に御着になつた。階下玄關廣間に整列の先著の隨員、及び岡田首相以下各大臣の御出迎へを受けさせられ、正面階上、左手より御休憩所にしつらへた開議室に入らせられた。四隅に黒松、海棠、紅葉、眞柏、蘭等の植木鉢が飾られてゐる。こゝで岡田首相以下各閣僚に調を賜ひ、終つて御先著の秩父宮、閑院宮、伏見宮三殿下をはじめ奉り、各宮殿下に御對面の後、各皇族方と、御食前のカクテルに御歡談を交はされ、御宴會場たる一階大廣間に入らせられた。

御宴會場は、華麗な大食堂、楕形のメインテーブルに飾られた三臺の銀製大燭臺には、蠟燭の灯たゆやかに燃えて、輝くシャンデリアの光りと相映し、卓上にはペコニヤ、カネーション、薔薇の生花が各々芳香を競うてゐる。窓外の築山の樹々には雪洞の灯ゆらめき、げに春の宴にふさはしい風情である。かくて午後六時五十分、首相の御先導で、日滿閣官百七十名が襟を正して居ならぶ宴會場に進ませられて、金屏風めぐらした正面に御著座。皇帝陛下の御左に秩父宮殿下、伏見宮殿下、御右に閑院宮殿下が御著座。岡田首相は皇帝陛下の御正面に、左に林出通譯。夫より順次日滿閣官の席がならんだ。海軍々樂隊の奏樂裡に開宴、デザート・コースに入るや、岡田首相起つて皇帝陛下、各宮殿下の御許しを得、謹んで奉迎の辭を述べた。先づ今回の御來訪が兩國の親交を益々厚からしむる意義極めて深き未曾有の盛事として感激に堪へざる旨を述べ、次に今日の御親臨に對して厚く御禮を申し上げ、又、滿洲帝國が皇帝陛下御統治の下に著々として健全なる發展をなしつつあることに對して謹んで慶祝の意を表し、皇帝陛下が天資御英邁なるをたゞへ、萬壽の無疆と、滿洲帝國の悠久なる發展とを衷心祈念してやまざると告げて皇帝陛下の御健康を祝し奉り、軍樂隊の滿洲國々歌奏樂裡に謹んで乾杯した。

ついで一同起立のうちに皇帝陛下には御起立遊ばされて、日本政府及び國民の懇切なる歡迎と、今日の宴會並に滿洲帝國建國以來のわが國の盡力援助に對し謝意を表せられ、兩國同心協力、精神は始終貫徹して永久に渝らず、共に東洋の平和を保ち進んで世界人類の幸福を謀るべしと説かせ給ひ、わが皇室の御繁榮と首相及び各大臣の健康並にわが國運の隆昌を祝せられて御杯を舉げ給ひ、軍樂隊の「君が代」奏樂裡に乾杯あらせられた。

宴終つて、皇帝陛下には、各宮殿下と御一緒に、別室に於てウキスキーの御杯を御かさねになり、樹々に映づる雪洞の灯をめでさせられ、又、テレスに立ち出でさせ給うていと御興ありげに御覽遊ばされ、午後八時四十分諸員奉送裡に官邸を御出門、御歸還遊ばされた。

代々木觀兵式

皇も大元帥陛下の臨御を仰ぎ、盟邦滿洲國皇帝陛下の御觀臨遊ばさるゝ、特命近衛師團觀兵式は、四月九日午前、代々木練兵場に於て厳かに舉行せられた。

諸兵指揮官近衛師團長宮殿下の御指揮のもとに、参列の光榮に浴した一萬二千の健壯は、近衛歩兵第一、第二、第三、第四の各聯隊、電信第一、野重第八、近衛砲兵、戰車第二、近衛騎兵、騎兵第十五、同第十六、騎砲兵、近衛輜重兵隊の順に、午前九時十分には整列を終つた。

大元帥陛下には、陸軍様式御正装を召され、本庄侍從武官長御陪乘の略式自動車兩輛で、午前九時二十分宮城御出門、君が代奏樂裡に、同三十八分式場に著御遊ばされて、便殿に入御。滿洲國皇帝陛下には、陸軍様式御正装、秩父宮殿下と御同乗の自動車兩輛で、午前九時四十分赤坂離宮御出門、同五十三分滿洲國々歌奏樂裡に式場に御著。

畏くも大元帥陛下には、便殿の外に御受け遊ばされて、御共に便殿に入らせ給ひ。やがて大元帥陛下、皇帝陛下には御揃ひで、御料二頭立儀裝馬車に乗御、秩父宮殿下を始め奉り、各皇族殿下、兩國侍從武官長、林陸相以下各大將等、乘馬にて扈從。軍樂隊の滿洲國々歌吹奏の裡に、御馬車を諸隊の前に進ませられた。皇帝陛下には参加諸隊に一々舉手の禮を賜うて御觀臨遊ばされた。式終つて、大元帥陛下、皇帝陛下には、御列立にて露臺に御出まし遊ばされると、分列式が開始された。行進曲に乗つて地には諸兵の行進勇ましく、空には八十九機の空中精銳が分列飛行を展開した。かくて午前十一時十二分、皇帝陛下には、秩父宮殿下と御同乗の自動車兩輛で、式場御發、赤坂離宮へ御歸還。大元帥陛下には、同十一時十九分式場發御、君が代吹奏裡に宮城に還幸遊ばされた。

記念御撮影

皇帝陛下には、觀兵式終了後、赤坂離宮に御歸還あるや、御正装のまま、秩父宮殿下と御ならばせられ、隨員、接伴員六十餘名にも御陪席を賜はり、大噴水塔付近の御内苑から離宮の御建物を背景に記念御撮影を遊ばされた。

政府顯官御招宴

九日午後六時三十分より、滿洲事變以來同國建國に際して多大の同情と貢獻となした我政府の顯官に對して、御感謝の意をかねられて、御旅館赤坂離宮に御晚餐會を御催しになりて、御召しになつた。御召しの御沙汰に浴した岡田首相以下各國務大臣をはじめ前關、東軍司令官、菱刈大將、滿洲事變當時緊密の關係にあつた本庄、眞崎、荒木、各陸軍大將、皇帝陛下が天津御時代より御終故深き芳澤元外相、宇佐美元滿洲國顧問、東京横濱御出迎關係者、御召艦長其他の顯官百一名は、午後六時前後から參集して、御宴會場の大食堂に於て、宴を賜つた。皇帝陛下には終始御機嫌よく拜せられ、午後八時四十分、御宴終り、一同と共に旭間に於て種々御談あり、一同は光榮に感激して退出した。

東京市奉迎式

東京市の奉迎式は、十日午後、歌舞伎座に於て開かれた。皇帝陛下には、沈宮内府大臣以下四十餘名の扈從員を従へさせられ、午後三時二十分、赤坂離宮御發、歌舞伎座に臨ませられたが、御沿道なる紀伊國坂下、永田町、三宅坂下、日比谷公園前等に於て、雨降る中に傘もささず、増列して奉迎する市立小學校職員兒童一萬四千の熱誠振りには、いたく御感動あつたやに承はる。

授歌舞伎座には、牛堀東京市長、森市會議長等御出迎へ申し上げ、階上貴賓室の御休所に御導き申し上げた。其所にて牛堀市長、森市會議長、落合、鷲尾兩助役、松永市會副議長に賜謁あり、市長からは恭しく御挨拶を言上申し上げた。この頃式場には

丁公使と共に特に御妹君湖嶽氏夫人、岡田首相以下各閣僚、一木、平沼樞府正副議長、湯淺宮相、牧野内府、財部、本庄、渡邊、眞崎、阿部、松井、荒木、菱刈、加藤、永野各陸海軍大將、富井、櫻井、荒井、原、久保田各樞密顧問官、松平貴族院副議長、濱田、植原衆議院正副議長、市來、永田、伊澤、堀切各元市長、小栗警視總監、横山府知事を初め各省兩次官、參與官、政黨代表者、官私立大學總長、東京府選出貴衆兩院議員、府市會議員、區會議長、民間各種團體代表者等一千二百名は胸に蘭花と櫻花とを配した奉迎徽章を飾つて、肅然として控へた。

滿洲國々歌吹奏のうちに、皇帝陛下には二階正面の御座に臨ませられた。舞臺正面に立つた牛堀市長

長は本迎文を講讀、一同最敬礼の後、市長の發聲で、全員は手にした日滿兩國々旗を打振りつゝ、皇帝陛下萬歳を唱へた。式終つて、皇帝陛下は一旦御休所に入らせられた。

翌日、正廳の御席に臨ませらるや、牛塚市長側近し、大谷松竹社長、御説明のために御付添ひ申し、撃柝愈々勳進帳が開幕せられた。

歌舞伎 勳進帳

富樫左衛門(中村吉右衛門) 番卒(助高屋高助) 同(坂東養助) 同(守田勘彌) 同(坂東新水) 大刀持(中村又五郎) 源判官義経(澤村宗十郎) 龜井六郎(大谷友右衛門) 片岡八郎(市村龜藏) 伊勢三郎(市川高麗藏) 駿河次郎(市川榮五郎) 常陸坊海尊(坂東彦三郎) 武藏坊辨慶(松本幸四郎) 長唄連中【唄】芳村伊十郎、松永和風【三味線】杵屋寒玉【鳴物】望月朴清、その他各社中

勳進帳の幕閉ちて十分間の御休憩時間に、正面廊下に陳列せる、市よりの献納品東京十二景屏風、市勢圖表、市勢概要、東京名所寫眞帳を御覽あり、市長は其目錄を拜呈した。ついで唄は紅葉狩に移つた。

新歌舞伎 紅葉狩

余吾將軍平維茂(市村羽左衛門) 從者右源太(市川男女藏) 同左源次(市村家橘) 同藤内(尾上松緑) 局錦木(尾上多賀之丞) 同岩橋(尾上梅朝) 侍女松ヶ枝(中村もしほ) 同田毎(中村福助) 同望月(市川松建) 同夕照(市川猿藏) 同朝霧(中村福之丞) 同靜江(片岡齊燕) 同村雨(中村章景) 同楓(中村正太郎) 同萩江(片岡義直) 同梢(坂東鶴之助) 同相生(尾上菊之助) 同菊野(坂東竹三郎) 戸隠の山神(坂東三津五郎) 息女更科姫實は戸隠の鬼女(尾上菊五郎) 竹本連中【太夫】竹本鏡太夫、竹本一登太夫【三味線】野澤吉作、竹澤仲造

長唄連中【唄】松永和風、富士田新藏、松島庄三郎【三味線】柏伊三郎【鳴物】望月太左衛門、その他各社中

常磐津連中【淨瑠璃】常磐津松尾太夫【三味線】常磐津文字兵衛、その他各社中
勳進帳は豪華、紅葉狩は艶麗、共に日本演藝の香りいちよるしい場面であつた。皇帝陛下にはいとも御満足の様子に拜せられ、午後五時三十九分、諸員敬禮に御退場、同四十九分赤坂離宮に御歸還あらせられた。因に沈宮内府大臣を通じて、東京市並に市關係者に對して、夫々金一封を賜つたと承はる。

離宮の御内宴

十日午後六時三十分から、赤坂離宮に、秩父宮殿下を始め、同妃殿下、高松宮、同妃兩殿下、澄宮殿下を御招待遊ばされ、御妹、君洞驥夫人をも招かれて、符間に於て、満洲御料理で、打くつろがせられた御會食を遊ばされ、いろ／＼御懇談がおはしたと拜聞する。

多摩御陵御参拜

花曇りの四月十一日、大正天皇の御英靈鎮まりまします多摩御陵に御参拜遊ばされた。皇帝陛下には御通常禮裝を召して、沈宮内府大臣以下の隨員を従へさせられ、林接伴員御隨乗の自動車直駕にて、午前八時五十八分赤坂離宮御出門、原宿驛へ御著、同驛から御召列車に御乗車、同九時十分御發車、雨上りの武蔵野の春色をめでさせ給ひつゝ、同十時十分東淺川驛御著。自動車に召されて、同二十五分第一鳥居前に御著、御下車。古河陵皇監の御先行、渡部諸陵頭の御先導にて、御拜所に進ませ給うた。御陵の御前へ、沈宮内府大臣のさしける白百合の花環を賜ひ、恭々しく御拜禮遊ばされた。一旦御休所に於て御小憩の後、同十四時四十五分自動車にて御發、東淺川驛を同十時五十分發の御召列車で、同十一時五十分原宿驛御著、赤坂離宮へ御歸還遊ばされた。

古美術古典籍御覽

同日午後は、赤坂離宮羽衣間に陳列の、帝室博物館所蔵の古美術品、宮内省圖書寮所蔵の古典籍を御覽遊ばされた。杉帝室博物館館長、溝口美術課長、渡部圖書頭が御説明申し上げた。陳列品は、唐、宋、元各時代の名畫を始め東洋美術の粹を集め、古書籍は、宋版、五山版等であつた。特に皇帝陛下には徽宗皇帝御筆の桃地圖について一入の御感あつたやに洩れ承はる。

聖堂御参拜

四月十二日は終日、御旅館赤坂離宮に御休養遊ばされた皇帝陛下には、十三日午前十時二分離宮御出門、自動車直駕で、沈宮内府大臣以下隨員を従へさせられ、本郷湯島の聖堂へ向はせられた。同十

時十三分御著、聖堂御高門前には斯文會長兼聖堂役員會會長徳川家達公、副會長徳川國顯公、同族芳郎男、顧問入江爲守子、同徳川建孝伯、松田文相等肅然と御迎へ申し上げた。皇帝陛下には神職木村瑞枝氏並に徳川會長の御先導にて、仰高門内兩側に奉迎の服部宇之吉博士、横山東京府知事、牛塚市長、丁滿洲國公使以下、文部省、斯文會、大東、日滿南文化協會、二松學會各役員に御會禮を賜ひつゝ入徳門、香壇門を経て本殿「大成殿」内に御進みあり。孔夫子像の前にて御拜禮、御焚香ありて、暫し御黙禱のち孔夫子像を左右に圍む顔子、曾子、子思、孟子等の四配の木主にも御黙禱を捧げられ、午前十時二十一分聖堂を御出發あらせられた。なほ斯文會では聖堂略志外三冊、孔子聖蹟圖ほか一帖等八點を献上するため、同日午後一時同會理事が赤坂離宮に參入して、献上の手續きをとつた。

衛戍病院御慰問

ついで午前十時三十四分、牛込區戸山町の陸軍第一衛戍病院に御到着、滿洲事變の傷病兵を御慰問遊ばされた。林陸相、柳川第一師團長、小泉醫務局長、寺師第一師團軍醫部長、田邊病院長等其他御出迎へ申し、一旦二階貴賓室に入らせられて、陸相以下に賜謁。田邊院長は還送患者の状況につき言上して言上書を捧呈し、陸相も亦全國に於ける還送患者の概要につき言上書を捧呈した。かくて富家軍醫止の御先導、田邊院長の御案内のもとにまづ、二階の第二内科病室を御訪問、更に戦傷兵で埋められた三階第三外科病室、將校病室等を御巡視、診療主任を通じ温かき御慰問の御言葉を賜はり、特に木下騎兵大尉、藤浦砲兵大尉、大塚歩兵少尉、砂川騎兵特務曹長の四患者に對しては單獨を賜ひ一々病狀を聴召され、一兵士に至る迄、其枕頭に御立寄り遊ばされて、御言葉を賜はり、重患者のベットの上に正座奉迎できぬ者に對しては、御いたはりの御下問を賜つた。つぎに北病棟中央廊下の整形材料陳列場へ成らせられ、松田、三好兩軍醫正御説明で、義眼、義手足、補助器等を御覽遊ばされ、外科病室では、義足を付した歩兵上等兵中塚茂三郎、航空兵二等兵佐藤小一郎の兩氏が自由に歩行できるさま。右手を切断されて補助器を付した歩兵一等兵藤崎三郎氏が、義手で筆をとり、精神一到何事か成ラザランと書を御覽あそばされ。同十一時二十五分再び貴賓室に成らせられ、種々御下問ありて、林陸相に對して次の如き有難き御言葉を賜はつた。

我國建國以來貴國陸海軍將士ノ我國ニ效サレタル非常ナル援助ニツイテハ
朕ノ深く感スル所ニシテ之カ爲負傷シ又ハ廢殘ノ身トナリ或ハ疾病ニ犯サレタル等ノ者ニ對シテハ
眞ニ憫憐ノ情ニ堪ヘス茲ニ特ニ

親臨シテ慰問スルト共ニ更メテ無限ノ感謝ト表ス今後トモ充分加療シ恢復ノ速カナランコ
トヲ祈ル次第ナリ尙各地ノ戰傷病患者ニ對シテハ貴大臣ヨリ右ノ旨傳達セラレンコトヲ切望ス其他
管テ滿洲ニ駐屯セラレタル一般將士ニ對シテハ其現役タルト在郷タルトヲ問ハス滿洲ノ建國ヲ援助
セラレタル勞苦ニ對シ貴大臣ニオイテ代ツテ深厚ナル謝意ヲ表セラレンコトヲ望ム

陸相は戰傷病兵並に一般將兵に代りて、謹んで御禮を言上した。又、皇帝陛下には、全國各衛戍病院に收容中の還送患者七百八十餘名に對して、御見舞として御菓子料金一封を賜與せられ、第一衛戍病院職員にも金一封を賜與せられた。午前十一時四十分、病院御出門、同五十一分赤坂離宮へ御歸還遊ばされた。

古美術古典御觀賞

皇帝陛下には十三日午後、離宮狩衣間に於て、前日に引つゞき美術品古書典を御覽になつた。此日は主として帝室技藝員等の作品を御覽に供したが、古典籍は本邦舊刊本、朝鮮舊刊本を御覽に入れた。殊に山井真齋の七經孟子考文及び高橋作左衛門の滿文輯韻は特に御注意を深うし給うたやに承はる。

洗心亭御歡談

大宮御所におはします皇太后陛下には、十三日午後、皇帝陛下を櫻咲く御内苑の洗心亭に御招き遊ばされ、御茶の會を催はさせられ、御多忙にあらせらるゝ皇帝陛下を心からの御慰め申し上げさせ給うた。皇帝陛下には洗宮内府大臣、袁尙書府大臣等を御供につれさせられて、離宮裏から御徒歩で、春色漫々の御苑傳ひに洗心亭に御着、皇太后陛下の御やさしきおもてなしに打解けて春の半日をいと楽しく御過しになつた。

武藤元帥墓前御差遣

同日午後三時、侍從武官連大佐を、普羽護國寺なる故武藤元帥の墓前に遣はされ、曩に駐滿時代の

勳功を嘉みさせられて、武靈を慰められた。連侍従武官は武藤能輔子未亡人其他の出迎へをうけて、禮拜し、弔詞を讀んで、皇帝陛下の有難き思召を地下の英靈に傳へ、通譯官をかりて此趣旨を武藤元帥の遺族にも傳へた。

功勞者實業家御引見

同日午後五時より、滿洲國建國に際して、多大の功勞をたて同情をよせたる我陸海軍人、政治家、及び今後も亦交渉をもつべき銀行家實業家の有力者等をば召されて、御下問あらせらる御發意によりて、赤坂離宮に朝野の名士をば御引見遊ばされた。御召しになつたは、高橋蔵相、齋藤前首相、林陸相、大角海相、廣田外相、菱刈、加藤(寛治)、渡邊、眞崎、本庄等の各陸海軍大將、吉田茂大使、芳澤謙吉氏、岡部長景子、松岡洋右氏、加藤鮮銀、兒玉正金、結城興銀の總裁頭取、菊本三井、瀧下三愛の取締役會長等十九名で離宮御間に於て單獨内謁見を賜はつた後、各個人毎に五分乃至十分間づゝ御下問があり、終つて一同は別殿に於て茶菓をいたして退下した。

宮城御參入御告別

四月六日の御入京以來、國を擧げて奉迎するなかに、既に天皇陛下との御會見の盛儀も滞りなく終へさせられ、其後御繁忙の御日程にも拘はらず皇帝陛下の御機嫌は益々麗しきやに拜した意々十五日には御退京とあるから、其前日即ち十四日午後、天皇、皇后兩陛下に御對面御告別のために、宮中に御參入とはなつた。

この日、皇帝陛下は御通常禮裝を召され、林接伴員御陪乘、沈宮内府大臣扈從、自動車直導で午後零時十分赤坂離宮御出門、同二十分、二重橋正門から宮城に御參入遊ばされた。天皇陛下には長くも御車寄迄御出迎へ遊ばされ、御共に牡丹間に入らせられた。皇后陛下は御間入側に御出迎へあり、御間には秩父宮、同妃、高松宮、同妃、閑院宮、伏見宮、同妃の七殿下が御待ち遊ばして、こゝに御歡談あり、皇帝陛下は懇ろに御言葉を送りさせられた。

此日御召の榮に與つた岡田首相、廣田外相、林陸相、大角海相、牧野内府、湯淺宮相、鈴木侍從長、本庄武官長、丁滿洲國公使、簡任官以上の扈從官、勅任官以上の接伴員等五十餘名は、千

種間で御待ち申し上げてゐると、天皇陛下、皇帝陛下を御先頭に、皇后陛下を始め奉り各皇族殿下には、千種間を経て豊明殿の御食卓につかせられ、諸員は之れについた。

豊明殿御送別宴

天皇陛下には正面の玉座に著御、御前に皇后陛下、その御右に皇帝陛下、御左には秩父宮殿下をはじめ各皇族殿下御著席、次いで諸員をそれく著席し、御會食中、宮内省樂部の雅樂越天樂と新に作曲された祝福と歡喜の妙なる樂が奏せられた。御宴を終らせ給ひて後、各皇族殿下と御一緒に再び牡丹の間に入らせられ、御茶菓を共にせられつゝ、兩陛下には皇帝陛下と御情別の御物語りを遊ばされ、終つて御召の諸員にめでたき打ち出の小槌をかたどつたボンボニエールを賜はり、午後二時十五分、皇帝陛下には、天皇、皇后兩陛下に御別れを告げさせられて自動車直導にて宮城を御退出、同二時二十三分赤坂離宮に御歸還遊ばされた。

聖上御答訪

皇帝陛下御退京御告別の御訪問に對して、天皇陛下には御答訪遊ばさるゝ爲に、同日午後二時三十分、宮城御出門、鈴木侍從長、本庄武官長を従へさせられて、赤坂離宮に行幸あらせられた。皇帝陛下は御車寄迄御出迎遊ばされ、二階御間に御案内御告別の御挨拶を御交換、つきせぬ御名殘を惜しませられつゝ、天皇陛下には午後二時五十分離宮發御、同二時五十八分宮城に還幸遊ばされた。秩父宮殿下には、同三時十五分御告別の爲に、御旅館を御訪問、御別れを惜しませ給うた。

接伴關係者御慰勞宴

意々明日は御退京といふ十四日の夜、接伴員及び宮内省、陸海軍、外務等の關係諸員百餘名を赤坂離宮に召されて、御慰勞の御會食を御催しになつた。林權助男以下各接伴員其他は午後六時二十分離宮に參入した。皇帝陛下には沈宮内府大臣以下隨員を従へさせられ、旭間にて諸員に賜謁、次いで

大食堂の花鳥間にいらせ給ひ御着席、宮内省樂部員の奏樂中に御開宴、皇帝陛下には諸員に對して御
慰勞の御言葉賜はり御談話中に御會食、終つて再び旭間に茶菓を賜ひ、午後九時過ぎ御會食は
終り、一同感徳裡に退出した。尙同日、接伴員、警備關係者及び岡田首相以下各閣僚並に關係官に
對して、銀製花瓶、銀製煙草入、同カフスボタン及び金一封を賜はつた。

社會事業御獎勵賜與金

御退京の前に、十四日、御教諭並に社會事業御獎勵の思召から、我政府に對して金十五萬圓御賜
與の御沙汰があつた。同日午後四時三十分、吉田内閣書記官長は離宮に伺候して、陛下より有難き御
言葉と共に御賜與金を拜受して退出し、岡田首相も午後五時三十分離宮に伺候し、宮内府大臣を経て
御禮を言上した。

東京驛御發御退京

四月六日輝やかしき御入京以來、皇室の御歡待と國を擧げての奉迎の裡に、日滿兩國親善に顯著な
御足跡を印せられた滿洲國皇帝陛下は、十五日午前、東京驛御發にて愈々御退京、關西御巡遊の途に
就かせられる。御滯京の中に拜せられた日滿皇室の御親善の御模様は、前に詳記せる儘要にても知ら
るゝが、民間の心をこめての熱誠な奉迎振りは一々枚舉するに邊がない程であつた。東京市の花電車、
市民及び各學校生徒其他の大提灯行列を始め、諸種の催しがあつたが、東京市内の要所には奉迎の意
を表はす飾りつけは美々しく、滿都盡く奉迎に熱中してゐた感があつた。擬十五日は愈々御退京と
承はると、御名残りを惜しむ情緒はまた一入であつた。

皇帝陛下には十五日早朝御起床、陸軍御通常禮裝を召され、午前九時十分赤坂離宮御出門遊ばされ、
林接伴員御陪乘の自動車略式直線で、沈宮内府大臣以下を従へさせられ、沿道を埋むる奉送者に戀ろ
なる御會禮を賜ひつゝ、同九時二十一分東京驛に御着遊ばされた。

御沙汰を奉じて御出迎あらせられた秩父宮殿下と御共々、御休所に入らせられて、各皇族殿下に御
對面御告別あらせられた。

之れよりさき、皇帝陛下の御乗車遊ばさるゝ驛の第四ホームには奉送の

岡田首相以下各國務大臣、牧野内府、湯淺宮相、鈴木侍從長、本庄武官長、各前官禮遇、西東京警
備司令官、田代憲兵司令官、小栗警視總監、横山東京府知事、牛塚東京市長、平沼樞府副議長、近
衛濱田貴衆兩院議長、陸海軍大將、特別縁故者として特に奉送を許された芳澤元外相、宇佐美前滿
洲國顧問をはじめ丁滿洲國公使、同公使館員等

肅然として居並び、第三ホームには薄徳、潤蔵兩氏をはじめ公爵以下四位以上の有資格者、在留滿
洲國人、特に許された人々も整列してゐた。

午前九時二十六分、軍樂隊の奏する滿洲國々歌が響けば、皇帝陛下には、堀尾東京驛長 御先行、
池田東鐵局長 御先導で、秩父宮殿下を始め奉り、各皇族殿下と御共にホームに向はせられた。第
四ホームに奉送する岡田首相以下諸員に謝を賜ひ、儀仗隊を御隨兵、第三ホームに奉送の諸員に對し
ても御會禮を賜ひつゝ九輛編成御召列車の最後部展望車に進ませられ、秩父宮殿下と一分間餘にわた
る永き御握手を續けさせ給ひ、其後各皇族殿下とも親しく御握手を遊ばされて、展望車に御乗車、滿
洲國々歌吹奏のうちに、午前九時三十二分御發車、諸員奉送裡に一路京都へと向はせられた。

沿道雨中の奉迎送

東海道幹線をひた走りに走つた御召列車は、十五日午後六時に京都驛に着いた。皇帝陛下の御車中
の御模様については、接伴員から次の如く發表された。

皇帝陛下には、沿道雨中の奉迎送、就中いたいな小學校生徒が雨にもめげず奉迎送申上げたこと
には、いたく御感激遊ばされた、御模様で、各停車場には接伴員を降されて謝意を表し遊ばされた。
御途中は終始展望車にて沿道各地の奉迎送に一々御答禮あり、側近者から沿道の名勝舊蹟に對し御
説明申上げると、御興深く御聽き遊ばされた。

京都御安着

御召列車の御安着を待ち奉れる京都驛第二ホームには、鈴木京都府知事、松井京大總長、松下舞
臺要港部司令官、澁谷留守司令官、澁山京都市長、田中京都商工會、露所會頭其他の官民が約二百名
奉迎申上げた。其中に廟親王第十九王子京大法學部學生憲容氏が、同じ京大在學の丁滿洲國公使の
令孫了志方氏と共に、學生服で交つたるがなか／＼に人目をひいた。

かくて御召列車御着と共に、皇帝陛下には陸軍御通常禮装で降り立たせられ、森田京都驛長の御先行、日淺大機局長の御先導で、東陸橋を渡らせられて貴賓室玄關に出でさせられて、宮内省差遣はし御召自動車に御乗車、沈宮内府大臣以下扈從して、八輛編成自動車南郷にて同四分驛御着、第六師團、下士、市內各小學校、男女中等學校生徒、大學、專門學校學生、青洲生、右衛門軍人、國防婦人會員等御道前を埋める五萬に上る奉迎者の歡呼をうけさせられつゝ、同六時十八分都ホテルに御着遊ばされた。

京都の御第一夜

都ホテルにては、池松同ホテル社長以下恭々しく御出迎へ申し、陛下には御機嫌うるはしく六階の御居間に入らせられた。御居間の窓外には春雨に暮れ行く東山から洛北の景色が展覧され、舊都のしめやかな情緒がゆかしくも眺めらるゝをば、いと御興深げに御覽遊ばされた。又この夜市内には奉迎の花電車、花バス等が縦横に走り、奉迎気分は隨所に横溢してゐた。

桃山御陵御參拜

十六日午前九時四十分都ホテル御出門、桃山御陵御參拜遊ばされた。陸軍御通常禮装に、沈宮内府大臣以下の扈從員を従へさせられ、同九時五十三分京都驛御着、特別列車にて、同十時御發車、同四分桃山驛御着。御召自動車にて、同驛前廣場に堵列奉迎の諸部隊を始め、伏見區內在郷軍人、各小學校兒童等に御會禮を賜はりつゝ參道を進ませられ、同十九分、先着の隨員等の奉迎を受けさせられて御陵御着。御手水の後、勝田陸軍監御先行、渡部諸陵頭御先導で、御駒寄せに御參進、眞菰の上を御拜所に御參入、諸陵寮員の捧げる純白の菊花、カーネーション、スキートビーの三種にアスパラガスの縁を配し白絹のリボンを結んだ直徑四尺の見事な花環を、恭しく御陵御大前に奉奠、御拜禮遊ばされ。沈宮内府大臣以下も門外に整列一齊に奉拜。續いて皇帝陛下には東御陵に向はせられ、同じく御花環を奉奠して御拜禮。東御陵前で御召自動車を召されて桃山驛に向はせられ、午前十一時八分同驛御着、同十一時二十二分京都驛御着。都ホテルに御歸還遊ばされた。尚桃山驛からの御歸途、

同驛にて張侍從武官長に命じて、乃木神社へ御差遣されて、御代拜をなさしめ給うた。

京都御所御參入

十七日午前には、御輕快な濃茶色の御背廣服を召されて、沈宮内府大臣等を従へられ、大谷接待員御陪乗の自動車で、午前十時三十二分都ホテルを御發、建禮門から京都御所に御參入遊ばされた。雨上りの御苑の若葉若草は一入に清らげの色を増し、洛の山々の景色は殊更に春めて見えた。同十時四十分新御車寄に御着、森田内匠寮出張所長の御先行、木下内匠頭御先導で、東一の間に御少憩の後、殿上の間を御通りになつて、紫宸殿に御參入、高御座、御帳臺を御覽、殘の花と若葉のはゆる左近の櫻をめさせられ、小御所から御學問所へ進ませられた。其御前庭で蹴鞠保存會員の奉仕する蹴鞠を御覽遊ばされた。鞠の家元飛鳥井雅廣氏等八名の古式によりて、烏帽子水干に差貫、鴨香穿てる足もて、鹿皮純白の鞠を蹴あぐるらうたけの古代姿のたはむれにいと御興ふかけにみせらるゝを拜した。更に常御殿、迎春間、懸雪亭等を経て、清涼殿に入らせられ、曲水宴の故事など聽召されて、再び一の間で御少憩の後、諸員奉送裡に新御車寄から御乗車、午前十一時二十四分御發。建禮門を経て、同十一時四十二分御歸還遊ばされた。

京都官民奉迎式

京都府、市、商工會、議所主催の官民合同の滿洲皇帝奉迎式は、十七日午後三時過ぎより、鷗尾碧瓦朱樓の平安神宮の神苑に於て舉行された。會するもの約一千二百名、一同は大極殿前に整列し、前面龍尾壇下の廣場には市内中小女學校の職員生徒約五千名參列した。皇帝陛下には陸軍禮式御通常禮装にて御臨場遊ばされ、鈴木知事の御先導で神苑内に御觀覽、竹内禰宜の御先導で神前に御拜禮の後、奉迎式場に臨ませられ、鈴木京都府知事一同を代表して、恭々しく奉迎文を捧讀し、淺山市長は滿洲國皇帝陛下の萬歳を奉唱し、參列者皆歡呼唱和して、滿洲國々歌吹奏裡に、午後三時四十分陛下は御退場御歸還遊ばれた。

二條離宮御参入

十八日午前十時、この日は御背廣服を召されて、沈宮内府大臣以下を従へさせられ、自動車南河に御着。住職伊藤敬宗氏の御先導、鈴木知事の御説明で、林泉の美をあくまで御觀賞、鏡湖池畔の小徑をたどらせられて、金閣に入らせられ、閣上から幽寂の風光を御覽せられ、池の鯉に鮎を與へて興せさせられた。更に夕佳亭で御少憩の後、同十一時三十七分御發、同五十五分都ホテルに御歸還遊ばされた。同日午後はホテル内の茶室可樂庵で裏千家の家元今日庵宗匠の茶禮を御覽、更に清水六兵衛、伊東陶山、浮田樂徳、伊東信助諸氏の樂燒を御覽、親しく御筆を取らせ給うて、陶器に御揮毫ありて、之れをやかさ給ふた。

金閣寺御成

洛西金閣寺は世に名だる名刹である。林泉の勝景は天下に知られてゐる。午前十時五十五分同寺に御着。住職伊藤敬宗氏の御先導、鈴木知事の御説明で、林泉の美をあくまで御觀賞、鏡湖池畔の小徑をたどらせられて、金閣に入らせられ、閣上から幽寂の風光を御覽せられ、池の鯉に鮎を與へて興せさせられた。更に夕佳亭で御少憩の後、同十一時三十七分御發、同五十五分都ホテルに御歸還遊ばされた。同日午後はホテル内の茶室可樂庵で裏千家の家元今日庵宗匠の茶禮を御覽、更に清水六兵衛、伊東陶山、浮田樂徳、伊東信助諸氏の樂燒を御覽、親しく御筆を取らせ給うて、陶器に御揮毫ありて、之れをやかさ給ふた。

京都御發

十九日午前九時四十分御旅館都ホテル御發、沿道盛んなる奉送を受けさせられつゝ、同五十分京都驛に御着。皇帝陛下には陸軍御通常禮装を召され、知事市長其他の諸員の奉送裡に、第四ホームに進

ませられ、特別列車に御乗車、午前十時京都驛御發、若草萌ゆる古都奈良に向はせられた。

奈良御著

午前十一時、奈良驛御著、驛頭に御出迎へ申した一戸奈良縣知事、石原奈良市長等に謁を賜はり、諸員奉迎のうちに、日淺大鐵局長の御先導で、驛の本館玄関口から、自動車に御乗車、自動車兩導にて、三條通を東に、御旅館奈良ホテルに入らせられた。

正倉院御成

奈良ホテルに於て御晝餐、御少憩の後、午後一時五十分自動車兩導にて、ホテル御發。沿道に堵列する在郷軍人、青年團、生徒兒童等五千名の奉迎裡に、同五十六分正倉院に御着。山口奈良帝室博物館長が御先行、杉帝室博物館總長が御先導を申し上げ、千古の寶庫、天平の文化の粹を蒐めた院内の、北倉、中倉、南倉を、約一時間二十分に亘つて御巡覽遊ばされた。更に同院舊所にて構内聖蹟藏に藏されてゐる古經凡そ五千卷を御覽なつたが、隋唐及び奈良平安朝の寫經、版經、十一部をこまかに御覽遊ばされた。同三時十五分正倉院御發、ホテルに御歸還遊ばされた。山口奈良帝室博物館長の談によれば、正倉院は皇室の御秘庫であるから、隨行員にのみ帶劍を解く事を請うたが、皇帝陛下は御自身から、其御帶劍を解き給うて、之れを卓上に置かせられて、御回覽遊ばされたのは、一同恐縮感激したと。

人文字の奉迎と提燈行列

同夜七時半を期して、奈良市の學童生徒約四千名は手に手に紅提燈を携へて、三笠山中腹二本松に集合して、石原市長の指揮の下に、山腹に人文字を以て、奉迎の二文字を描き、空には花火揚り、紅提燈と照り映へる姿は美しいものであつた。市長の發聲で、萬歳を奉唱して、順次下山して、提燈行列に移り、同八時半頃、御旅館の御座所の東北に當る荒池堤に整列して、再び市長の發聲の下に萬歳を奉唱した。皇帝陛下は、意外に堂々紅提燈の人文字を御興深げに御覽せられ、提燈行列に對しては

御座る御會澤を賜つた。

奈良大佛殿御参拜

二十日午前十時、奈良ホテル御發、陸軍御通車召され、自動車兩輛にて、東大寺大佛殿に御着、雲井東大寺住職、北河原同寺住持の御出迎へをうけさせられ、有名な國寶金銅大燈籠を御覽あり、高さ十六丈に及ぶ大建造物なる大佛殿の軒を見上げさせられ、内陣に入らせられ、正面の階段を須彌壇上に登り給ひて、西側から巨像の周圍を御一巡し給ひ、其巨大さに御驚嘆の御模様であつた。雲井住職から、大佛殿建立の緣起、建造物の歴史等を聞召され、珍らしき毛彫の蓮華藏世界圖や其他の説明を御傾聴、賓頭盧尊者の像については殊に御下問ありて、興がらせ給うた。御繞香の後、同十時三十八分大佛殿中門御發遊ばされた。

奈良帝室博物館御成

大佛殿より直に奈良帝室博物館へ御成りになり。杉帝室博物館總長の御案内で、推古、天平、平安、鎌倉、室町、江戸時代の繪畫、彫刻、工藝美術品を御遊覽になり、時給、經机などに御感深くあらせられた。午前十一時二十一分、同館御發、奈良ホテルに御歸還遊ばされた。

春日神社御参拜

御發後、午後二時三十分ホテル御發、春日神社へ向はせられ、二の鳥居前にて御降車、江見春日神社宮司、大東彌宜の御出迎へをうけさせられ、参道御参進、神前に御玉串を捧げられて、御参拜遊ばされた。それより縣公會堂に成らせられ、極端近く御出ましになつて、ラツバの音に集ひ来る八百頭の神鹿の群を御覽せられて、御手づから餌を鹿に與へ給ひ、奈良名物鹿よせの奇觀には御機嫌のほどもうるはしく拜せられた。

奈良御發大阪御著

古都奈良に第二夜を過ごさせられた皇帝陛下には、二十一日午前十時、一戸奈良縣知事、石原奈良市長等の奉送を受けさせられて、特別列車にて奈良驛御發車、同五十分大阪淡路驛一番線ホームに御着遊ばされた。驛頭に於て、安井大阪府知事、田中第四師團參謀長其他の一般有資格者、及び大阪滿洲國商務官、辨公處參事官楊松氏以下辨公處員等約百名の最敬禮をうけさせられ、陸軍御通車禮裝にて御降車。長尾淡路驛長の御先行、日淺大鐵局長の御先導にて、支關車寄より御召自動車に御乗車、一路北へと向はせられた。蜿蜒たる數十臺の自動車は之れにつゞき、淡路驛前の奉迎大アーチを過ぎて、大阪府、市、商工會議所主催の奉迎午餐會場なる中之島中央公會堂に向はせられた。

大阪奉迎會御親臨

沿道は戸毎に日滿兩國旗が翻り、紅白の柵内に在つて奉迎するもの、府市の大學、専門學生、中小學校生徒、青年團、青訓生、在郷軍人、愛國婦人會、國防婦人會を始め各種團體員等十萬の多きに上り、る盛況裡に、自動車兩列は行進し。午前十一時二分、奉迎アーチの飾り美々しき中央公會堂に御着遊ばされた。

皇帝陛下には同所兩側に増列して奉迎する諸員の敬禮をうけられ、加々美大阪市長の御先導にて、エレベーターにて三階に進ませられ、御先著の東久邇第四師團長宮殿下と、三階エレベーターに乗降口にて、緊き御握手を御交はしになり、ついで御休所に於て師團長宮殿下と正式御會見の後、安井知事、加々美市長、森商工會頭に單獨懇談あり。府市の献上品を御覽あり。同十一時三十分、東久邇宮殿下と御同列にて、安井知事の御先導で、滿洲國々歌吹奏隊、參會者一同起立奉迎する裡を午餐會に御臨場、北側中央の御席に御着遊ばされた。皇帝陛下の御右側には東久邇宮殿下が御著席、御左側には隨員、接待員等、皇帝陛下の御向ひ側には安井知事、加々美市長、森會頭が著席、やがて主催者側を代表して安井知事は、參會者總起立のうちに、奉迎文を捧讀し、宴に移つてデザートコースに入るや、加々美市長の發聲にて、參會者一同、滿洲國皇帝陛下萬歳を奉唱した。午後零時五十分

閉塞、滿洲國々歌吹奏裡に、皇陛下には御休所に於て、東久通宮殿下と御歡談あり、安井知事、加々美市長、森會頭等を御引見、有難き御言葉を賜はつた。午後一時二十二分、東久通宮殿下と御別れの御挨拶を御交はしになり、議員本会裡に公會堂御發、同二十三分大阪驛に御著。日淺大鐵局長の御先導で、御召列車に御乗車、同三十三分大阪驛御發車、須磨の武庫離宮に向はせられた。

武庫離宮御著

この日神戸市に於ては、街々に日滿兩國旗が翻へり、市の西端西須磨から武庫離宮に至る沿道には、男女學生五千七百名が奉迎の市民と共に堵列してゐた。かくて御召列車は午後二時十五分、須磨驛に御著。步廊に於て御出迎へ申した湯澤兵庫縣知事、元尾稅關長、勝田神戸市長に賜謁。日淺大鐵局長の御先導で、ブリツチを御渡りになり、驛頭に奉迎する有資格者に御會釋を賜はりつゝ、自動車に御乗車、自動車兩海にて、同二十一分武庫離宮に入らせられた。

御道筋に堵列して奉迎した男女學生は手にせる日滿兩國旗を振りかざしつゝ、旗行列を行つて、離宮前に集合して萬歳を奉唱した。夜に入ると、神戸市背の山に大鐘を撞いた鐘山の電飾を始め、天神橋の奉迎電飾、全市の奉迎提灯、妙法寺川尻からあがる花火、須磨、林田兩區の青年團、青年學校生徒三千名の提灯行列など、數々の催しで御旅情を慰めた。皇陛下には、離宮の高臺に在る御旅館から、淡路島、紀淡海峡、さては前面の青松列れる白砂の美景、暮れ行く白帆の群れなど、いづれも御歡賞遊ばされたと承はる。

神戸御發航

二十二日は終日武庫離宮にて御靜養。二十三日朝、武庫離宮を御發、御召艦比叡にて神戸御出港、海路宮島へ向はせられた。

二十三日午前、皇陛下には、海軍御通稱禮裝を召され、九時五分自動車兩海にて、御旅館武庫離宮を御出陣、御道筋に堵列せる無慮十萬の奉送者の奉送裡に、神戸港第四突堤に向はせられた。御召艦比叡、儀禮艦白鷹のうち出す皇禮砲のとりくうちを、九時三十二分突堤に御著。元尾稅關長

の御先導で、兩側に居列ぶ三百五十餘名の特別奉送有資格者に御會釋を賜ひつゝ、白布の敷ける登艦橋から御乗艦遊ばされた。この時比叡の橋頭には滿洲國軍艦旗が掲げられ、軍樂隊は滿洲國々歌を奏した。

皇陛下には、井上比叡艦長の御先導で、艦内御座所に入らせ給ひ、湯澤兵庫縣知事、元尾稅關長、勝田神戸市長、堀本神戸海軍監督長、大西防備戰隊司令官に謁を賜ひ。等で甲板御座所へお出ましになつて、午前十時、軍艦マーチにつれて、御召艦は徐々離岸、儀禮艦の皇禮砲、内外船舶の奉送汽笛のなかを、港外へと進航、兵庫縣知事、神戸市長、稅關長等はランヂで港外まで御見送り申した。

御歸國に際して宮内府大臣謹話

皇陛下の神戸御發航に際し、入江宮内府次長は、神戸港第四突堤上屋貴賓室に於て、沈宮内府大臣謹話として次の如き謝辭を發表した。

皇陛下

貴國御訪問ノ盛舉ハ圓滿ニ完成シ、東京ヨリシテ京都、京都ヨリシテ奈良、奈良ヨリシテ大阪、今ヤ既ニ神戸ニ安著アラセラレ、即チ將ニ軍艦比叡ニ坐乗シテ大連ニ向ヒ出發セラレントス、此大

陛下

陛下ノ御來訪ハ固ヨリ東亞ノ歴史上從來未タ之レアラサルノ盛舉ニシテ、貴國ノ朝野、上下ノ熱誠ナル歡迎、隆車ヲ極メシ設備モ、亦歴史上ニ從來未タ之レアラサル盛況ナリ

天皇陛下

皇太后陛下懇切ニ相待タレ、御情誼懇懇ヲ極メラレ、各宮殿下屢々御歡會懇談ヲ疊ネラレ、親密常ヲ絶セサルナシ

貴國政府當局ニ於テモ、亦盛大ナル歡待アリ、當代ノ元老名流、擧ケテ上謁禮敬セサルハナク、陸海軍ノ將士、各地方ノ官公吏ハ勿論、團體民衆、及諸學校學生等、輦道ノ經過スル所熱誠ヲ竭クシテ歡呼シ、時ニ注カカキ大雨ニ値ヒシモ、露天ニ堵列シテ、直立不動ノ送迎ヲ爲ス等、此種ノ熱烈懇切ヲ極メタル表示ハ洵ニ

貴國大和魂ノ眞精神ノ發露ニシテ兩國至厚ノ友好、更ニ明確ナル微證ヲ顯ハスモノト謂フヘシ陛下ニハ聖懷暢悅深ク満足ヲ表セラル、益々兩國密切ノ睦誼ハ永久ニ一致スルコトヲ信ス、此ハ誠ニ我カ國臣民ノ同シク深ク感激シ、永遠ニ忘ル能ハサル所ノモノナリ、東京ニ於テハ文明ノ發達、輝煌燦爛トシテ日ニ新タニ異リ、而シテ歲ニ同シカラサルヲ見、京都ニ於テハ萬都ノ繁榮ヲ

維持シテ山川ノ風景ヲ賞観シ、且ニ深意アルヲ見、奈良ニ於テハ文化古物ノ保存餘力ヲ遺ササルヲ見、大阪ニ於テハ生計ノ繁榮、進歩ノ窮リナキヲ見タリ、又沿道過クル所、山、海隅ニ三尺ノ兒童教育ヲ受ケサルハナク、一寸ノ土地政治ノ施サレサルハナク、維新以來建設ノ功斯ノ如ク偉大ナルハ尤モ我カ

陛下ノ深ク注意シテ速ニ取ツテ法トスヘシトセラレシ所ノモノナリ

今ヤ歐洲ニ於テ平和ノ運動アル時ニ方リ、我カ兩國

皇室ノ偉然トシテ此ノ嘉會アリ、東京ニ在リテ觀兵式ヲ舉行セラレシ日ハ將ニ大雨アラムト報セラレシニ、時ニ至レハ沈陰忽チ開ケテ天地晴和トナリ、大典遂ニ成ルヲ告ケ、櫻花ノ無心ナルニ至ツテモ亦期ヲ早メテ開クコト數日ナリ、祥和ノ招徠スル所天意之カ爲ニ感動スルヲ見ルニ足ルナリ、此ヨリシテ東洋平和ノ礎石既ニ堅固ニ確立セラレタリ、願フ所ハ兩國カ並ヒ進ミテ益々強盛ノ域ニ臻リ、世界永久ノ平和ヲ謀ランコトヲ、斯ノ如キハ鄙人ノ切ニ希望シテ已マサル所ナリ、茲ニ貴國ヲ離ルルニ方リ、敬ンテ最高ノ謝意ヲ表ス、而シテ此ノ良好ナル印象ハ當ニ永ク無上ノ記念タルヘシ

明石瀬戸を御通過

【海軍省發表リ二十三日正午比叡艦長發電】本日海上風和やかにして浪靜かなる絶好の航海日和なり、白砂青松、六甲、摩耶の峯は次第に霞に煙りて、淡路島は近くなり、通ふ千鳥の鳴く聲も舷に聞え、滿洲國皇帝陛下の御旅情を慰め奉る。艦は午前十一時十分明石の瀬戸を通過す

粟島沖の鯛網御覽

御召艦の浪靜かなる瀬戸内海を巡航するを觀て、内海に散在する島々の上には、島民海岸に集うて、日滿兩國ノ旗を打ふりて奉送迎申上げた。かくて香川縣粟島沖の錨地に投錨されるや、午後五時三十分、采配の合圖によりて鯛網の網入れが始まつた。二艘の親船と九艘の子船には、筋骨逞しき八十二名の海國男兒が、描ひの漁衣に、日滿國旗を染めぬいた鉢巻姿で、八挺櫓の聲勇ましく漕ぎ出で、見る目も壯快の光景であつた。御召汽艇が漁場に進むと、網引きの聲も雄々しく、見る／＼金鯛網裡に躍るの壯觀を示して、皇帝陛下は御興深げに御覽あそばされ、午後六時十五分、御召艦に御歸艦遊ばされた。同夜粟島沖御泊の御旅情を慰め申し上げんとて、海岸には篝火天をこがし、提灯行列は蜿蜒と列つた。

空中分列、御前潜航

瀬戸内海の夜はいと平穩に明けて、二十四日午前六時三十八分、香川縣粟島沖の御假泊錨地を御發ありて、新練の嚴島に向はせられた。

高橋海軍中將の率ゐる第一艦隊旗艦山城以下三十餘隻の艦隊は、二十二日午後、宮島栗崎沖に投錨。二十四日午前十時、艦隊所屬の飛行機二十三機、根據地を出發して、同十時三十分、艦隊投錨位置の上空に勢揃ひをなして、艦隊を以て南下し、同十一時頃、安藝灘桂島附近に於て、御召艦を奉迎した。又、第一潜水艦隊は平田舟少將指揮の下に、錨地を出で、午前十一時四十分、宮島南方海面に於て御召艦と會遇し、各潜水艦乗組員登艇禮をなして後、同五十五分頃、御召艦の兩側を反航しつゝ潜航運動を開始し、各艦漸次艦首より潜航して、約五分の後再び、御前潜航を行ふた。而して第一艦隊の各艦艇は午後一時三十分、一齊投錨して奥に向ひ、艦隊運動の壯觀を御覽に供した。

嚴島御上陸

かくて午後一時、儀禮艦天龍及び第一艦隊旗艦山城以下三十餘隻の軍艦の、海上遙に布陣して奉迎する折柄、御召艦はしづかに嚴島栗崎沖合に著いた。奉迎の各艦にては滿艦飾、登艇禮、皇禮砲など盛大に行はれ、鈴木廣島縣知事、小磯第五師團長、藤田英鎧守府司令長官、其他の海陸將士、横山廣島市長、山縣廣島商工會議所會頭、林嚴島町長等は何れも御召艦に伺候して、皇帝陛下には、知事、師團長、鎮守府長官に調を賜うた。

午後二時十五分、海軍御通常禮裝にて、皇帝陛下には、御召艦に御移乗遊ばされて、嚴島大阪商船棧橋から嚴島に御上陸、御徒歩もて、奉迎のアーチを過ぎさせられて、沿道に増列する諸員の奉迎をうけさせられて、嚴島神社に御著、齋藤宮司の御先導で、神前に玉串を捧げて御參拜遊ばされた。

嚴島は名だゝる日本三景の一である。山海の風光美はいふ迄もない。神社の建造亦壯麗なものである。殊に海面に連る東西百四十八間の大廻廊から、有名な大鳥居を眺める佳景など、それらを飽かすながめさせられて、西出口から御退出遊ばされ、直に商船棧橋から御召艦に御乗艇、栗崎沖の御召艦

に御歸り遊ばされた。

御召艦西へ御發航

嚴島御覽で、御來訪の御日程は悉く終はらせられたのである。嚴島から御召艦に御歸艦後、御うちくつろぎの御模様で、艦上から瀬戸内海の風光を展望遊ばされたが、やがて夕暮になると、對岸なる御前海岸から百餘隻の小舟が漕ぎ出し、御召艦の北方の海面に行列横隊を造つて、名物燈籠流しの美観が展開された。燈籠船隊は赤に青に黄に、二萬餘の燈籠を流して、四邊の海面約二キロ平方は一帶に火の海と化した。其火の海の中から火花が打ちあげられて、御召艦の夜を飾るにふさはしき美観であつた。

午後八時七分、御召艦比叡は、警衛艦白雲、叢雲、薄雲の三艦を従へて、西に向つて其の航途に就いた。

關門海峡御通過

【海軍省發表】二十五日午前九時三十分井上比叡艦長發電「昨夜月光斜めにして星光清き周防灘を航過し、今朝午前五時部曉に達す、午前五時三十分より下關海峡に掛り、兩岸近く迫るところ、早朝なるに拘らず十數里に亘りて熱心なる市民は増列し國旗を打振り萬歳を唱へ、在港船舶や工場は汽笛を連吹して奉迎送の意を表し、關岡山口兩縣知事その他も汽艇にて奉送す、斯くて午前六時三十分無事海峡通過し終り大連に向ふ、玄海灘も湖水の如く靜かにして、平穩なる御航海を繼續遊ばさる、陛下御機嫌麗はしく在らせらる

春風胎蕩海上浪靜か

【海軍省發表】二十五日午後十時半井上比叡艦長發電「二十五日朝鮮南岸を西に航す、終日春風胎蕩海上波靜かにして紺碧の色一段と濃なり、午前十時、陛下には上甲板に出させられ、陽光麗なる後甲板を御散歩中、偶々特務艦野鳥の反航するに會す、同艦は旅順を發し吳に向ふ途中にて、特に本艦に近く針路を變じ、登舷禮式及び祝聲を三唱す、陛下には御展望臺より御答禮遊ばされ、續いて登舷、對馬の遠景を御賞覽あらせらる、沈宮内府大臣、張侍從武官長以下十數名の隨員を御相

手に輪投に打興じさせ給ふ、斯くて半日を上甲板にて御賞がせられ、午後は御書見後御入浴、日没後再び後甲板に成らせられ御機嫌海に麗しく拜し奉る、夕刻に近づき海上稍々霧氣ありて濟州島を見ず、日没後僅かに短時間の間カンラ山の頂きを認めて雙針す、本艦午後十時の位置——濟州島の西北二十五カイリ、實速十七ノット、二十六日午後十時三十分大連に入港の豫定。

新京御歸還

御召艦比叡は二十六日午後十時過ぎ、白雲、叢雲、薄雲に護られつゝ、大連港外に到着した。之れよりさき旅順から回航したる第十五驅逐隊は、海上に單縱陣を張りて、皇帝陛下の御安着を奉迎申上げた。同夜は海上に一夜過ごさせ給うた皇帝陛下には、翌二十七日午前六時二十分、御召艦内御居室に於て、南特命全權大使、鄰國務總理大臣以下の日滿兩國の大官に賜謁。艦長以下全員の萬歳奉唱裡に御退艦、同六時五十分大連驛御着、同七時大連驛御發、午後五時三十分、長の御旅を終へさせられて、雪直白なる新京へ御歸還遊ばされ、直に宮廷府に入らせられた。

滿洲國政府發表

滿洲國皇帝陛下には二十六日午後十二時大連御入港後、日本御滞在中の皇室の御歡待に對し御懇篤なる御親電を發せられたが、右に對し本日(二十七日)午後一時、天皇陛下より御鄭重なる御返電があつた、尙同午後六時宮内府御歸還後御安着の趣き更に御親電あらせられたる旨承る。

蘭花の香る迄

緒言

世界史上に一新紀元を劃し、東亞の形勢を一變せしめた平和の新天地の建設、それは滿洲國の建國であつた。

清朝滅亡後二十一年、一時は頗る數奇の御運命にあらせられたけれど、生れながらの皇帝陛下は、再び元首の位に即かせ給ふて、而も御祖先發祥の地に君臨して、王道樂土の光輝を掲げ給ふ。實に曠古の盛事といふべしである。今や滿洲國家の基礎漸く定り、國運亦隆昌に擡ふ。昭和十年四月、遙に海を航して、日本に來訪し給ひ、我皇室に歡を陳べさせ給うた。我上下、國を擧げて御歡迎申し、殊に兩國皇室の御親善愈々卒く、兩國々民の密接益々加はつた。東亞の天地には瑞光の瀦るものがある。

若き皇帝陛下は、天稟の徳器と、英明とに加ふるに、忍苦の裡に積まれた、完成の御人格とを體現せられて新らしき滿洲國に光輝ある文化政治を布き給ひ、建國僅に三歳にして新興國の發展は、驚異的の實現を示した。併し回顧すれば、滿蒙に曉の鐘聲響き、蘭花の香氣を放つまでには、いくたの波瀾重疊があつた。其間に處せられた皇帝陛下の御忍苦はまことに言ならぬものがあつた。

三百年の昔、滿洲より蹶起して北京に國都を奠め、清朝の國基を置かれてより、康熙帝の乾隆朝の盛時を経て、洪秀全の徒輩が内亂を企てた頃から、清朝の衰運は漸くに萌ざし、尋で阿片戰爭、清佛戰爭と事亂續いて、更に日清戰爭に大敗し、義和團事變に國歩の艱難を加へ、日露戰爭に於て東亞未曾有の大風雲を起したと共に、清朝の命脈は切迫し、遂に宣統三年の武昌革命の暴風雨のために、清朝没落の悲劇を展開した。其最後の清國皇帝は幼沖の天子で、七歳にして退位し、爾來二十年の荆の路を歩ませ給うた。新興滿洲國皇帝陛下は即ち斯の如き御忍苦の裡を経給うたのである。

戊戌政變から日露戰爭迄

日清戰後に至り、支那には一種の思想動向が發生促進した。而して西太后の垂簾政治を打倒せんとする運動は密々に起つた。之れ即ち當時の光緒皇帝をば床間の置物の如くした西太后の垂簾政治は、清國政治を墮落せしめ、國威を衰へしめる因であるとして、一大英斷を以て君側を清掃し、光緒帝の親政を主張し、政治界を革新せんとするものであつた。此計畫は未前に洩れて、西太后は女性ながら剛毅果斷を以て、其黨派を削し、光緒帝は瀛泉亭に幽閉となつた。之れを世に戊戌政變といふ。

戊戌政變後、西太后の獨裁政治は従前に比して一層の峻烈さを増し、保守主義の大官等は愈々跳梁を擅にし、極度な專制政治が行はれて、西洋人に對する一種不穩な氣勢が醸成された。此外人排斥の氣勢が、山東省の義和團蜂起となり、遂に明治三十三年の北清事變を惹起し、列國聯合軍の北京攻撃となり、西太后、光緒帝は西安に蒙塵、清朝は支離滅裂となつて了つた。

義和團事變の跡仕舞に男をあげたのは袁世凱であつた。其後に至り政界の革新を圖り、大に文化の向上につとめたは張之洞であつた。北の袁世凱、南の張之洞は時の二大勢力で、共に革新運動のため、異つた方面から之れを努めてゐたが、偶々日露戰爭が勃發して、從來強露として世界に恐れられてゐた偉大な露西亞が、東洋の小國であつた日本に手きびしく破られた事から、清國の革新運動者にある種の強い刺激を與へた事は争はれぬ事實である。

光緒帝、西太后崩御

男性勝りの西太后も、齡已に古稀を踰えたから、後圖を計つて、自分に代つて國家の柱石となる人物を物色して、醇親王を以て大政に參與する適任者となした。醇親王は、光緒帝の弟君で、西太后の愛する少壯皇族であつた。もとく醇王家は道光帝の第三皇子から興り、前代王爺の長子が即ち光緒帝、次が醇親王、王濤、洵貝勒等の他に數名の男女の御同胞があつた。而して滿洲皇帝陛下は醇親王の御嫡子であらせらるゝ。

醇親王の政治界に地位を占めらるゝと、袁世凱は之れを喜ばなかつた。それで清朝廷には内部の軋轢が相當複雑してゐたが、唯西太后の聲望威力が之れを壓して、漸くに事なきを得てゐたのであるが、裏面にむらがる密雲は何時かは事變を起すの性質を充分に含有してゐたのであつた。

朝廷内部の軋轢が濃厚なる時、民間には革命運動が餘程盛頭しかけてゐた。然るに明治四十一年十

一月十四日、即ち光緒三十四年十月二十一日、光緒帝御危篤が報せられ、翌二十二日には西太后の病氣が傳へられ、殆んど同時に崩御になつた。表面に現はれた處によれば、光緒帝の崩御せらるゝや、西太后は遺旨を受けて、皇太子溥儀を以て、統御を嗣がしめ、醇親王を監國攝政たらしむと、官報を以て公布され、其翌日、西太后の崩御を官報を以て公けに告げたのであつた。

革命の烽火

新帝は、明治四十一年十二月三十日、清朝第十二世の皇帝として、北京宮城乾清宮大和殿に於て、古式に則り大典を行はせられ、改元して宣統と稱せられ、幼少の御身を以て帝位に即させられたのである。御父醇親王は攝政の任に當りて張之洞を顧問として大政を執り給ひ、則ち袁世凱を放逐せられたが、複雑極まる支那宮中及び府中の諸勢力は相變らず暗闘連續の氣味があり、かてゝ加へて張之洞の歿後、滿人と漢人との融和が缺けて、北京朝廷の權威は次第々々に墜つるに引きかへ、民権の勃興が著るしく育成して、内外患交々起つて、清朝の前途は益々暗黒が加はる一方であつた。

此時に、北京政府は財政困難を切りぬけるために、外債募集の計畫を樹て、全國の鐵道を國有として、之れを擔保に巨額の借金をする目論見をたてたが、此鐵道國有論が、民間の不平を勃發する一因ともなつた。夫れは政府が鐵道を國有として、之れを擔保にして、外國から借金をするのは、やがて支那の鐵道が外國人の手中に陥るものであるとなし、利権回収を標榜する民論に最も低觸したものとされた。殊に四川省民は暴動を起したが、四川總督が高壓手段を取つたため、却つて之れによつて反抗熱を高め、延いては四方の清朝討滅運動者が俄然隨所に立ち上つて、甚だ容易ならぬ状態とはなつた。之れより先きに、孫逸仙や黃興は、各自革命運動を試みてゐたが、今や其時機到れりとして、長江沿岸の武昌漢口を親よの計畫をたて、武漢地方の新式軍隊と提携して、四川省の擾亂を好機として、革命の烽火をあげたのである。

清朝遂に滅ぶ

宣統三年八月十九日、遂に武昌に於て革命が勃發した。武昌に在る歩兵二箇聯隊、砲兵一箇聯隊、

工兵一大隊が反亂して、省政廳を焚き、武昌は革命軍の掌中に歸した。尋で革命軍は長江を踰えて、漢陽を陥れ、兵工廠製造局を占領し、又、漢水を渡つて漢口を占領し、二十一日公然獨立を宣言して、黎元洪を都督に推し、武昌に新政府を置いて中華民國政府と稱し、其勢猖獗にして官兵之れを擊破し得ざるのみか潰滅して逃走するといふ有様で、見る／＼内に支那全土に亘つて、革命の風雲は瀰漫されたのであつた。

かかる國難に當りて、此動亂を處理し得べき手腕家は袁世凱の外に求むべからざると考へられた。之れによりて一旦放逐せられた袁世凱は再び起用されて、運命の鍵を握る重要地位に置かれたのであるが、彼れの怪腕は之れより縱横に揮はれて、清朝の滅亡に拍車をかけたのであつた。

袁世凱の復活に反映して、醇親王は攝政の職を退かれた。革命軍は燎原の火の如き猛勢で、江蘇、浙江、福建、山東、安徽、湖南、湖北、廣西、四川、河南、直隸十一省の代表者が、漢口の英租界に第一回の代表會議を開き、更に南京が革命軍の手に歸した後、こゝに第二回代表會議が開かれ、十月二十九日の南京再度會議で、孫文を中華民國臨時大總統に、黎元洪を副大總統に選舉し、其翌年、民國元年即ち明治四十五年一月に臨時民國政府が組織された。

袁はこの革命政府と妥協をした。時運は清朝に非なるものに傾いて、遂には絶望の淵へと落ち込ませして了うた。即ち民國元年二月十二日、清帝退位の上諭が出で、清朝初まつて以來二百九十七年にしてこゝに敢なく滅亡したのであつた。宣統帝時に僅に七歳でおはした。政權は新共和政府に移り、退位後の宣統帝は大清皇帝の尊號を保たれたけれど、それは世襲でなく、又宮城を明け渡して、頤和園萬壽山に移られ、共和政府は年額として四百萬元の歳費を支給する事に定めたのであつた。

軍閥跳梁時代

革命政府と妥協して、清朝を顛覆した袁世凱はいつしか自ら帝位について君臨せんとした。併し諸外國から詰問され、國內にも反對氣勢が強くと、之れがために一旦出した帝制をば取消すの宣言まで發するに至り、其野望の實現を見ずして袁は不歸の客となつたのである。

袁の歿後、支那の政界には益々暗雲の低く去來するものがあつた。諸種の勢力が交々錯雜して、常に紛擾に紛擾を重ねてゐた。時には張勳の復辟運動が勃起して、突如宣統帝の復辟斷行を企圖した

けれど、これは時運非にして、其運動ははかなくも三日天下に終り、其失敗がためむひては、年少におはす宣統帝をば一層危惧に陥せざるゝの運命に陥れた。

張の復讐運動の夜は、支那に軍閥の跋扈時代を招來した。即ち直隸派と安徽派との反目嫉視から安直戦争が発生し、直隸派は捷つて、其勢力を東三省に伸しかけたから、こゝに奉天派と衝突して奉直戦争が惹起した。

第一次奉直戦争は、直隸軍の呉佩孚が張作霖の軍を破つて、直隸派の勝利となり、敗れた奉天派は東三省に封鎖されて了つた。呉佩孚は此勝利に乗じて、更に方向を轉じて、江西に進出して、革命派の孫文等の北伐軍をば撃破するために、陳炯明を買収して、察返りをうたさしめて、孫文をして亡命するに至らしめた。

しかし走馬燈の如き支那の政界は、片時も安定する時がないのである。孫文は亡命して走り、ソビエツト政府と結託して、其力を借り、民國十三年一月、第一次民黨全國代表を廣東に集めて、聯露容共の旗幟をあげた。即ちソビエツトと提携して、中國共産黨の國民黨合流を容れるの議を立て、大に其氣勢を張つたのである。

一方奉天派を驅逐した直隸派は、勢に乗じて、天下の政權を握り、統領の曹錕を立て、大總統にしたが、其横暴に反感を抱く者が各方面から起り、之れに奉天派が結合して、第二次奉直戦争が起つた。此第二次奉直戦争は可成りの激戦があり、遂に馮玉祥の反旗を翻へしたために、直隸軍は總敗北となり、馮玉祥は北京に入りてクーデターを敢行した。

馮玉祥の北京に於けるクーデターは、宣統帝の御身近くにも降りかゝつたのである。此時、大總統曹錕を監禁した馮は、其部下の國民軍をして宮城を包圍せしめ、強制的に宣統帝の宮城退去を迫り、帝は醇王府に入られ、ついで身を以て脱出して、日本公使館に落ちのびさせられたのであつた。

宮城御退去

宣統帝は、御名は溥儀と申され光緒三十二年、光緒帝の皇弟醇親王の長子として御出生なされたのである。さきに光緒帝、西太后の相ついで崩御さるゝや、幼冲の身を以て大統を繼がれ、御父母醇王が攝政せられたが、變化極まりなき支那政變に果せられて、宣統三年の武昌革命の趨く處、溥儀は

大勢に壓せられて、帝は退位をなされたが、此時もまだ年少であらせられた。棲み馴れ給ひし宮殿を出でさせられて、頤和園に移り給ひ、侍臣を御相手の寂しき御生活に入らせられた。併し待遇は帝位の時そのまゝで、優待費は年に四百萬兩、従來の宦官は其まゝ、禁衛軍も現状のまゝといふので、數百の宦官宮女にかしづかれて居られたのであつた。

民國六年の張勳の復辟運動が失敗した結果、革命政府の壓迫の手は一段ときびしくなつた。民國十一年、十七歳の御時、前直隸北道々臺榮源の女、公主鴻秋を迎へて妃と爲し、大婚の式をあげられ、鴻秋妃はテニス、音楽に堪能でみせられるから、帝は新しい家庭生活に入らせられて、其日を送り給うた。

隣棲に月日を送り給ふとて、帝王學を修める事は怠らせ給はぬ。東洋史、漢籍、日本語、洋書と學び給ひ、殊に英人ジョンストンについて、世界的智識を吸収された、思想については胡適の指導をうけられた。

然るに民國十三年(大正十三年)の秋、第二次奉直戦争の結果、北京クーデターが行はれ、馮玉祥の部下鹿鍾麟が軍隊を率ゐて、突如紫禁城に侵入し、禁衛軍の武装を解除し、宣統帝が皇帝の稱號を有し、北京宮城内に居らせらるゝ事は、共和政體に取つて害があるとして、宮城退去を強要した。帝は妃と共に、北京の西北煤山に在る醇親王邸へ移らせられた。

日本公使館へ蒙塵

十一月五日、國民軍の強要によりて、醇親王邸に退去せられた帝の身邊は決して安穩ではなかつた。之れによりて醇親王邸を出で、日本公使館へ蒙塵せらるゝ事になつた。時の日本公使は芳澤謙吉氏であつた。芳澤氏當時の模様を後に人に語りたる處によると。

大正十三年十一月、奉直戦争の半ば、所謂馮玉祥のクーデターなるものが勃發した當時、先に定められた清國皇帝優待條件に一大修正を加へやうと新政府が企てゝゐる許りでなく、どうやら皇帝陛下の御身邊が氣遣はれるとの報に接し、私とオランダ公使、英國公使の三人が外交部に赴き、王正廷氏に會つて忠告したに拘はらず、其後馮玉祥の部將鹿鍾麟が手兵を率ゐて宮中に入り、皇帝陛下に退去を迫つた爲、皇帝陛下以下擧げて醇親王邸に移られ、いよゝ危険だといふことであ

つた所が同月二十九日の夕、突然皇帝陛下の師傅英國人ジョンストン氏が來訪して、私に宣統帝を朝謁す。こはくれまいかと頼んで来た。私は二三秒考へた。だが事態は急迫してゐるらしい。何より皇帝陛下の御身でありながら、といふ人情が先に立つて、御引受けませうと答へた。ジョンストン氏は喜んで歸ると、間もなく日本公使館敷地内に在る日本守備隊の竹本隊長が訪ねて来て、今宣統帝が自分の所に來られてゐられるが、何卒よろしくといふ。實はその日か或は前日であつたか、皇帝陛下は、ジョンストン氏や大傅の陳寶琛氏に伴はれて、公使館敷地内のドイツ病院に逃げて來られ、そこから竹本隊長の家に見えられてゐるといふのであつた。無論ジョンストン氏と竹本中佐との間には連絡がとれてゐたらしい。さういふ譯で、私は早速中佐に案内されて隊長の官舎に行き、應接室で、皇帝陛下に御會ひした。

扱、其日は十一月にしては珍らしく蒙古風の吹き荒ぶ廣藪丈の日であつた。皇帝陛下は唯一人で竹本隊長宅にゐられ、暫らく公使館内に置いて貰へまいかとの御言葉である。私はかしこまつて早速皇帝陛下を約一町も離れた同一屋敷内の私の官邸に御案内申し上げ、二階の我々家族だけの食堂だつた小部屋に御連れ申した。

先づ赤葡萄酒をおすゝめして、御元氣の御恢復を祈り、この公使館に御滞留あれば御心配御無用と申し上げた處、皇帝陛下には深く謝意を述べられたが、一方ならぬ御疲勞の御様子であつた。

それから取り敢へず、此旨を日本の幣原外務大臣と、北京の首席公使たるオランダ公使に報告した。翌日夕方、皇后陛下も御無事に公使館に御迎へする事が出来、皇帝陛下及び御家族その從者等の爲に、官舎の二階にある三部屋を提供した。しかし何分手狭で御不自由と察し、翌年一月になつて清野參事官の官舎をあけて、多少の修繕を加へ、改めて皇帝陛下の御部屋に供した。

在りし日には四百餘州に君臨せられた帝は、日本公使館内の御託住居に、奉侍する者男四名女六名といふ風で、傳へる處によればベッドの下にはいつもピストル二挺を忍ばし給うて御警戒あつたといふ。而もこの日本公使館も永く安住せらるゝ事ができなくなつて、公使館を脱出して天津へと御潜行なつたのである。

天津御潜行

日本公使館に御避難遊ばされて、しばしは御安泰であつたが、帝の日本公使館に在はす事は新政府の好まぬ處であつた。それに門番は支那巡査であつたし、同じ馮軍が北京城内に屯してゐる上に、支那側が刺客を放つたといふ流言もあるから、其御身邊には危険が迫つてゐたのである。それで民國十四年（大正十四年）二月二十三日の夜、更に北京を脱出して、天津御潜行の冒險を決定された。

芳澤公使は一月十五日、スケートで脚を挫いて病臥してゐた。二月二十三日は風寒い、静かな夜であつた。帝は龍々芳澤公使の病床を訪れさせられて、過去三ヶ月に於ける優待に對して厚く謝禮を述べられ、今夜公使館を脱出して、天津に向くの計畫ある旨を語られ、別離の御言葉があつた。語られる帝も、聞く公使も共に涙を止める事ができなかつたと云ふ。

帝は背廣洋服に黒眼鏡、毛布にくるまるといふ普通の御服装で、池部公使館書記官が御案内申して、北京停車場から天津行の三等列車に搭乗された。車内には馮の軍隊がゐたから、池部書記官は我友人なりと稱して、友人は支那語が餘りできぬと許つて、態と其儘にして發車するのを見送つた。

天の加護あり、帝は無事に天津に御着きになり、大和ホテルへ入られた。此報知の來る迄の心配といふものはなかつた。池部書記官は公使館へ歸るや、皇后と皇太后の母上に帝の北京御出發を告げたが、天津御安著の報に接する迄は、人々の心は決して静まらなかつた。已に御安著の報に接したから、一兩日後、池部書記官は、皇后を普通の娘の如く裝うて御伴申し、同じく天津の大和ホテルに御つれ申した。後幾ばくもなく、御兩人とも、日本租界の張園の古い館を買ひ求めて御入りになり、忙しきながら、稍安らかな御生活を御送りになつた。

天津の御生活

革命政府が約束した年金四百萬兩は最初の内だけしか實行されず、すぐには忘れられたやうに絶へて了つてゐたのである。従つて侍臣侍女の數も減り、日常の御料理の數も減つた。天津に於ける其御生活は到底宮城に在はした頃とは比較にはならないけれど、外國の領事、武官等とよく御食事を共になされ、よく御交際もなされて、天津時代は相當御自由であらせられた。而して帝王の學を修められる事は決して怠り給はなかつた。陳寶琛氏から王者の學を、鄭孝胥氏から支那の歴史を、ジョンストン氏から語學を、更に書と畫とを學ばせられ、皇后陛下も家庭教師についていろ／＼の事を學ばせられ、

デニス、ゴルフの御對手をなされてゐた。

斯の如くして御座れば年月を送り給ふ間も、飽えず帝王の修業を磨きみになる事を御忘れにならなかつたが、遂に天運は再びひらいて、光輝ある御生活に移らせられる時期が来たのである。それはいふ迄もない満洲事變であつた。

満洲事變勃發まで

奉天戦争の最中に、孫文は第二次北伐軍を起したが、北方の局面が急變して、北京の段祺瑞から時局善後會議のために入京を促し來つたから、之れに臨むべく病を押して天津に來ると、病勢急に革つて逝去した。孫文歿後の國民黨の實権は若き蔣介石に移り、孫文の遺志をついで民國十五年に第三次北伐を決行した。

一方奉天直戦に捷利を得た奉天の張作霖は、曹錕、吳佩孚を驅逐して軍閥の第一人者となり、直隸、江蘇、山東にまで其手を伸じた。之れに對立するものは陝西と河南とを持つ馮玉祥と、浙江の孫傳芳であつたが、孫傳芳が先づ反奉天派と連絡して、奉天派に當つた。そこで張作霖は馮と不戰協定を爲し、其兵を山海關に集めてゐると、思ひがけなく我部將の郭松齡が反旗を翻へして、一時は張作霖の身の上も危うかつたが、僅かの所で郭松齡は没落潰滅して了つた。

馮玉祥は郭松齡が一時勢ひを得た頃には、之れに乗じて北京から奉天派の勢力を一掃しやうとしたから、之れで張馮の戦端となり、馮は郭の誠亡と共に下野して暫らく露國に外遊した。奉天派はかかる状態の下に完全に北京政權を握り得たのである。やがて孫傳芳一派も、革命軍に對抗するため却つて奉天派と提携する事になり、吳佩孚一派も此提携に参加したために、かかる集合した勢力が北方の勢力となつたが、之れに對抗する蔣介石の北伐軍が、廣東を發して、こゝに支那は南北の大きな衝突を生じたのである。

蔣介石の北伐軍は、吳佩孚を破り、孫傳芳を破り、南京を奪ひ、長江一帯を征伏し、揚子江を渡つて北進をつゞけ、濟南を攻撃し、其勢ひ當るべからざるものがあつた。

一方張作霖は大勢は餘り面白くなかつたけれど、年來の宿望たる大元帥就任式を北京に舉げて得意があつた。處が民國十七年四月、革命軍が長驅して大華北京に迫つたので、六月四日北京を引揚げ

奉天に還る時、途中で列車が爆發して最後を遂げたのである。

張作霖死後其長男張景惠が、東三省の主權者となつた。彼れが國民政府に使喚されて、排日侮日の運動に没頭した結果、遂に昭和六年九月十八日の柳條溝事件を起して、所謂満洲事變となつた事は、餘り新しい事であるから、多くの人の夙知する處であらう。

満洲事變

満洲事變の原因と云ふのは種々雑多にある。其近因だけでも、日支兩國に起つた好ましからぬ支那の態度から生じた事件は、大小三百餘件に及ぶ。中にも駐支公使アグレン問題、萬寶山事件、支那官兵の中村大尉虐殺事件の如きは其著名なものであつた。満洲事變の發生した年だけでも、七月以降九月迄に、満洲で發生した事件は十二を數へ、皆侮日排日の行爲であつた。凡て支那側殊に滿蒙に於ける對日態度は極度の挑戰的であつて、日支間の状態は次第に尖鋭化して來た。そこへ、九月十八日の奉天附近の滿鐵線路爆破事件が突發したのであつた。

昭和六年九月十八日午後十時三十分頃、奉天の北郊六キロの地點に於て、突如轟然たる異様の爆音を聞いた。我線路警備隊は、其實狀を視るべく驅け向ふと、支那正規兵が之れに對して猛烈な射撃を加へ、尙其援兵と覺ししが續々急進し來る模様であるから、こゝに我兵との間に銃火が交へられ、續いて北大營の攻撃となり、更に奉天、長春、吉林、鳳凰城と滿鐵沿線各地に及んで、我兵は到る處に敵を撃破し驅逐し、昭和七年一月、營々錦州入城をなして、こゝに張學良政府は潰滅して、滿洲新建國の機運が濃厚になつたのである。

満洲建國の議定る

之れよりさき新機運を洞見して、滿洲獨立を宣言したのは吉林省の熙洽氏であつた。彼れは當時吉林の東北邊防軍副司令官公署の參謀長であつたが、滿洲事變發生後、僅に十數日にして、吉林省政府の組織大綱を定め、自ら長官に任じ、學良政権や南京政府との關係を斷つて、獨立を宣言した。而して彼れは宣統帝擁立の意圖があつて、每朝帝の御寫眞に向つて最敬禮をなしてゐたといふ。

張學良の軍隊が全く關内から驅逐されたから、滿蒙三千萬の民衆は新國家を建設するの意愈々堅く、東北四名の政府代表者は新年祝賀の名の下に、奉天に集り、歴史的な建國會議を開いた。それは昭和七年二月十六日の事である。

連日此會議は繼續されて、二月二十五日を以て、愈々滿洲國を建て、元首を執政となし、之れに宣統帝を仰ぐ事に決した。併し此時は宣統帝の稱號を用ゐず、箇人溥儀氏の資格に於て元首と推戴する事を決議した。

首都は長春、年號は大同、國旗は新五色旗、三月一日を建國、同月九日に建國式を舉行する事にした。茲に於て宣統帝は新執政として滿洲國に推戴せられ給ふ事になり、三月七日、元首推戴正使の一行は、折しも湯崗子にみられる溥儀氏に會見して、滿蒙三千萬の民衆を代表して、其出處を乞うたのである。

天津御脱出

昭和六年九月の滿洲事變突發は、池中に潛む神龍を迎へる風雲のおとづれであつた。日本軍は隨所に支那兵を撃破して、破竹の勢ひを以て滿洲の野を席捲してゐた。滿蒙の民衆の内には自治準備委員會が組織せられた。其委員會から密使が天津に來つて、張園を訪づれた事がある。爾時帝は邸内の芝生で、妃を對手にテニスをしてゐたが、氣輕にラケットを棄て、應接室に獨立準備委員の密使と會はれた。さうして元首就任の内諾を請はられたのであつたが、併し此時、帝は容易に内諾をなさなかつた。

其處で密使は、羅振玉氏や鄭孝胥氏を説いた。清朝の遺臣で、帝の御幼少時代から側近して、苦樂を共にした人達は、帝の滿洲國の元首に推戴され給ふに對して、朗らかな感じを抱いたは想像に難くない。之れに加ふるに川島芳子氏の活躍もあり、鴻秋妃も帝の元首就任の已むなき事情を御洞察にもなつた。かくて神龍を迎ふるべき雲の行き交ひは漸く急になつた時、何者の仕業か、帝に爆彈を送つて人々を驚かした椿事が生じた。又帝の御生命をねらふ暗殺隊が派遣されたなどの流説が行はれた。十一月八日に天津軍變が起り、其擾亂直後は時々銃火に驚かされるために、天津市内はゴツタ返へしてゐた。十一日の夜一臺の自動車が出で、日本租界を通過して天津埠頭に走つた。車中には中折に釣鐘マントを被られた氣高い青年紳士の姿がうかゞへる。それは宣統帝であつた。

自動車は郵船波止場に停まると、其處には我が比治山丸が待機の姿勢でゐる。自動車から降りた數名の黒い影が比治山丸に乗り移つた。すると船は靜に白河を下つて行く。翌日の拂曉には軍糧城を通るのであるが、こゝには數千の支那兵が駐屯してゐるから、萬一の用意のために西田船長は帝の居られる船室に鐵板や疊を以て防禦の用意をなした。深夜の舟航に岸にゐる支那兵は停れの信號をする。船長は探へてゐる支那人運轉手を退けて、自ら代つて舵を取り、船の速力をゆるめて止まるが如く見せかけて、相手の油斷するを見すまし、急に船足を早めて河を降つた。それと見るや支那兵はあわてゝ小銃を浴せかけたが、幸に損傷もなく、其朝まだ早い内に塘沽に著く事を得た。

遙に沖合に碇泊してゐる渡路丸に乗り替へ、船路遙かに營口に向はせられた。其時帝の隨行は鄭孝胥氏と共に鄭垂氏外に二三氏のみであつた。

新元首國都入り

營口に著かせられた帝は、湯崗子に赴かれ、湯崗子から又もや旅順に移られ、滯留數週間の後、昭和七年三月七日再び湯崗子に發足せられたのであるが、同地對岸間に於て、滿洲國元首推戴正使一行と會見せられて、こゝに執政就任を快諾せられたのである。而して翌八日午前八時、長春に於て舉行される執政就任式に臨場せらるゝべく、特別列車で湯崗子を出發せられた。

長春入りは八日午後三時であつた。この日、朝來小雪が降つて可なり寒かつたが、長春の全市は五色國旗で埋め盡くされてゐた。長春驛前の一角には、清朝遺臣三百餘名が、黃地に吉林八旗舊臣迎大清宣統帝陛下と大書した大幟を立て、土下座をなし、左手に新滿洲國の近衛兵が塔列してゐるのが目立つた。新元首は國歌吹奏裡に驛を出でさせられ、沿道歡呼の中を、三時半、市政公署に入りて、各大臣及び近親者に接見遊ばされたのであつた。

滿洲建國式

大同元年（昭和七年）三月九日を以て、新興滿洲國は元首を迎へて盛大な建國の大典を、新國都長春（新京）に行うた。

式場は市政公署の一室で、参列の光榮に浴した内外の大官名士等は狭しとばかり参集した。やがて莊重な音楽裡に、新元首は侍從式部官長張海鵬氏の先導で式場に臨まれ、莊嚴な執政就任の儀が行はれた。ついで東北新政委員會長張景惠氏が、御箱入り黄金色の襟紗についで黄金製の滿洲國璽を恭しく新元首に捧呈し、同委員職式殿氏は、黄金でこしらへた滿洲國執政印と刻した璽を捧呈した。羅振玉氏は新元首に代つて次の如き執政宣言を朗讀した。

人類はすべからず道徳を重んずべきに、種族の別あり。即ち他を抑制し、己を稱揚す。その道徳たるや、甚だ薄し。人類はすべからず仁愛を重んずべきに、國際間の争ひあり。即ち人を損じ、己を利す。その仁愛たるや、亦薄し。今我國を建立するに當り、道徳仁愛を以て主となし、種族の別及び國際間の争ひを除去なせば、まさに王道樂土の實現を見るべし。およそ我國民たる者、努めてこれを勉勵せよ。

大同元年三月三日

滿洲國執政宣言

執政親見の禮行はれ、之れに對して執政の答禮があり、後に滿鐵總裁内田康哉伯は外人を代表して、祝詞を朗讀し、一同敬禮、午後三時二十分建國式は終つた。

帝政實施

滿洲事變の審議が國際聯盟に持出され、認識不足の國際聯盟が、實情に即せぬ決議をしたり、調査委員の派遣となつたり、リットン報告となつたりして、屢々其誤謬を繰り返へしてゐる内に、我日本帝國は公然滿洲國を承認して、復た之れがために認識不足の國際聯盟を脱退したりした事は、餘りに世上に知れ渡つた事である。

如何なる批評なりとも、事實の現存する前には屈伏せざるを得ない。新興滿洲國に對する臆測批評はさまざまであつて、日本を除くの外列強は、大抵見當外れの豫測を敢てしてゐた。併し現存する事實は次第に明確な成果を示しつゝ進んだ。即ち治安の維持、諸建設の進展は著々として行はれ、さし難事と思はれた匪賊討伐も意外に早く掃蕩が進捗され、經濟、政治、軍事ともに格段に進展し、

其理想とせる王道樂土は歩一歩と近づきつゝあるを思はしめた。近代國家の體容は愈々備はり、日滿提携の緊密は益々加はるものがある。こゝに於て三千萬の民衆の熱意は一層加はりて、薄儀執政を仰いで帝制實現を請願するに至つた。

之れよりさき已に建國の當時から帝制實施の説があつたが、當時の運動は清朝復辟を主とするものが大勢力を占めてゐたから、民族協和を基本とする滿洲國の建國精神に顧みて、諸種の誤解を生ぜん事を慮つて、執政々治に體容をよつたのであるが、建國以來幾ばくもあらざる内に、其基礎は定り、もはや半歩として動かすべからざるものになつた折柄、三千萬民衆の聲として帝制實施を請願するに至つたのであるから、所謂清朝復辟にあらずして、滿洲三千万民衆の民意を天意となして、こゝに帝制實施となつたのである。

大同三年（昭和九年）三月一日、新帝都新京に於て、即位改元の大典は嚴肅に行はれた。

新皇帝陛下は、南郊に昊天を祭るべく、同日午前八時、順天廣場の式典場に親臨、郊祭の儀を行ひ、正午から宮廷府内勳民樓に於て登極の儀を行はせられ、即位改元の詔を煥發せられ、康徳元年が甫まつた。慶賀は二日、三日とつゞけられ、五日には軍旗親授式を挙げさせられた。其即位詔書は、

奉天承運ノ皇帝詔シテ曰ク
我國、基ヲ肇メ、國ヲ滿洲ト號シテ茲ニ二年、天意ノ愛民ニ原ツキ、友邦ノ仗義ニ頼リ、其始メ凶殘虐ヲ肆ニシ、安忍兵ヲ阻ミ、無辜天ニ虐フモ、能ク自ラ振フコトナカリシニ、日本帝國群衆ヲ同シテ避ケス、衆咎ヲ犯シテ辭セス、事ハ解懸ニ等シク、功ハ援瀾ニ同シ、朕親躬ヲ以テ、乃チ天眷ヲ承ケ、我ニ尺柄ヲ假シ、我ニ丘民ヲ授ケ、流亡瀕タ集マリ、其謳歌ヲ興シ、兵氣潛銷シ、化シテ日月ト爲ル、夫レ皇天親ナク、惟テ德是レ輔ク、而シテ生民欲アリ、主ナケレハ乃チ亂ル、位ヲ正サンコトヲ願請シ、詢謀僉ナ同シ、敢テ天命ヲ敬承セサランヤ、其大同三年三月一日ヲ以テ、皇帝ノ位ニ即キ、改メテ康徳元年トナシ、仍ホ滿洲ノ國號ヲ用ユ、世難未タ交キス、何ソ敢テ苟安セン、有ラユル守國ノ遠圖ト、經邦ノ長策トハ、當ニ日本帝國ト協力同心、以テ永固ツ期スヘシ、凡ソ統治ノ綱要成立ノ約章ハ、一ニ其舊ノ如シ、國中ノ人民種族各異ルモ、此レヨリ心ヲ推シテ腹ニ置キ、利害與ニ共ニス、此言ヲ渝ヘサル敵日ノ如キ有リ、朕カ命ヲ替ルコトナカレ、咸ラシテ聞知セシム

御名 御璽

康徳元年三月一日

國務總理大臣
各部大臣

滿洲特使親書捧呈

滿洲國皇帝陛下には、帝制實施、御即位御披露の特使として、國務總理大臣鄭孝胥、財政部大臣熙洽兩氏を我國に派遣せられ、兩使は昭和九年三月二十六日入京、二十七日、参内して、鳳凰の間に於て、天皇陛下に拜謁仰付けられ、皇帝の親書を捧呈し、桐の間に於て、皇后陛下に謁見の上、宮中御午餐會の要を賜はり、長き邊りでは兩特使一行に對し、三月三十一日まで帝室の貴賓として御待遇あらせられた。

秩父宮殿下御渡滿

我皇室に於かせられては、滿洲國帝制實施に就き、皇帝陛下に對して、御祝意を表せらるゝ爲に、秩父宮殿下を御名代として、御差遣遊ばされた。殿下には式部長官、林權助男以下の隨員を從へさせられ、昭和九年六月二日、東京驛御出發、門司より軍艦足柄に御乗艦遊ばされて、五日大連御入港、六日皇帝陛下親しく御出迎への中に新京驛に御着、こゝに初の御對面と共に固き御握手を御交はし遊ばされた。

七日午前、御名代宮殿下は、宮廷府を御訪問、皇帝陛下に對し、御親書並に大勳位菊花大綬章を、皇后陛下に勳一等寶冠章を捧呈遊ばされ、陛下から懇ろなる感謝の御辭があつた。尋で皇帝陛下は御名代宮殿下の御旅節を御答訪あり。正午、宮廷府に於て、御午餐會が催された。八日には御名代宮殿下は皇帝陛下と御同列で、滿洲國軍の觀兵式に御成りあり。御滞京七日間にして同月十三日新京驛御發車、滿洲各地御訪問の後、十八日東京驛に御歸着、天皇陛下に御對顔の上委曲御復命遊ばされた。

滿洲國皇帝日本御來訪

日滿親善愈々堅く、東洋平和の基礎漸く成つた。滿洲國皇帝陛下には、我皇室の御厚誼を深謝し、御名代宮殿下御差遣の御答禮をかねて、昭和十年四月の陽春を期して、遠く海を航して、日本に御來訪あらせられた。我上下の御歡迎の盛舉は別項の記事に之れを述べたから、ついで參照せられたい。こゝに、日滿の提携益々緊密なることを旨と筆を擱く。(完)

昭和十年五月五日 印刷
昭和十年五月十日 發行
昭和十年五月廿五日 改訂版印刷
昭和十年六月一日 改訂版發行

編纂者 帝國軍備研究會

發行兼印刷者 櫻井庄吉

東京市本郷區森川町七十五番地

頒布所 帝國軍備研究會
東京市本郷區森川町七十五番地
振替貯金東京三三七八番

不許複製

583
147

滿洲帝國國歌

天地內有了新滿洲
 新滿洲便是新天地
 頂天立地無苦無憂
 造成我國家 只有親愛並無怨仇
 人民三千萬 人民三千萬
 縱加十倍也得自由 重仁義尚禮讓
 使我身修 家已齊國已治
 此外何求 近之則與世界同化
 遠之則與天地同流

maestoso (♩ = 60)

天地內 有了新滿洲 新滿洲
 tien ti nei yu hao hsin man chou hsin man chou

便是新天地 頂天立地 無苦無憂
 pien shih hsin tien ti ting tien li ti wu ku wu yu

造成我國家 只有親愛 並無怨仇
 tsao cheng wo kuo chia chih yu chin ai ping wu yuan chou

人民三千萬 人民三千萬 縱加十倍
 jen min san chien wan jen min san chien wan tsung chia shih pei

也得自由 重仁義 尚禮讓 使我身修
 yeh iē tzū yu chung jen i shang li jang shih wo shen hau

家已齊 國已治 此外何求 近之則與
 chia i chi kuo i chih tzu wai ho chiu chin chih tze yu

世界同化 遠之則與 天地同流
 shih chieh tung hua yuan chih tze yu tien ti tung liu

365
144

滿洲帝國國歌

天地內有了新滿洲
 新滿洲便是新天地
 頂天立地無苦無憂
 造成我國家 只有親愛並無怨仇
 人民三千萬 人民三千萬
 縱加十倍也得自由 重仁義尚禮讓
 使我身修 家已齊國已治
 此外何求 近之則與世界同化
 遠之則與天地同流

maestoso (♩ = 66)
 天地內 有了新滿洲 新滿洲
 tien ti nei yu liao hsin man chou hsin man chou
 便是新天地 頂天立地 無苦無憂
 pien shih hsin tien ti ting tien li ti wu ku wu yu
 造成我國家 只有親愛 並無怨仇
 tsao cheng wu kuo chia chih yu chin ai ping wu yuan chiu
 人民三千萬 人民三千萬 縱加十倍
 jen min san chien wan jen min san chien wan tung chia shih pei
 也得自由 重仁義 尚禮讓 使我身修
 yeh te tsü yu chung jen i shang li jang shih wo shen hau
 家已齊 國已治 此外何求 近之則與
 chia i chi kuo i chih tsü wai ho chiu chin chih te yü
 世界同化 遠之則與 天地同流
 shih chieh tung hua yüan chih te yü tien ti tung liu

終

